

グローバル COE プログラム
生存基盤持続型の発展を目指す地域研究拠点



平成 19 年度
自己点検評価報告書

目次

1. はじめに 1
2. プログラムの目標 2
3. 運営体制の整備 4
 - 3.1 運営体制と教育研究プログラム
 - 3.2 委員会・部会組織と人員配置
 - 3.3 事務局体制の整備
 - 3.4 平成 19 年度予算と配分状況
4. 運営委員会の活動 9
 - 4.1 概要
 - 4.2 グローバル COE 助教および研究員（グローバル COE）の選考と採用
5. 人材育成センターの活動 14
 - 5.1 大学院教育部会
 - 5.2 若手養成・研究部会
6. 研究イニシアティブ 28
 - 6.1 パラダイム研究会
 - 6.2 研究イニシアティブ 1
 - 6.3 研究イニシアティブ 2
 - 6.4 研究イニシアティブ 3
 - 6.5 研究イニシアティブ 4
7. 広報成果発信部会 45
 - 7.1 研究成果発信
 - 7.2 ニュースレター
 - 7.3 ウェブページ
8. 拠点基盤整備部会 54
 - 8.1 情報基盤
 - 8.2 データベース
 - 8.3 図書
 - 8.4 観測機器・関連設備の整備
 - 8.5 展望 59

9. 国際アドバイザリーボード 60

10. 自己点検評価委員会 61

11. おわりにー今後の展望ー 63

Appendix G-COE 19年度業績リスト

1. はじめに

本プログラムは、アジア・アフリカ地域の持続的発展に関する学際的研究を、グローバルで長期的な視野から、多面的に行うために創出された。われわれは、アジア・アフリカの地域研究に携わる研究者と、先端技術の開発に関わる科学者との学問的対話を促進するために、「持続型生存基盤パラダイム」という新しい考え方を提案し、地球温暖化のアジア・アフリカの地域社会への影響といった緊急の課題に対応しつつ、ローカルな、あるいはリージョナルな持続的発展径路を追究したいと考える。

本プログラムの主幹部局である東南アジア研究所は、強い学際的な志向を持った京都大学の地域研究の伝統のなかで発展してきた。本プログラムは、アジア・アフリカ地域研究研究科が東南アジア研究所と協力して行った21世紀COEプログラム(2002-2007年)の成果を受け継ぎ、フィールドワークと臨地教育にもとづく大学院教育を継続するとともに、「持続型生存基盤コース」を新設し、若手研究者の養成を図る。さらに、生存圏研究所などから森林科学・木質科学、気象学・大気圏科学、物質循環論、エネルギー科学など「サステナビリティ学」に関連するハードサイエンスの領域を加えて、地域研究における科学的研究の幅を広げる。それによって、先端科学技術の知識を、伝統的な地域研究を支えてきた生態学、政治学・経済学、社会学・人類学、歴史学、医学の知識と融合させ、これまでの体制よりもはるかに幅広い人文科学、社会科学、自然科学の諸分野につうじた地域研究の専門家や科学者を養成する。

初年度の仕事は、7月にキックオフ・ミーティングを行い、夏期休暇中に事務局を立ち上げて運営体制を構築し、助教、研究員5名を国際公募によって採用することで始まり、3月の第二回公募でその数を合計9名に増やすとともに、初年度を総括する国際シンポジウムを開催することで終了した。

9月以降、若手養成のためのプログラム策定、大学院教育の充実化、図書などの基盤整備が進められ、研究会活動が本格化し、ホームページなどの広報活動が充実するとともに、東南アジア、アフリカでの4回を含む、合計10回の国際シンポジウム、ワークショップの開催が実現した。これらの活動をつうじて、メンバーのあいだにパラダイム形成の方向が共有されつつあるように思われる。

もう一つの特筆すべき進展は、大学院アジア・アフリカ地域研究研究科において、持続型生存基盤研究講座を設置する方向での制度改革の努力が進められたことである。新専攻の設置など、今後の進展は概算要求の結果を待たねばならないが、本プログラムがその実現を約束した「持続型生存基盤コース」の新設よりもさらに本格的な制度化が大胆に試みられている。

このように、共同研究によるパラダイム形成と人材育成のための制度改革を両輪とする本プログラムの構想は順調なスタートを切った。次年度においては、個別研究をまとめたワーキングペーパーの刊行を本格化させるとともに、パラダイム形成においても最初の研究成果を出す予定である。

平成20年5月31日

拠点リーダー 杉原 薫

2. プログラムの目標

パラダイムの形成

本拠点形成の第一の目的は、自然生態、政治経済、社会文化を包摂した総合的地域研究に人類の生存基盤を左右する先端的科学技術研究を融合させて、「持続型生存基盤パラダイム」研究を創成することである。

近年のアジア・アフリカにおける総合的地域研究の成果から、人間の活動範囲が政治経済のグローバリゼーションによって地理的・空間的に拡大しつつあることに加え、地域はグローバリゼーションの単なる受け手ではなく、地域間交流などを通じて、グローバリゼーションそのものに影響を与える能動的な主体であることが明らかになった。一方、現代社会の要請に応え、地球環境問題、エネルギー問題を視野に入れた 21 世紀世界を展望するには、資本主義が前提としてきた私的所有権からの発想を相対化し、地表から宇宙までの空間的広がりをもった「生存圏」の物質・エネルギー循環に関わる研究を取り込み、ローカルにもグローバルにも持続可能で、かつ、科学技術・社会制度・価値観の考察を包摂した、新たな生存基盤持続型発展径路を構築するためのパラダイムを創出する必要がある。

具体的には以下の 4 つの研究イニシアティブを通じてパラダイム研究を推進する。イニシアティブ 1 「環境・技術・制度の長期ダイナミクス」は、人類が「生存基盤の確保」を主たる課題としてきた社会から、生活水準の向上や人口の増加、国力の増大を目指す「開発」型の社会に変化してきた過程を歴史的に解明し、先端科学の知見とつきあわせることによって、現代のアジア・アフリカ地域の環境、技術、制度にかかわる問題群を再検討する。イニシアティブ 2 「人と自然の共生研究」は、従来の地域に根ざした資源利用システム研究と、物質・エネルギー循環の危機を背景にした新しい研究・知見を融合させて、社会文化的に実現可能な資源利用システムを提言する。イニシアティブ 3 「地域生存基盤の再生研究」では、より大きな一地域（スマトラ・パレンバンなど）をとりあげ、森林の再生、第一次産品輸出経済の発展と周囲の植生、制度、雇用、地方政治との絡み合いを総合的に考察し、持続型発展のモデルを追究する。イニシアティブ 4 「地域の知的潜在力研究」は、人類の多様性を保証してきた文化、価値観のなかに、生存基盤の持続的発展の要因を探る。

成果の発信

若手研究者を中心に研究助成やフィールドワーク支援を行うとともに、数十人規模のメンバーが恒常的に参加する研究会や国際ワークショップを頻繁に開催して、パラダイム形成とその浸透を図る。研究会やワークショップでの報告を改稿したものをワーキングペーパーとして順次刊行し、本格的な成果につなげる。分野によって成果の発信の形態は異なるが、英文、和文での査読付き雑誌への投稿と、編著書の刊行の二つが基本であり、とくに文理融合型の研究の発信は、後者を中心に考えている。

本プログラムによる主要な刊行物に加えて、『東南アジア研究』、『アジア・アフリカ地域研究』、*Kyoto Review of Southeast Asia*, *African Study Monographs* などの発進力を高め、個人研究の英文出版を援助する。ホームページにも、ワーキングペーパーや関連するデータを公開する。関連図書の全国利用も強力に推進する。

教育・人材養成

本拠点の第二の目的は、パラダイム形成の現場に触れた、本格的な文理融合型研究を担う若手研究者を養成することである。本プログラムの特徴は、21世紀COEプログラム「世界を先導する総合的地域研究拠点の形成」によってアジア・アフリカ地域に設置した14ヶ所のフィールド・ステーションを継承・発展させ、フィールドワークから国際ワークショップにいたるまで、研究パラダイム形成の現場に博士後期課程の大学院生・ポスドク研究員・助教からなる若手研究者を主体的に参加させることによって、人材育成と研究を融合させるところにある。そのために、「生存基盤地域研究人材育成センター」を設置して、グローバルな人材発掘からはじめ、研究・教育を経て、国際キャリア支援にいたる、文理融合型の国際的人材育成システムを構築する。

本プログラムは、大学院アジア・アフリカ地域研究研究科のなかに「持続型生存基盤研究コース」を作り、新しいパラダイムのもとでの人材育成の制度化に努める。初年度は1科目、2年度目は4科目の講義が新設され、3年度以降さらに拡大される予定である。

また、海外の地域研究拠点（コーネル大学・ロンドン大学・ライデン大学・オーストラリア国立大学等）と連携し、アカデミック・ディベートを通じて地域研究や専門分野を超えたパラダイム形成能力を養成する。国際的発信能力強化のために、国際学術雑誌への論文掲載や単行本出版のための支援を行うとともに、コミュニケーション能力の向上や研究会・プロジェクトの企画運営能力の向上を目的とした人材育成プログラムを推進する。

これらのプログラムによって、これまでの実績以上の博士修了者を、世界の学術界を先導する大学・研究機関そして世界で活躍する民間企業に送り込む。また、国際連合、世界銀行、世界自然保護連合などの国際機関、政府行政機関、世界各地で活動を展開しているNGOにもアジア・アフリカ研究の専門家を輩出し、持続型生存基盤の構築に向けた国際的な公論形成に貢献する人材や、地域に根ざした技術開発をリードできる人材を供給する。

世界拠点の形成

生存基盤地域研究人材育成センターは、現在大学院アジア・アフリカ地域研究研究科が、「持続型生存基盤講座」を新設する方向で制度改革を試みているのを全面的にサポートしている。

本プログラム終了後、このセンターを、京都大学の将来構想と連動させ、持続型生存基盤パラダイムによる科学技術研究融合型地域研究の展開と戦略的な人材育成を目的とする京都大学地域研究グローバルユニット（仮称）として再編する。本ユニットは、アジア・アフリカ地域だけでなく欧米を含む世界の関連教育研究ネットワークの中心となる。将来的には学内の新たな教育研究組織として発展・改組を構想している。

持続型生存基盤パラダイムの創出により、地域研究が国際的に活性化され、世界の学術イニシアティブにおける地域研究の地位が向上し、さらにこれらを通じて日本の総合的学術研究の国際的プレゼンスが強化される。また国際機関などにおける環境・エネルギー研究をアジア・アフリカ地域の実態を踏まえたものにし、アジア・アフリカの地域社会における価値観や政策を持続型発展へと方向づけ、それらの転換における日本の発信力の向上に貢献する。

3. 運営体制の整備

3.1 運営体制と教育研究プログラム

本プログラムは、地域研究を核とした幅広い文理融合による持続型生存基盤パラダイムの構築、パラダイム形成の現場における教育・人材育成、そしてこれらを通じた世界に類を見ない学際融合の拠点形成を目指すものである。したがって、運営・組織体制の整備にあたって以下の3点に注意した。

- 1) プログラムに参加する研究者の研究領域間、そして所属する教育研究組織間での円滑で効率的な連携を推進すること
- 2) 国内での教育・人材育成とアジア・アフリカ地域でのフィールドワークの現場での教育・人材育成をリンクさせること
- 3) 最先端の研究活動と大学院教育・若手研究者の育成をリンクさせること

そのために、本プログラムでは、図3-1に示す運営体制を整備した。

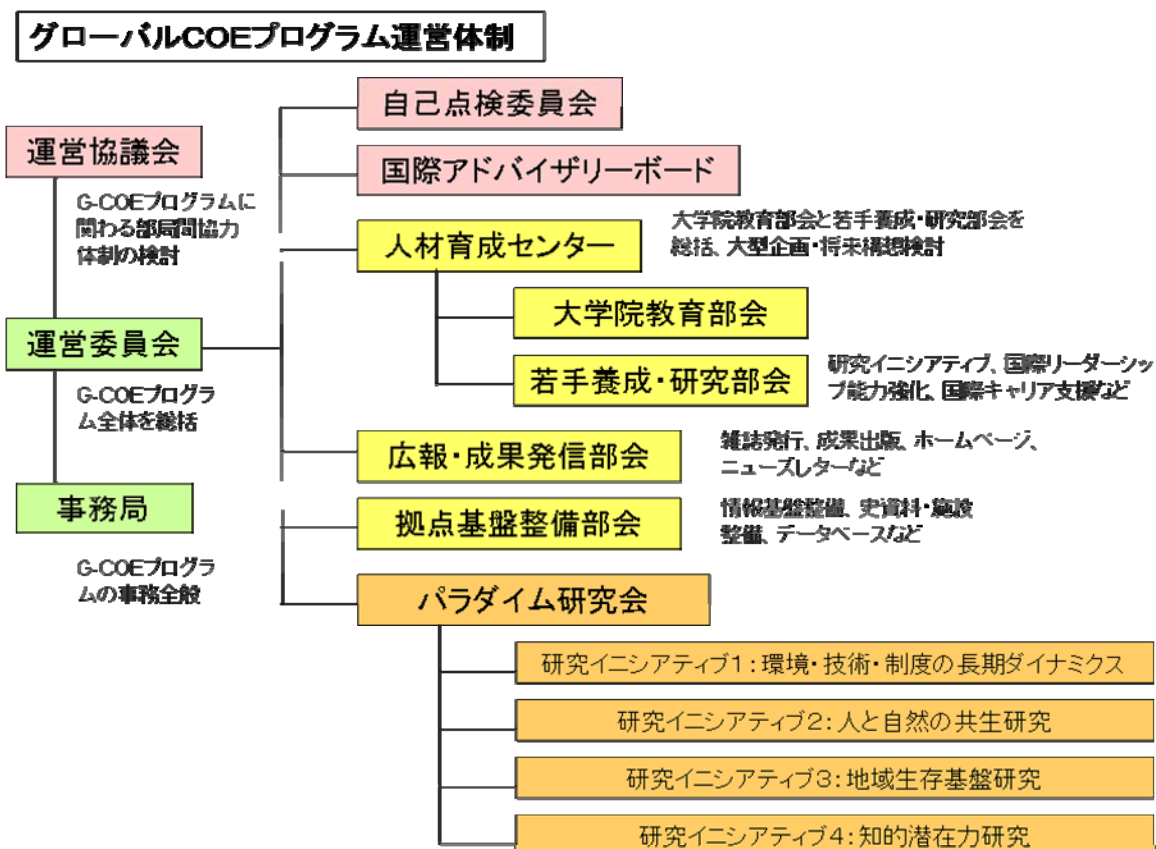


図3-1 本プログラムの運営体制

まず、本プログラム全体を総括し、本プログラム運営の基本方針に関する意思決定を担う運営委員会を設置した。また、運営委員会のもとに、運営協議会と事務局を設置した。運営協議会は、本プログラムに参加している学内9部局（東南アジア研究所、大学院アジア・アフリカ地域研究研究科、生存圏研究所、地域研究統合情報センター、アフリカ地域研究資料センター、人文科学研究所、生存基盤科学研究ユニット、大学院農学研究科、大学院工学研究科）の代表からなり、組織を横断する活動に関して運営委員会に助言を与えることを目的としている。事務局は、運営委員会の指示に基づいて、本プログラムの事務全般を担当する。

本プログラムの運営を実際に担うのは、人材育成センターと大学院教育部会、若手養成・研究部会、広報成果発信部会、拠点基盤整備部会の4つの部会である。これらのセンター・部会が、大学院教育制度の整備、海外拠点を活用した臨地教育、若手研究者のイニシアティブによる研究活動の支援などの人材育成と拠点整備を担っている。



図3-2 海外拠点

また研究活動については、持続型生存基盤パラダイムの構築に向けて、研究領域を横断するテーマを掲げる4つの研究イニシアティブを立ち上げるとともに、それらを統合するためにパラダイム研究会を設置した。パラダイム研究会、4つの研究イニシ

アティブ、さらにそのもとで展開される個別の研究プロジェクトと重層的な研究推進体制とすることにより、研究領域間の融合を促進している。

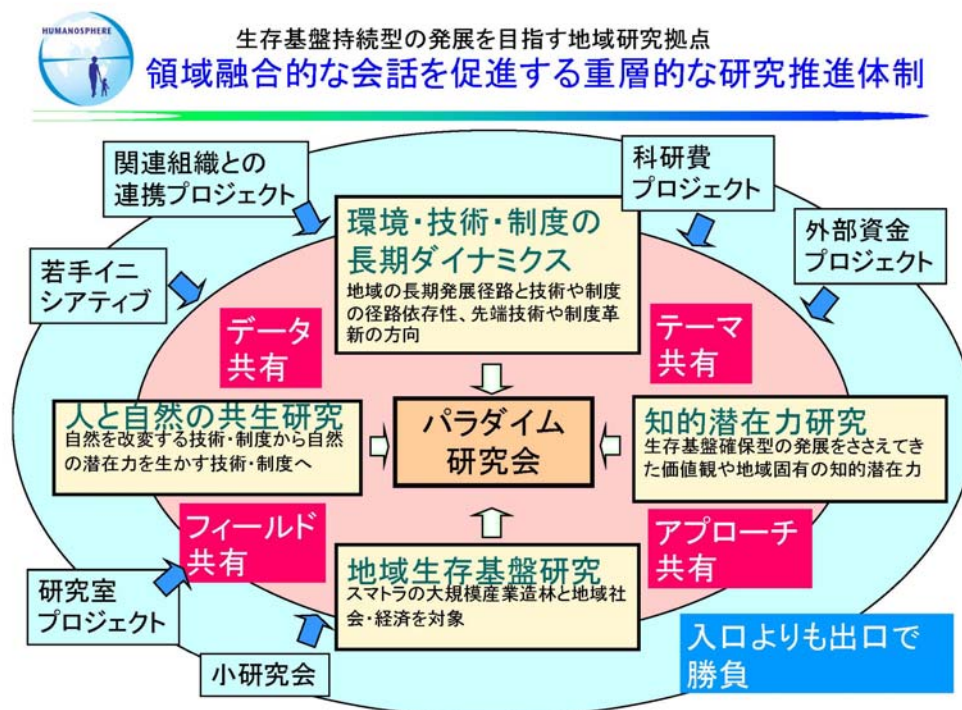


図 3-3 研究推進体制

さらに、これらの諸活動を点検・評価するために、自己点検委員会と国際アドバイザーボードを設置した。自己点検委員会は、毎年度、自己点検評価報告書を取りまとめ、プログラム運営の絶えざる改善に努める。また国際的に活躍する研究者をメンバーとする国際アドバイザーボードからは、世界に類を見ない学際融合の拠点形成の推進に向けたアドバイスをお願いしている。

3.2 委員会・部会組織と人員配置

本プログラムは、23名の事業推進担当者に加えて、東南アジア研究所、大学院アジア・アフリカ地域研究研究科、生存圏研究所、地域研究統合情報センター等に所属する多数の教員、研究員および大学院生の協力によって実施している。そこで、これらの関係者全員がいずれかの研究イニシアティブに参加し、研究活動を展開するとともに、中核メンバーはセンター・部会に参加し、本プログラムの運営を担っている。いずれのイニシアティブ、あるいはセンター・部会に関しても、人員配置が研究組織・領域横断的になるよう配慮した。

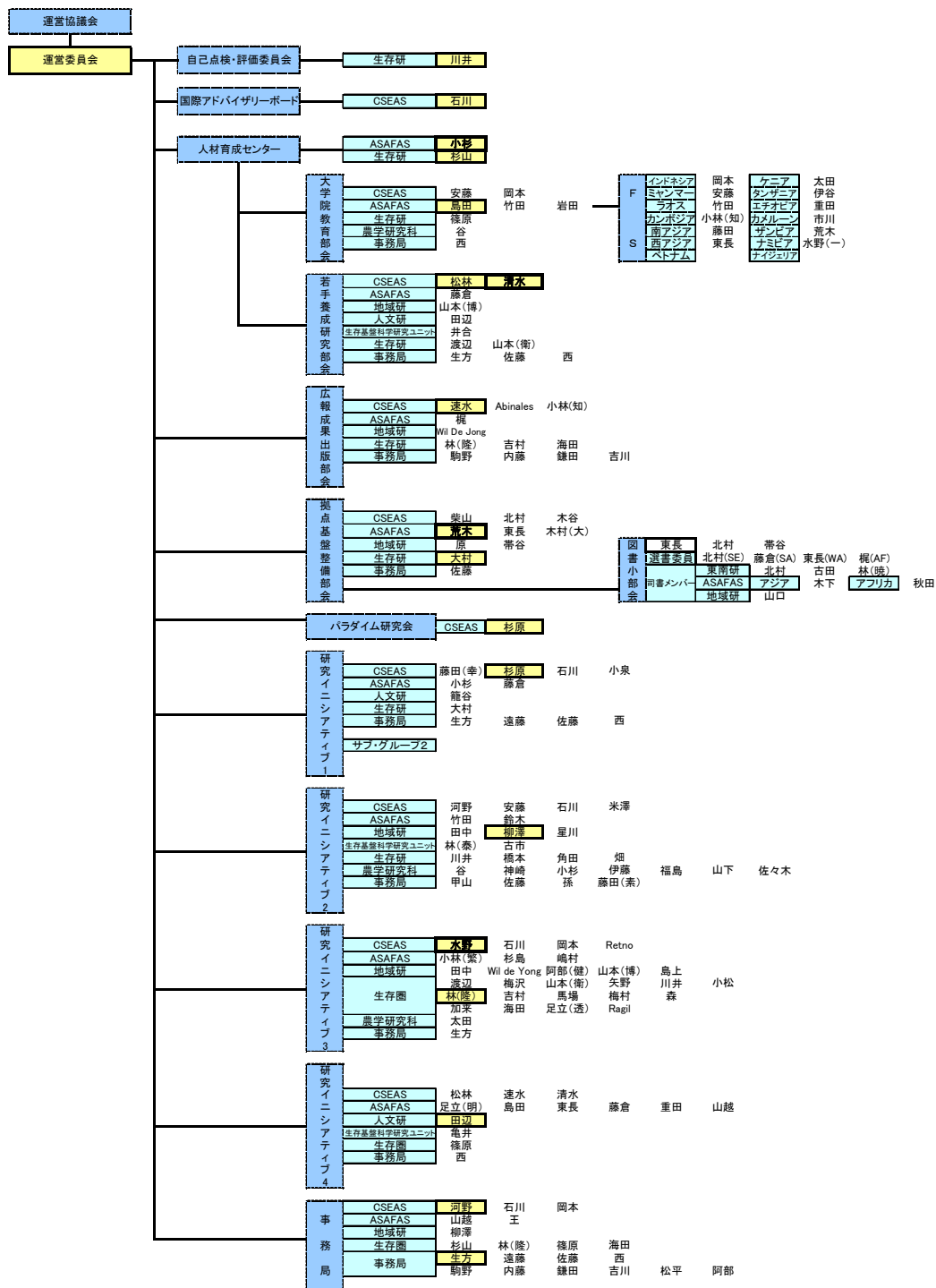


図3-4 委員会・部会組織と人員配置

3.3 事務局体制の整備

事務局は、総務、会計などの一般事務のみならず、情報基盤やホームページ、ニューズレターなど、拠点形成にとって不可欠な研究支援業務の補佐も担っている。そこで、複数の教員、研究員に加えて、一般事務に事務補佐員2名、研究支援業務に技術

補佐員 4 名を配置した。事業推進の日常活動のエンジンとして、健全に機能している。

3.4 平成 19 年度予算と配分状況

平成 19 年度予算は、直接経費 121,300 千円、間接経費 16,195 千円で、合計 137,495 千円であった。これを、プログラム開始後、4つの部会と研究グループ、事務局で配分した。ほぼ当初の予定通りに予算を執行することができた。

表 3-1 平成 19 年度予算と配分状況 (単位：円)

	直接経費						間接経費	合計	
	大学院教育 部会	若手養成・研 究部会	広報・成果出 版部会	拠点基盤整 備部会	研究グループ	事務局			小計
設備備品費	0	0	800,000	600,000	0	0	1,400,000	0	1,400,000
支出額	3,185,265	899,300	2,471,933	4,332,645	1,775,960	1,114,542	13,779,645	6,130,654	19,910,299
(差引)	-3,185,265	-899,300	-1,671,933	4,932,645	-1,775,960	-1,114,542	-3,714,355	-6,130,654	-9,845,009
国内旅費	0	0	0	0	0	0	0	0	0
支出額	0	784,735	10,260	0	753,450	196,780	1,745,225	0	1,745,225
(差引)	0	-784,735	-10,260	0	-753,450	-196,780	-1,745,225	0	-1,745,225
外国旅費	12,187,000	0	0	400,000	0	0	12,587,000	0	12,587,000
支出額	10,351,360	8,239,155	0	0	8,373,510	6,818,336	33,782,361	250,110	34,032,471
(差引)	1,835,640	-8,239,155	0	400,000	-8,373,510	-6,818,336	-21,195,361	-250,110	-21,445,471
人件費	500,000	0	1,500,000	0	0	17,800,000	19,800,000	7,195,000	26,995,000
支出額	1,352,865	525,000	1,399,060	1,474,853	2,439,967	16,547,225	23,738,970	168,000	23,906,970
(差引)	-852,865	-525,000	100,940	-1,474,853	-2,439,967	1,252,775	-3,938,970	7,027,000	3,088,030
事業費	7,113,000	0	7,700,000	15,000,000	0	9,000,000	38,813,000	9,000,000	47,813,000
支出額	6,108,050	4,591,394	7,534,149	17,270,378	10,255,881	2,493,947	48,253,799	9,646,236	57,900,035
(差引)	1,004,950	-4,591,394	165,851	32,270,378	-10,255,881	6,506,053	25,099,957	-646,236	24,453,721
その他	1,700,000	15,000,000	0	7,000,000	25,000,000	0	48,700,000	0	48,700,000
支出額	0	0	0	0	0	0	0	0	0
(差引)	1,700,000	15,000,000	0	7,000,000	25,000,000	0	48,700,000	0	48,700,000
予算額合計	21,500,000	15,000,000	10,000,000	23,000,000	25,000,000	26,800,000	121,300,000	16,195,000	137,495,000
支出額合計	20,997,540	15,039,584	11,415,402	23,077,876	23,598,768	27,170,830	121,300,000	16,195,000	137,495,000
(差引)	502,460	-39,584	-1,415,402	-77,876	1,401,232	-370,830	0	0	0

4. 運営委員会の活動

4.1 概要

運営委員会は、拠点リーダーと人材育成センター、4つの部会、自己点検委員会、国際アドバイザーボードの担当者、パラダイム研究会と4つの研究イニシアティブの幹事、事務局長によって構成し、本プログラムの活動計画について審議するとともに、活動内容を確認した。プログラム開始以来、毎月一回、定例で開催した。開催日は以下のとおりである。

第1回運営委員会	2007年7月10日
第2回運営委員会	2007年8月6日
第3回運営委員会	2007年9月3日
第4回運営委員会	2007年10月1日
第5回運営委員会	2007年11月5日
第6回運営委員会	2007年12月3日
第7回運営委員会	2008年1月7日
第8回運営委員会	2008年2月12日
第9回運営委員会	2008年3月3日

4.2 グローバルCOE助教および研究員（グローバルCOE）の選考と採用

本プログラムを推進するために、2007年8月と2008年1月に、グローバルCOE助教および研究員（グローバルCOE）を公募し、2007年10月1日にグローバルCOE助教1名と研究員（グローバルCOE）3名、2008年4月1日にグローバルCOE助教2名と研究員（グローバルCOE）4名を採用した。2007年10月1日に採用した研究員（グローバルCOE）1名は、2008年3月31日付けで埼玉大学経済学部専任講師として異動したので、2008年4月1日現在の人員は、グローバルCOE助教3名と研究員（グローバルCOE）6名である。

2007年8月公募の公募要領

公募要領

1. 職名・募集員数

1) COE助教：3名

COE助教には、国際的にアピールできる研究業績と持続型生存基盤パラダイム研究の形成に対する強い関心を併せもつ人材を求めます。

2) 研究員（COE）：7名

研究員（COE）には、文理融合の研究アプローチを幅広く自らの研究に取り込もうとするチャレンジ精神を有する人材を期待します。

※両職種に同時に応募することは妨げません。

2. 所属

文部科学省グローバルCOEプログラム「生存基盤持続型の発展を目指す地域研究拠点」（京都大

学・東南アジア研究所)

3. 採用期間

採用時より原則 2 年間。ただし、特に優秀と認められる場合には 1 年単位で採用期間を延長する場合があります。尚、雇用契約は年度単位での契約になります。

4. 職務内容

- 1) 本プログラムの趣旨に適う研究を遂行し、その成果を発表すること
- 2) 本プログラム運営のための各種業務

5. 応募資格

- 1) 持続型生存基盤パラダイム研究を担う国際的な研究者となることが期待される者
- 2) 採用時において、博士号を取得している者、あるいは、本プログラムに直接関連する特に優秀な研究実績を有する者
- 3) 採用時において、本プログラムの COE 助教・研究員 (COE) として以外に常勤の職を有さない者
- 4) 採用時において、日本学術振興会特別研究員その他のフェローシップなど類いの助成を受けていない者
- 5) 採用時において、上記職務の遂行が可能となる地域に居住する者
- 6) 国籍は問わないが、日常会話程度の日本語能力を有することが望ましい

6. 労働条件および待遇

- 1) COE 助教は週 40 時間勤務 (月～金曜日、裁量労働制)、研究員 (COE) は週 30 時間勤務 (月～金曜日) です。
- 2) 給与および各種手当については、COE 助教は特定有期雇用教職員、研究員 (COE) は時間雇用教職員として、本学の基準にしたがった額を支給します。COE 助教は、助教と同程度、研究員 (COE) は年収 300 万円程度です。
- 3) COE 助教・研究員 (COE) は、本学教職員として、保険制度に加入し、また本学図書館や学術情報ネットワーク等の施設利用資格が与えられます。

7. 応募書類

- 1) 応募用紙 (書式あり)
- 2) 履歴書 (参考書式あり)
- 3) 研究業績一覧 (査読の有無を明記してください)
- 4) 競争的資金の獲得状況 (代表/分担の別を明記してください)
- 5) 主要な研究成果 (3 点以内で、写しの提出も可とする)
- 6) これまでの主たる研究成果の概要 (2000 字以内)
- 7) これまでの主たる海外における活動状況と国際発信力に関する自己アピール (国際研究集会・臨地研究・語学能力等、1000 字以内)
- 8) 持続型生存基盤パラダイム研究を遂行するうえでの抱負 (2000 字以内)
- 9) 応募者の学識・研究について照会可能な方 2 名の氏名・所属・連絡先 (住所・電話番号・E-mail アドレス)

※COE 助教と研究員 (COE) の両職種に応募する場合には、別々に応募書類を作成し、同一封筒で提出してください。ただし、その場合は、上記の「5) 主要な研究成果」については 1 部で結構です。

※応募の為に提出された書類は返却しません

8. 応募期限

2007年8月17日（金）必着

9. 選考過程と採用通知、採用予定日

8月24日までに、書類審査の結果を、採否を問わずE-mailにて通知します。書類審査の合格者には、8月30日・31日に面接試験を実施します。面接試験は英語によるプレゼンテーションを含みます。その後、面接試験の合格者に対してのみ、9月上旬に内定通知を送付します。採用予定日は10月1日です。なお、面接のための旅費は支給しません。

※適任者がいない場合には、採用を見合わせることもあります

10. 書類請求および提出先

- 1) 応募用紙などは、東南アジア研究所ホームページのグローバルCOE「生存基盤持続型の発展を目指す地域研究拠点」Provisional Websiteからダウンロードすることができます。また、下記のグローバルCOEプログラム事務局に請求することもできます。
- 2) すべての応募書類は、グローバルCOEプログラム事務局宛として、簡易書留で郵送してください。その際、封筒表に「グローバルCOE若手研究者応募書類在中」と朱書きしてください。また、別途、応募用紙をE-mailの添付ファイル（簡易書留で郵送して）で下記アドレスまで送付してください。その際、件名は「助教応募用紙」あるいは「研究員応募用紙」としてください。

〒606 - 8501

京都府京都市左京区吉田下阿達町 46

京都大学東南アジア研究所

グローバルCOEプログラム事務局

Tel. 075-753-7358

Fax. 075-753-7350

E-mail gcoe_office@cseas.kyoto-u.ac.jp

11. 問い合わせ先

上記事務局に、E-mailで問い合わせてください。

12. その他：

- 1) 採用期間中に、他の常勤職への採用が決定された場合は、その着任日の一ヶ月前までに拠点リーダーにその旨を通知してください。この場合、その職への着任の前日をもって、COE助教あるいは研究員（COE）の職を解きます。
- 2) 本プログラムによって得た研究成果を公表する場合には、その旨を必ず明記してください。

以上

2008年1月公募の公募要領

公募要領

1. 職名・募集員数

- 1) グローバルCOE助教：1名

グローバルCOE助教には、国際的にアピールできる研究業績と持続型生存基盤パラダイム研究の形成に対する強い関心を併せもつ人材を求めます。

- 2) 研究員（グローバルCOE）：4名

研究員（グローバルCOE）には、文理融合の研究アプローチを幅広く自らの研究に取り込もうとするチャレンジ精神を有する人材を期待します。

※両職種に同時に応募することは妨げません。

2. 所属

文部科学省グローバルCOEプログラム「生存基盤持続型の発展を目指す地域研究拠点」
（京都大学・東南アジア研究所）

3. 採用期間

採用時より原則2年間。ただし、特に優秀と認められる場合には1年単位で採用期間を延長する場合があります。尚、雇用契約は年度単位での契約になります。

4. 職務内容

- 1) 本プログラムの趣旨に適う研究を遂行し、その成果を発表すること
- 2) 本プログラム運営のための各種業務

5. 応募資格

- 1) 持続型生存基盤パラダイム研究を担う国際的な研究者となることが期待される者
- 2) 採用時において、博士号を取得している者。ただし、博士号取得同等と認められる者で、本プログラムに直接関連する特に優秀な研究実績を有する者も可とする。
- 3) 文理融合など持続型生存基盤パラダイム形成のための多面的研究アプローチを自らの研究に取り込む限り、申請者のこれまでの研究領域が理科系、文科系であるかを問わない
- 4) 採用時において、本プログラムのグローバルCOE助教・研究員（グローバルCOE）として以外に常勤の職を有さない者
- 5) 採用時において、日本学術振興会特別研究員その他のフェローシップなど類似の雇用助成を受けていない者
- 6) 採用時において、上記職務の遂行が可能となる地域に居住する者
- 7) 国籍は問わないが、研究運営に必要な日常会話程度の日本語能力を有することが望ましい

6. 労働条件および待遇

- 1) グローバルCOE助教は週40時間勤務（月～金曜日、裁量労働制）、研究員（グローバルCOE）は週30時間勤務（月～金曜日）です。
- 2) 給与および各種手当については、グローバルCOE助教は特定有期雇用教職員、研究員（グローバルCOE）は時間雇用教職員として、本学の基準にしたがった額を支給します。グローバルCOE助教は、助教と同程度、研究員（グローバルCOE）は年収300万円程度です。
- 3) グローバルCOE助教・研究員（グローバルCOE）は、本学教職員として、保険制度に加入し、また本学図書館や学術情報ネットワーク等の施設利用資格が与えられます。

7. 応募書類

- 1) 応募用紙（書式あり）
- 2) 履歴書（参考書式あり）
- 3) 研究業績一覧（査読の有無を明記してください）
- 4) 競争的資金の獲得状況（代表/分担の別を明記してください）
- 5) 主要な研究成果（3点以内で、写しの提出も可とする）
- 6) これまでの主たる研究成果の概要（2000字以内）
- 7) これまでの海外における主たる活動状況と国際発信力に関する自己アピール（国際研究集会・臨地研究・語学能力等、1000字以内）

- 8) 持続型生存基盤パラダイム研究を遂行するうえでの抱負（2000字以内）
- 9) 応募者の学識・研究について照会可能な方2名の氏名・所属・連絡先（住所・電話番号・E-mailアドレス）

※グローバルCOE助教とグローバル研究員（COE）の両職種に応募する場合には、別々に応募書類を作成し、同一封筒で提出してください。ただし、その場合は、上記の「5) 主要な研究成果」については1部で結構です。

※応募の為に提出された書類は返却しません

8. 応募期限

2008年1月10日（木）必着

9. 選考過程と採用通知、採用予定日

1) 書類審査の合格者には、1月17日（木）までに、面接試験の詳細を連絡します。面接試験は、1月21日（月）・22日（火）に実施します。面接試験は英語によるプレゼンテーションを含みます。面接のための旅費は支給しません。その後、2月初頭までに、すべての応募者に対して、採否をE-mailにて通知します。採用予定日は4月1日です。

2) 海外在住者で、前述の日程の面接試験に出席できない方には、書類審査を合格したあとに、面接を別途設定いたします。

※適任者がいない場合には、採用を見合わせることもあります

10. 書類請求および提出先

1) 応募用紙などは、東南アジア研究所ホームページのグローバルCOE「生存基盤持続型の発展を目指す地域研究拠点」Provisional Websiteからダウンロードすることができます。また、下記のグローバルCOEプログラム事務局に請求することもできます。

2) すべての応募書類は、グローバルCOEプログラム事務局宛として、簡易書留で郵送してください。その際、封筒表に「グローバルCOE若手研究者応募書類在中」と朱書きしてください。また、別途、応募用紙をE-mailの添付ファイル（word file）で下記のアドレスまで送付してください。その際、件名は「助教応募用紙」あるいは「研究員応募用紙」としてください。

〒606-8501

京都府京都市左京区吉田下阿達町46

京都大学東南アジア研究所

グローバルCOEプログラム事務局

Tel. 075-753-7358

Fax. 075-753-7350

E-mail gcoe_office@cseas.kyoto-u.ac.jp

11. 問い合わせ先

上記事務局に、E-mailで問い合わせてください。

12. その他：

1) 採用期間中に、他の常勤職への採用が決定された場合は、その着任日の一ヶ月前までに拠点リーダーにその旨を通知してください。この場合、その職への着任の前日をもって、グローバルCOE助教あるいは研究員（グローバルCOE）の職を解きます。

2) 本プログラムによって得た研究成果を公表する場合には、その旨を必ず明記してください。

以上

5. 人材育成センターの活動

人材育成センターの主たる責務は、本プログラムにおいて展開される先端的な研究と人材育成を融合させるとともに、文理融合型の国際的人材育成システムを構築することである。そのための柱として、(1) 21世紀COEプログラム「世界を先導する総合的地域研究拠点の形成」によってアジア・アフリカ地域に設置したフィールド・ステーションを継承・発展させ、そこにおいて博士後期課程の（またはそれに相当する）大学院生の積極的な参加を得て、フィールドワークや国際ワークショップを活発に展開すること、(2) 博士後期課程の大学院生・ポスドク研究員・助教からなる若手研究者がプログラム全体に主体的に参画することを促進して、彼らを新世代研究者として育成するとともに、若手研究者がパラダイム形成から個別研究に至るまで実質的に貢献できるよう支援すること、(3) 地域研究の全国的・国際的な拠点としての京都大学の将来構想と連動しつつ、新世代研究者の育成を図るための制度設計をおこない、文理融合型の地域研究の国際的拠点を発展させる戦略立案をおこなうこと、があげられる。

(1)(2)のために、大学院教育部会および若手養成・研究部会を設け、集中的な活動展開をおこなってきた（詳細については、5-1 および 5-2 を参照のこと）。

(3)については、本プロジェクト終了後に構想している「京都大学地域研究グローバルユニット（仮称）」の設立を視野に入れつつ、初年度には、研究と人材育成を融合するための構想の立案を集中的におこなった。その結果、大学院教育において研究成果を還元すると同時に、本プロジェクトが開拓する新分野の若手研究者を育成していくことがもっとも重要であるとの結論を得た。

そこで、本プロジェクト参加部局の中で、大学院教育に特化している京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科（ASAFAS）において、他の本プロジェクト参加部局、特に東南アジア研究所、生存圏研究所、地域研究統合情報センターの協力を得ながら、「グローバル地域研究」専攻を新設することを企画した。新専攻は、ASAFASが10年前の設立時から将来構想として持ち続けてきた連環地域論（南・西アジア地域研究、イスラーム世界論、インド洋世界論）の拡大・発展と、本プロジェクトによる持続型生存基盤研究を合わせて、「グローバル地域研究」専攻とするものである。新専攻には、3つの講座を置き、それぞれ「持続型生存基盤論」講座、「イスラーム世界論」講座、「南アジア・インド洋世界論」講座とする。

新専攻設置計画は、平成21年4月の新専攻設置をめざすもので、平成20年1月にASAFASの研究科会議で承認され、3月には大学本部の企画委員会の承認を得て、適宜、必要な手続きが進められている。

本プロジェクトの進展との関連で言えば、当初の計画では、第2年度をめどに「持続型生存基盤コース」を設置することをうたっていたが、「コース」の段階を超えて、第3年度に一気に持続型生存基盤論を研究する大学院生に博士号を授与することができる制度的な発展をおこなうことになったものである。その意味では、きわめて急速な展開となったが、ASAFASと人材育成センターの緊密な連携のもとに、本プロジェクトおよび協力部局の全面的なサポートを得て、きわめて円滑な進行がおこなわれている。

5.1 大学院教育部会

5.1.1 はじめに：今年度の主な活動

大学院教育部会では今年度大きく分けて二つのことを行った。一つは、①大学院アジア・アフリカ地域研究研究科（ASAFAS）で、G-COE『生存基盤持続型の発展を目指す地域研究拠点』が掲げる持続型生存基盤に関する講義および演習を実現するための検討の開始であり、いま一つは、②21世紀COEでASAFASの臨地教育で大きな成果を上げたフィールド・ステーションを活用した、若手研究者の育成を推進するための学生の現地派遣である。

5.1.2 大学院教育における「持続型生存基盤コース」の設置に関して

持続型生存基盤に関する講義に関しては、2007年8月28日にASAFASの学務委員長の足立教授にG-COE『生存基盤持続型の発展を目指す地域研究拠点』に関連する講義、演習の新設の可能性、さらには平成20年度以降「持続型生存基盤コース」の設置の可能について検討を要請した。

具体的な要請は、以下の点であった。

- 1) 今年度実施された1.2年対象の杉原拠点リーダーによる講義「持続型生存基盤研究の方法」の継続の可能性
- 2) G-COE『生存基盤持続型の発展を目指す地域研究拠点』関連の講義(1,2年生対象)開催をさらに増やすことが出来るかどうか
- 3) 研究科共通科目または専攻科目として、「生存基盤持続型地域研究演習Ⅰ」や「生存基盤持続型地域研究演習Ⅱ」（いずれも仮名）といった演習を新設または科目名変更で設置する事の可能性

審議の結果、ASAFASの学務委員会は以下のような検討結果を返答してきた。

1) 講義について

杉原先生による講義「持続型生存基盤研究の方法」は継続
環境・感染症論 A/B(西淵先生)→持続型生存基盤研究Ⅰ（環境・感染症論 A/B）
開発生態論 A/B（河野先生）→持続型生存基盤研究Ⅱ（開発生態論 A/B）
国際環境医学論 A/B（松林先生）→持続型生存基盤研究Ⅲ（国際環境医学論 A/B）
地域情報学論 A/B（柴山先生）→持続型生存基盤研究Ⅳ（地域情報学論 A/B）

2) 演習について：

既存の公開演習と臨地演習で設定

持続型生存基盤研究公開演習（研究科共通科目）、通年1単位、授業時間数（随時）、担当教員（G-COE関連教員）、配当年次（1から5）、パラダイム研究会に参加

持続型生存基盤臨地研究演習（研究科共通科目）、通年2単位、授業時間数（随時）、担当教員（G-COE関連教員）、配当年次（3から5）、G-COEによる臨地研究に参加

しかしながら、この審議と時を同じくして ASAFAS の東南アジア地域専攻の名称変更問題の検討が始まり、その検討の中で研究科創設以来の悲願であった連環地域論講座の独立の構想が浮上し、新たに第三専攻の新設が検討されることになった。

連環地域論講座が研究対象とする南アジアおよびイスラーム世界は、経済面・政治面における国際的地位の向上が著しい。また、グローバルな動きとしてアフガニスタンやイラクにおける戦争やスマトラ沖地震による津波の被害、さらにはパキスタンにおける地震やバングラデシュのサイクロン被害を契機に高まった国際的災害支援など、グローバルな問題群が多く出てきている。本 G-COE が目指す新パラダイムの展開もこのような地域研究を巡る新しい社会的要請に応えるところがあるのであるが、教育面においてもこのような問題群の解決に向けた体制の構築が必要と考え、新専攻設置の動きとなった。

したがって新設が予定されている「グローバル地域研究専攻」は、「イスラーム世界論講座」、「南アジア・インド洋世界論講座」および「持続型生存基盤講座」の 3 講座から成るものとして現在平成 21 年度新設にむけ努力中である。

この新専攻が実現した暁には持続型生存基盤に関する講義や演習は、新設が予定されている「グローバル地域研究専攻」の中の「持続型生存基盤講座」が中心に担う予定である。当然のことながらこの講座が開講する「持続型生存基盤論研究の方法」、「東アジア生存基盤論」、「東南アジア生存基盤論」、「南アジア生存基盤論」、「中東生存基盤論」、「アフリカ生存基盤論」、「生存基盤環境論」ならびに「グローバル地域研究演習」等などは ASAFAS の学生全員が履修できるばかりでなく、新専攻に協力教員を派遣することが予定されている生存圏研究所所属の学生も受講できる。

5.1.3 フィールド・ステーションを活用した若手研究者の育成

フィールド・ステーションを活用した若手研究者の育成に関しては、2007 年 10 月 2 日に開催された大学院教育部会の会議において、21 世紀 COE においてフィールド・ステーションを開設している ASAFAS とインドネシアにあるパソ森林保護区での臨地研究を中心に考えている生存圏研究所との間で、学生の募集は別途に行うことが決定された。

そして同部会の ASAFAS 委員会では、翌 10 月 3 日に公募要領検討の会を開催し、下記にあるような募集要項を決定した。

公募要領

グローバル COE プログラム 「生存基盤持続型の発展を目指す地域研究拠点」

フィールド・ステーション等派遣経費支援の申請について (2007 年度)

グローバル COE 大学院教育部会

下記の通り、フィールド・ステーション等派遣支援の募集を行います。これは、グローバル COE プログラム「生存基盤持続型の発展を目指す地域研究拠点」の一環として、ASAFAS が臨地教育の拠点としてきたフィールド・ステーションを継承、発展させながら、大学院生の教育研究を推進しようとする事業です。当支援では、博士予備論文の内

容を拡充し、それを博士論文につなげるためのフィールド調査を奨励しています。

希望者は申請書に記入の上、電子メールに添付して、10月12日正午までにグローバル COE 教育部会宛に送信してください。送信先のアドレスは <nishi@cseas.kyoto-u.ac.jp> とし、件名は「フィールド・ステーション等派遣経費の申請」としてください。

1. 申請資格

申請者は、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科の大学院生で、博士予備論文を提出し合格した院生、他研究科で修士号を取得して本研究科に編入・転研究科した院生、および本研究科の研修員で博士号を取得していない者にかぎります。なお申請にあたっては、必ず指導教員の承諾を得てください。

2. 助成内容

2007年度中の派遣に対して、旅費、滞在費等を支援します。ただし、備品の購入は対象外です。

3. 選考基準

研究計画の質、実行可能性、博士予備論文との関連性、ならびに博士論文への発展性を考慮して選考を行います。

4. 審査結果の通知

提出された申請書は、グローバル COE プログラム教育部会において厳正に審査の上、10月末日までに審査結果をメールで通知します。

5. 報告書の提出

派遣を終了し帰国した日から45日以内に、調査結果を要約した報告書の提出を求めます（報告書は、書式に従って所定の内容を記入してもらう予定です。書式は採用決定後に通知します）。なお、報告書の内容の一部ないしは全部を、グローバル COE プログラムのウェブページ等で公開することがあります。

6. 他のグローバル COE プログラム研究助成との併願について

グローバル COE 事務局からは、10月2日付で「次世代研究イニシアティブ研究助成」の申請書も公募されています。ASAFAS で博士予備論文を提出した院生は、「フィールド・ステーション等派遣経費支援」と「次世代研究イニシアティブ研究助成」のいずれかに応募できますが、両方に応募することはできませんので、双方の募集要項をよく読み、適切と思われるほうに応募してください。

公募の結果 ASAFAS の公募では、学生12名からの応募があり、10月16日に審査委員会が開催され、審査の結果別紙にあるような地域、期間、テーマでの派遣が認められた。（添付書類1参照）

また、生存圏研究所におけるフィールド・ステーションでは下記のような現地調査の計画書が提出され実施が認められた。

(1)名称：Pasoh Forest Reserve （パソ森林保護区）

(2)設置場所（設置国）：Negeri Sembilan, Malaysia （マレーシアネグリセンビラン州）

(3)活動目的：低地熱帯雨林における生態学・生物地球化学・気象水文学等の総合

的研究

(4)代表者氏名：谷誠（教授）

(5)運営メンバー：小杉緑子（助教）、伊藤雅之（PD）、大久保晋治郎（D3）、横山直人（M2）、中川良二（M1）

(6)活動目的：熱帯雨林における水・炭素・諸物質の動態と大気との交換量の評価に関する研究

(7)2007年度予算総額：120万円

(8)2007年度予算内訳：90万円

(9)2007年度の活動計画：12月に出張し、水・二酸化炭素フラックスタワー観測設備の維持点検ならびに、二酸化炭素・メタン動態調査、修士課程院生に観測調査方法について修得させる。また、1月に出張し、カウンターパートのマレーシア森林研究所と、Pasoh 森林保護区熱帯雨林試験地設備の維持等に関する打ち合わせを行う。

なお、生存圏研究所におけるフィールド・ステーション実際の現地調査については添付書類2にあるとおりである。また教員、研究員等の派遣に関しては添付書類3にあるとおりである。

5.1.4 その他

計画初年度にあたる平成19年度の予算の執行にあたっては、当初予定していたリサーチ・アシスタント（RA）の選任ができず、文科省からその理由の説明を求められ、下記のような説明を行った。次年度以降のRAの実施にあたっての注意のためにも敢えてその回答書を添付しておく。

GCOE雇用実態調査確認事項に対する回答書

京都大学グローバルCOEプログラム

「生存基盤持続型の発展を目指す地域研究拠点」

拠点リーダー 杉原 薫

この度はRA、TAの予算執行に関しご迷惑をおかけして申し訳ありません。予定していた予算の執行を諦めたのは、①同じプログラムで公募したフィールド・ステーション等派遣事業に対する応募が予想したより多かったこと、②RAの潜在的对象者である学生の多くが今年度末の博論提出を目指して、この後期が論文執筆にとってかけがえのない時期になったこと、そして③幾つかのパラダイム研究会では、今回は日本におけるRA雇用よりは、海外の調査地における調査派遣に主力を注ぎたいとの意向が示され、そちらに予算を割いた、という幾つかの理由が偶然重なって起きた事態を反映した結果です。来年度からは、RA、TAを有効に利用し本プログラムにおける教育・研究の推進に大いに役立てたいと考えています。RAが学生の経済的支援としてのみでなくキャリアパスの上から非常に重要であることは言うまでもないことで、これまでの多くの学生がその恩恵を受

けてきました。本プログラムでも引き続き、RA や TA を通して学生支援を行っていきたくと考えています。

ところで今回、①に見られた学生の対応を見ていますと、本プログラムに関して言えば、多くの学生にとっては日本に居て研究室での研究や教育の補助をすることよりも、時間的には自由で自らの調査・研究に多くの時間が割ける「派遣支援事業」への応募の方が魅力的であるらしいことを知らされました。本プログラムが対象とする大学院生の多くは、現地における長期の調査・観測を研究の中心に据えており、現地調査にかかる交通費・滞在費は学生にとって、避けて通ることが出来ない最大の経済的負担になっています。その点で、現地派遣費用の補助自体が、学生にとって非常に大きな経済的支援になっているのです。今回、RA よりも派遣事業に対する応募者が多かったことは、学生の側からみれば派遣費用の補助自体が十分な経済的支援となっているということの証明になっているといえます。さらに今回の応募実態から学ばされたことは、現地での長期滞在型調査を行おうとしている学生にとっては、現行の RA、TA 制度（国内での研究・教育補助を対象としている）が時間的に応募しにくい制度になっていると感じられているらしいという点です。この点は今後検討しておく必要があると考えています。その一つの解決策としては、海外のフィールド・ステーションにおける臨地教育に関係して教育・研究補助を行う学生には RA を認めるという方法があり得るかと思えます。この点に関してはまずは本プログラムの運営委員会で検討し、可能ならば実現したいと考えています。

本プログラムにおける大学院教育の中核を担うアジア・アフリカ地域研究研究科は、臨地教育と現地調査を大学院教育の中心に据えています。そのため、国内における教育・研究を主とする大学院とは自ずと異なる制度の運用が必要な場合があり、今回の RA の執行に関する事態も、そのことを示唆するものの一つであるようです。現地調査は、現地の政情、季節、研究の進捗状況、指導教員の現地出張予定（現地での臨地教育のため重要）等、様々な状況を勘案して、学生は指導教員と相談の上で慎重に決定しています。年度当初に現地調査の計画を決めていますが、現地の事情や論文執筆の過程で見つかる追加調査の必要性など、臨機応変に調査時期を変えることも大切です。個々人の研究計画をあらかじめ固定することが現地調査では難しいことも多く、RA や TA の決定にはいつもこの点で心を砕いています。経済的負担が大きく、かつ長期に日本を離れるという二重の意味で特殊な事情を抱える大学院生にとって、利用しやすい経済的支援とはどのようなものであるか、しかもそれが当人にとって有効なキャリアパスとして生かせるような方法とはどんなものか、これを機会に再検討していきたいと考えています。

今回は、本当にいろいろお手をかけまして申し訳ありませんでした。本プログラムの特殊性をご理解の上、今回の予期せぬ事態の出来の理由をご理解の程お願いいたします。

5.1 添付書類 1. ASAFAS の学生派遣一覧

氏名	専攻	指導教員	支給額	渡航先	出発日	帰国日	滞在日数	研究テーマ
1 鈴木 遥	アジア	小林繁男	325,000	ベトナム、インドネシア	08/01/07	08/03/15	69	ベトナムとインドネシアの比較からみる有用樹種「テツボク」の利用の特徴とその変容
2 竹田敏之	アジア	小杉泰	400,000	リビア、チュニジア、エジプト	08/01/07	08/02/06	31	現代アラブ世界の形成とアラビア語ネットワークの実態調査
3 長谷川悟郎 (辞退)	アジア	杉島敬志	-	マレーシア			-	
4 柳沢英輔	アジア	平松幸三	325,000	ベトナム、インドネシア	08/01/07	08/03/24	78	ベトナム、インドネシア少数民族のゴング文化
5 アサワラシャン・ピヤワン (辞退)	アジア	小泉順子	-	タイ			-	
6 LE GIANG THI HIEN	アジア	水野広祐	220,000	ベトナム	07/11/03	07/11/13	11	ベトナム建設産業の臨時工の実態調査
7 SITEPU, DEWI SINORITA	アジア	水野広祐	290,000	インドネシア	08/01/11	08/02/26	47	ASEAN-CHINA BUSINESS COUNCIL: THE CASE STUDY THE ROLES OF INDONESIA
8 伊藤美穂 (辞退)	アフリカ	市川光雄	-	ギニア			-	
9 片山祐美子	アフリカ	市川光雄	650,000	ガンビア	07/11/12	08/02/28	109	西アフリカ・ガンビア川中流域で近年見られる環境および社会制度の動態に関する研究
10 相馬貴代	アフリカ	山越言	400,000	マダガスカル	07/11/12	07/12/04	23	分断化された保護区における、ワオキツネザルの採食生態に導入樹種が与える影響
11 長倉美予	アフリカ	島田周平	500,000	レソト	08/01/13	08/03/13	61	レソト山岳地における複合的生業の生成過程
12 山本佳奈	アフリカ	伊谷樹一	600,000	タンザニア	07/12/14	08/03/29	107	農民の生計における湿地利用の意義
計			3,710,000				536	

5.1 添付書類 2. 生存圏研究所関係の学生派遣一覧
生存圏研究所

	氏名	研究室	指導教員	支給額	渡航先	出発日	帰国日	滞在日数	研究テーマ
1	Erwin	生存研		287,430	インドネシア	08/03/08	08/03/22	15	East Kakimantanm Indonesia 及び Mulawarman 大学 演習林にて熱帯樹木の樹病の解析と保護対策の 調査研究
2	水野寿弥子	農学研究科 (生存研)		182,250	インドネシア	08/02/20	08/02/24	5	インドネシア科学院生物材料研究センター内生存 研サテライトオフィスにて開催の生存圏科学スクー ルおよびフィールド実習
3	小石和成	農学研究科 (生存研)		182,250	インドネシア	08/02/20	08/02/24	5	同上
4	藤田素子	農学研究科 (生存研)		200,000	インドネシア	08/02/20	08/03/09	19	同上
5	Ragil Widyorini	情報学研究 科(生存研)		45,000	インドネシア	08/02/20	08/02/27	8	同上
			計	896,930				52	
			生存研院生+教員	1,246,430					

生存圏研究所 (農学研究科関係)

	氏名	研究室	指導教員	支給額	渡航先	出発日	帰国日	滞在日数	研究テーマ
1	中川良二	森林水文学	谷誠	243,000	マレーシア Pasoh 森林 保護区	2007/12/6	2007/12/19	14	熱帯雨林におけるメタン放出量測定な らびに手法の検討
2	川原由香 里	熱帯林環境学	太田誠一	352,410	タイ Sakaerat 試験地	2007/12/7	2008/1/6	31	熱帯季節林における炭素循環調査
			計	595,410				45	
			農学部院生+教員	1,100,000					

5.1 添付書類 3. 生存圏研究所教員・研究員派遣関係一覧

ASAFAS なし

生存圏研究所

氏名	所属	費用	渡航先	出発日	帰国日	滞在日数	用務
1 小松幸平	教授	19,500	インドネシア	07/11/25	07/11/30	6	バンドン市人民安定局建築構造研究所にて研究打ち合わせ・実験
2 Rudianto Amirta	研究員	180,000	インドネシア	07/11/24	07/12/07	14	京大-LIPI のフォーラム参加後、カリマンタン等にバイオ燃料の調査とサンプル採取
3 海田るみ	研究員	150,000	インドネシア	08/03/23	08/03/28	6	LIPI バイオテクノロジーセンターにてファルカータの形質転換実験
計		349,500				26	

農学研究科

氏名	所属	費用	渡航先	出発日	帰国日	滞在日数	用務
1 谷誠	森林水文学 教授	181,590	マレーシア森林研究所	2008/1/3	2008/1/8	6	マレーシア森林研究所との Pasoh 森林保護区熱帯雨林試験地設備の維持等に関する打ち合わせ
2 小杉緑子	森林水文学 助教	323,000	マレーシア Pasoh 森林保護区	2007/12/6	2008/1/8	6	熱帯雨林における水・二酸化炭素フラックスタワー観測設備の維持点検ならびに、二酸化炭素・メタン動態調査方法の現地指導
計		504,590				12	

5.2 若手養成・研究部会

若手養成・研究部会の活動は、主に以下の2本の柱から成る。1) G-COE 助教1名と研究員3名を10月1日付けで採用し、その調査研究を指導した。2) 18名・グループに総額950万円の「次世代研究イニシアティブ・研究助成」経費を支給し、その活動を支援した。

それら理系・文系の広い分野にまたがる若手研究者が、随時研究会を開いて情報・意見交換を行い、生存基盤持続型の発展を目指した学際的共同研究の可能性を積極的に探求することを奨励した。その他、成果の英語出版(単著、論文)を目的としたセミナーを2回開催した。また、生存研研究所およびインドネシア科学院(LIPI)とともに、2008年2月インドネシア・チビノンで「生存圏科学スクール(Humanosphere Science School)」を共催した。

若手養成の具体的な成果としては、G-COE 研究員の遠藤環が、2008年度4月1日付けで、埼玉大学常勤講師として就職した。また、次世代研究イニシアティブ・研究助成を行った藤田素子がG-COE 研究員として、Ragil Widyorini がインドネシア・ガジャマダ大学講師として就職した。

5.2.1 G-COE助教・研究員の活動

10月1日付けで採用したのは、助教の生方史数(資源経済学・環境と開発)と研究員の遠藤環(地域経済学[都市論]・開発経済学・地域研究)・佐藤孝弘(熱帯農業生態学、南インド・稲作限界地における人工社会モデルの構築)・西真如(文化人類学・開発研究)である。

10月1日の午前中に辞令の交付を受けた後、その日の午後から丸3日間、本プロジェクトの目的と概要の理解および相互の交流と情報交換のため、ブレインストーミングを兼ねた3日間にわたり連続研究会を開いた。1日の午後1時から、東南アジア研究所で部会の構成教員である、松林・清水(東南アジア研究研)・田辺(人文科学研究所)・山本(地域研究統合情報センター)、藤倉(大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)らも参加して、各自が、自己紹介と今までの研究経過を簡単に説明した。夜は近くの居酒屋で、着任歓迎・懇親会を催した。

2日は午前10時から夜6時まで、4人の若手研究者各自が、今までの研究経過と本プロジェクトにおける研究計画について、一人40分ほどの時間を使って詳細な報告を行った。それに対して、部会メンバーの教員以外に、杉原、河野らも参加して、40~50分の質疑応答、助言、その他の活発な議論を交わした。

3日には、部会のメンバーが宇治キャンパスの生存圏研究所を訪問し、午前中は各種実験施設を見学した。午後は、生存基盤科学研究ユニット・オフィスにおいて、若手メンバー4人と生存研側の若手研究者4人が20分ずつ研究紹介を行い、相互交流と意見交換を行った。文理にまたがる学際的な研究を組織するための第一歩として有意義であった。若手部会から清水・田辺・藤倉、生存研からは林のほか、浦川・亀井・小林・古屋伸・増野・藤田・園部・反町・Thi-Thi-Nge・I.VENKATA・S.Reddyらが参加した。

以後の研究会等については、「次世代研究イニシアティブ・研究助成」にもとづく活動と合わせて報告する。

5. 2. 2 次世代研究イニシアティブ・研究助成の交付

以下の18件の若手研究者・グループに助成した。

1. 足立透（生存圏研究所 学振特別研究員） 研究課題「東南アジア域における雷放電活動のモニタリング」
2. 伊藤雅之（大学院農学研究科 研究員）共同研究者：小杉緑子 研究課題「熱帯森林生態系における温室効果ガス動態解明のための安定同位体的研究」
3. 生方史数（東南アジア研究所 G-COE 助教）研究課題「『プカランガン』からみたジャワ系移民の生活世界」
4. 遠藤環（東南アジア研究所 G-COE 研究員）研究課題「都市におけるインフォーマル経済とコミュニティの機能：都市下層民の視点から」
5. 海田るみ（生存圏研究所 非常勤研究員）共同研究者：加来友美、生方史数、Enny Sundarmonowati 研究課題「熱帯人工林持続のための樹木の分子育種」
6. 風戸真理（地域研究統合情報センター 研究員）研究課題「現代モンゴルの都市と地方における貴金属の文化的な価値：銀製品に注目して」
7. 加瀬澤雅人（国立民族学博物館 外来研究員）研究課題「民族医療の文化的側面と技術・資源的側面の相互関係性、及び伝統医療の持続的な活用にかんする研究」
8. 北村由美（東南アジア研究所 助教）研究課題「生存基盤としての宗教—世俗的イスラーム国家インドネシアにおける華人の宗教—」
9. 佐藤孝宏（東南アジア研究所 G-COE 研究員） 研究課題「東南アジア諸地域におけるバイオエネルギー生産と関連制度整備の現状調査」
10. 佐藤靖明（大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 博士課程在籍）研究課題「東アフリカの生業基幹作物バナナ (*Musa spp.*) とエンセーテ (*Ensete Ventricosum*) の遺伝資源をめぐる在来知の変容プロセス」
11. 中村香子（大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 研究員）共同研究者：Jon Holtzman、内藤直樹 研究課題「知的潜在力」としてのアイデンティティの「柔軟性」と「重層性」—東アフリカ牧畜社会における社会的生存基盤に関する研究—
12. 中山節子（大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 研究員）研究課題「マラウイ湖漁労者による湖沼資源認識の変遷に関する歴史人類学的研究」
13. 西真如（東南アジア研究所 G-COE 研究員）研究課題「開発論における「参加」と「リスク」概念の批判的再検討：グラゲ自助開発協会の経験から」
14. 藤田素子（生存圏研究所 ミッション研究員）共同研究者：Dewi Prawiradilaga・林隆久・矢野浩之・吉村剛 研究課題「熱帯大規模アカシア植林地における生物多様性の評価および鳥類相の変化に起因する物質循環への影響」
15. 古市剛久（生存基盤科学研究ユニット 研究員）研究課題「東南アジア社会における生存基盤としての土地・水資源の管理—流域スケールでの土地利用変遷の分析とその文理統合型土地・水資源管理指針への統合—」

16. 細田尚美（地域研究統合情報センター 研究員）共同研究者：石橋誠・小張順弘・渡辺暁子、シンシア・ネリ・ザヤス、ネストール・T・カストロ 研究課題「可能性としてのハイパー・モビリティー生存基盤持続型社会の潜在力の表現としての人の移動に関する広域比較研究・序説」
17. 丸尾聡（大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 非常勤研究員）研究課題「アフリカ・バショウ科作物文化圏における資源利用と生業基盤の持続性に関する比較研究」
18. Ragil Widyorini（生存圏研究所 ミッション研究員）共同研究者：S Kawai, B Subiyanto, A Firmanti, EB Hardiyanto, B Supriyadi 研究課題“Evaluation of biomass production of plantation forest in tropical area: A case study of Acacia plantation forest, PT Musi Hutan Persada, South Sumatra, Indonesia”

5.2.3 研究会等の開催

以下の研究報告会を開催した。

G-COE 若手養成研究部会・第1回研究会(2007/11/20)

- 古市 剛久：「東南アジア社会における生存基盤としての土地・水資源の管理－流域スケールでの土地利用変遷の分析とその分離統合型土地・水資源管理指針への統合」
- 丸尾聡：「アフリカ・バショウ科作物文化圏における資源利用と生業基盤の持続性に関する比較研究」
- 佐藤靖明：「東アフリカの生業基幹作物バナナ（*Musa spp.*）とエンセーテ（*Ensete Ventricosum*）の遺伝資源をめぐる在来知の変容プロセス」
- 中村香子：「『知的潜在力』としてのアイデンティティの『柔軟性』と『重層性』－東アフリカ牧畜社会における社会的生存基盤に関する研究－」
- 生方史数：「『プカランガン』からみたジャワ系移民の生活世界」
- 中山節子：「マラウイ湖漁労者による湖沼資源認識の変遷に関する歴史人類学的研究」

G-COE 若手養成研究部会・第2回研究会(2007/12/18)

- 遠藤環：「都市におけるインフォーマル経済とコミュニティの機能：都市下層民の視点から」
- 北村由美：「生存基盤としての宗教－世俗的イスラーム国家インドネシアにおける華人の宗教－」
- Ragil Widyorini : "Evaluation of biomass production of plantation forest in tropical area:A case study of Acacia plantation forest, PT Musi Hutan Persada, South Sumatra, Indonesia"
- 風戸真理：「現代モンゴルの都市と地方における貴金属の文化的な価値：銀製品に注目して」
- 細田尚美：「可能性としてのハイパー・モビリティー生存基盤持続型社会の潜在力の表現としての人の移動に関する広域比較研究・序説」
- 佐藤孝宏：「東南アジア諸地域におけるバイオエネルギー生産と関連制度整備の現状調査」

G-COE 若手養成研究部会・第3回研究会(2008/1/22)

伊藤雅之：「熱帯森林生態系における温室効果ガス動態解明のための安定同位体的研究」

加瀬澤雅人：「民族医療の文化的側面と技術・資源的側面の相互関係性及び、伝統医療の持続的な活用に関する研究」

藤田素子：「熱帯大規模アカシア植林地における生物多様性の評価および鳥類相の変化に起因する物質循環への影響」

西真如：「開発論における「参加」と「リスク」概念の批判的再検討：グラゲ自助開発協会の経験から」

海田るみ：「熱帯人工林持続のための樹木の分子育種」

足立透：「東南アジア域における雷放電活動のモニタリング」

「次世代の地域研究」研究会第5回会合(2008/2/16)

森田敦郎（東京大学大学院総合文化研究科・助教）：「空間の再編としての工業化：タイにおける土着の機械技術の発展と社会性の生成」

松村圭一郎（京都大学大学院人間・環境学研究科・助教）：「市場経済化と空間／集合性の再配置：エチオピア農村社会の行為をみちびくモノ・人・場をめぐる歴史過程」

「次世代の地域研究」研究会第6回会合(2008/3/17)

久保慶一（早稲田大学・助手）：「報告タイトル：コソボにおける民族紛争と紛争後の「国家」建設」

末近浩太（立命館大学・准教授）：「報告タイトル：中東政治研究における国民国家・ナショナリズム・宗教」

「ハイパー・モビリティ社会」研究プロジェクト第1回セミナー(2008/03/18)

細田尚美「フィリピンにおけるサパララン・モデルの地域間比較：『ハイパー・モビリティ社会』研究・序説」

森谷裕美子（九州産業大学）「フィリピン・パラワン族の土地問題」

飯高伸五（東京都立大学大学院）「シューカンから抜け出す方法？—パラオにおける国際人口移動と贈与交換の再編」

コメント：田中耕司（京都大学）、スヘー・バートルガ（愛知県立大学）

5.2.4 英語出版に向けたセミナーの開催

若手研究者による英語出版を促進するための情報・知識・技術を得るためのセミナーを2度実施した。第1回セミナーでは、G-COE 拠点リーダーが、海外での英語出版の経験とノウハウを共有するためのレクチャーを行った。第2回セミナーでは、国外の大学出版会や英文学術誌の編集者を招き、編集や出版に携わる者の視点から助言と指導を得た。

第1回セミナー(2008/12/13)

杉原薫（東南アジア研究所・グローバル COE 拠点リーダー）”The Bumpy Road to Oxford University Press”

第 2 回セミナー（2008/03/06）“Getting Published in the English World”

Dr. Chris Baker (Independent writer, researcher and translator)

“Getting Published in the English World: Two Perspectives”

Dr. Paul Kratoska (Managing Director, NUS Press; Former Editor, Journal of Southeast Asian Studies; Regional Editor, International Journal of Asian Studies) “English-Language Academic Publishing: What University Presses are Looking For”

Caroline S. Hau, (Associate Professor CSEAS)

5. 2. 5 インドネシア・チビノンで開講された生存圏科学国際スクールとシンポジウムへの若手部会のメンバー派遣

生存圏研究所、東南アジア研究所、G-COE プログラム「生存基盤持続型の発展を目指す地域研究拠点」、およびインドネシア科学院(LIPI)とが共催し、京都大学国際交流推進機構支援事業からの支援を得て、平成 20 年 2 月 21～22 日に開催された生存圏科学スクール(Humanosphere Science School; 以下では HSS)と、2 月 23 日に開催された生存圏シンポジウム「持続的生存圏の構築に向けて」に、若手研究員を派遣した(西真如・和田泰三(東南アジア研究所)、臼井拓・木下博子・竹安裕美・水澤純人(アジア・アフリカ地域研究研究科)、広田勲(農学研究科)、津田冴子(生存圏研究所))。本部会の若手研究者の藤田素子が“Biodiversity in Tropical Plantation Forests”、中村香子が“How do “Maasai Warriors” encounter Curiosity-seeking Tourists? One aspect of globalization experienced in the Samburu society, Kenya”の報告を行った。

生存基盤研究所の川井所長、東南アジア研究所の水野所長、LIPI の E. Sukara 次官を筆頭に、参加者は約 90 名を数え、日本からの参加者も 23 名にも達した。

5. 2. 6 G-COE 国際シンポジウムでの発表

3 月 12～14 日に開催された国際シンポジウム”In Search of Sustainable Humanosphere in Asia and Africa”において G-COE 研究員 3 名が発表を行った。それぞれの専門分野を生かして、グローバルな水循環、都市の機能と都市化のリスク、感染症と民主主義といった視点を提示しつつ、人類の生存基盤との関連について論じた。

6. 研究イニシアティブ

6.1 パラダイム研究会

研究イニシアティブは、プログラムのメンバーが4つのイニシアティブにわかれて共同研究を行うために設置された。パラダイム研究会は、本報告書の2で述べた「パラダイム形成」という目標を担うとともに、イニシアティブ相互の関連や全体の流れを議論する、本プログラムの中心となる研究会である。初年度は次のように6回開催された。

- 第1回研究会 (2007/09/10)
「持続型生存基盤パラダイムの創出に向けて」
杉原薫「パラダイム研究会 趣旨説明」
杉原薫「イニシアティブ1 環境・技術・制度の長期ダイナミクス研究」
柳澤雅之「イニシアティブ2 人と自然の共生研究」
水野広祐「イニシアティブ3 地域生存基盤の再生研究」
田辺明生「イニシアティブ4 地域の知的潜在力研究」
- 第2回研究会 (2007/10/15)
「熱帯におけるバイオマス資源：生存基盤持続型技術開発への視点」
渡辺隆司「熱帯におけるバイオマスエネルギー利用の展望」
大村善治・佐藤孝宏「バイオマスエネルギー技術と社会制度の接点—データベース構築からのアプローチ—」
- 第3回研究会 (2007/11/19)
「経済史から見た生存基盤持続型径路の展開—環境と制度の関わり—」
杉原薫「資本主義の論理と環境の持続性—欧米、東アジア、熱帯の比較史から—」
脇村孝平(大阪市立大学)「19世紀南アジア災害論—飢饉・マラリア・コレラ—」
- 第4回研究会 (2007/12/17)
「農業発展径路の地域間比較に向けて」
田中耕司「フロンティア社会と農業集約化—アジアの農業発展径路—」
- 第5回研究会 (2007/01/21)
「持続的生存基盤研究におけるエネルギー問題の役割」
松岡巖(運輸政策研究機構国際問題研究所)「エネルギー・地球温暖化問題の現状」
松本紘「グローバルなエネルギー問題—持続的生存基盤の拡大に向けて—」
- 第6回研究会 (2007/02/18)
「アフリカの生存基盤を考える—環境・国家・村—」
島田周平「アフリカ農村社会の脆弱性 (Vulnerability) とレジリエンス (Resilience)」

事務局は、プログラム発足直後の7月4日に行ったキックオフ・ミーティングで示した方針にもとづき、夏期休暇中に4つのイニシアティブを編成して共同研究に取り組む体制を構築した。9月に第1回パラダイム研究会が京大会館で開催され、拠点リーダーとイニシアティブの代表が全体的な問題意識や共同研究のねらいを提示した。討論では、パラダ

イム形成と個別研究との関係をどのようにつけるのか、とくにすでに特定の研究に携わっている院生や若手研究者とどのように協力して、5年という時間の枠のなかで成果を出していくのかといった問題が出されたり、報告者が使ったいくつかの概念がわかりにくく、特定のディシプリンのなかでは流通していても幅広い文理融合のための作業概念になりうるのかという点に強い懸念が表明されるなど、率直な意見交換が行われた。理系（主として生存圏研究所、農学研究科など）の研究者と、これまで地域研究のなかで文理融合的な研究をしてきた者とのあいだの知的インフラのギャップを埋めることの重要性も認識された。終了後 G-COE 開始式典を開催し、松本紘理事、参加部局の長などから祝辞をいただくとともに、懇親会を開いて親睦を深めた。

これらの課題をふまえて、続く5回の研究会では、文理のバランスをとりつつ、相互理解と問題点の共有が可能なテーマを選んで議論が進められた。若干の例を紹介すると、生存研でバイオマスエネルギー利用のための技術開発に携わっている渡辺氏、宇宙太陽光発電の研究に従事してきた松本氏、大村氏の報告では、21世紀における化石燃料からクリーンエネルギーへの転換の趨勢と、それが東南アジアなどの熱帯地域に持つ意味が議論された。バイオマスエネルギーの生産は、環境面でも経済面でも未解決の問題が多いが、成功した場合は中東での原油の採掘よりも、現地社会の労働集約的産業や雇用にはるかに大きな影響をもたらすであろう。地球温暖化に促されたエネルギー転換は、人類にとっての熱帯資源の意味を変える可能性を持っている。

これに対し、歴史学・地域研究の側からは、熱帯の資源・環境が経済・社会の発展径路を規定してきたこと、逆にそうした発展径路が資源利用の型を決めてきた側面もあること、技術開発はそうした径路依存性を十分考慮して行われるべきことが指摘された。温帯に属する東アジアと熱帯に属する東南アジアの農業発展径路を比較すると、異なった環境の下で異なった「生命体複合」が成立してきたことがわかる。そのような均衡を無視して新しい技術や制度を持ち込むと、環境、技術、制度のダイナミクスが十分に働かなくなる可能性がある。歴史的には植民地期における制度の温帯から熱帯への直接的移植、現代のアフリカではグローバリゼーションによる社会・生態システムの急激な変化がその実例である。

パラダイム研究会は、柳澤、河野、杉原を中心に、研究会ごとに結果を議論し、プログラムの進行状況にあわせて次の研究会を設定するかたちで組織された。具体的には、他のイニシアティブの研究会、国際ワークショップ、若手養成研究部会の研究会などでの議論の動きを見ながら全体の方向を探ることを課題として運営された。必要に応じて、外部からも報告者、コメンテーター、参加者を招待した。

第1回国際シンポジウム

パラダイム研究会の成果をふまえて、第1回国際シンポジウムが、2008年3月12-14日に京大会館で開催された。石川登氏を実行委員会委員長とし、パラダイム研究会に配分された予算のほとんどを使って、文字通りプログラムの総力をあげた事業であった。会議では、パラダイム形成と、歴史、生態、森林・バイオマス社会、ローカルノレッジに焦点をあてた5つのセッションと総括セッションが準備され、中心メンバーによる7本を含む合計16本の報告をめぐって活発な議論が行われた。当初は実質的な討論のための少人数

の会議を考えていたが、結果的には院生・若手研究者を含む約 120 名の参加者を得た。

全体の問題意識を表現すれば、次のようになる。一方では、地球温暖化問題などに刺激され、地域研究者も、いわゆる **geosphere**(地球圏)の安定や **biosphere**(生命圏)における生物多様性などの多面的な論点に即して、環境の持続性への理解と対応を深めなければならない。しかしそれと同時に、人口の増加や貧困層の生活水準の向上は、これを無理に止めるべきではないのだから、人間の自然へのさらなる介入・改変は不可避でもある。したがって両者の問題意識を融合させ、幅広い文理融合によって、環境の持続性を維持できるような技術や制度を発展させる道を探る必要がある。

討論では、先進国の技術や制度をそのまま移転するのではなく、熱帯の環境の特質を理解し、そこから想を得た技術や制度をどのように発展させていくか、それにはどのような主体の形成が必要かという点が強く意識されていた。森林・バイオマス社会に関する報告には、先端技術による森林再生の問題点を指摘するものからその必要性を説くものまでが並び、その歴史的・社会的含意も問題とされた。実践のレベルでは、当事者の態度や価値観にひそむ問題が議論の焦点となった。

招待した **Alfred Crosby**、**David Christian**、脇村孝平、斎藤修、**Endang Sukara**、**Sara Berry**、**Andrew Walker**、**Nandini Sunder**、**David Sonnenfeld**の諸氏の報告は、これらの問題の解明への専門的示唆に富むものであった。東南アジア研究所の別のプロジェクトで来日した **Chris Baker**、**Pasuk Phongpaichit**の力のこもったコメント、総括セッションにおける本COE研究員の3本の小報告も、本プログラムの潜在的貢献の大きさを予想させるものであった。

In Search of Sustainable Humanosphere in Asia and Africa: The First International Conference

DAY 1 March 12th

9 : 30~10 : 00 Registration

10 : 00~10 : 10 **Opening Remarks**

by Kosuke Mizuno (Director, Center for Southeast Asian Studies
(CSEAS), Kyoto University)

Opening Session: The Humanosphere Project – Where We Stand

Chairperson: Yoshiharu Omura (Research Institute for Sustainable Humanosphere (RISH),
Kyoto University)

10 : 10~10 : 40 *The Humanosphere-sustainable Path of Development: A Global Historical
Perspective*

by Kaoru Sugihara (CSEAS and Convener, GCOE Program, Kyoto
University)

10 : 40~11 : 10 *Land and Labor Intensive Agricultural Systems in Monsoon Asia:
Comparative Perspectives on the Technological Development in
Wet-Rice-Based Farming in Early Modern and Modern Periods*

by Koji Tanaka (Center for Integrated Area Studies (CIAS), Kyoto
University)

11 : 10~12 : 10 Discussion including comments by Chris Baker

12 : 10~13 : 40 Lunch

Session 1: Geosphere, Biosphere & Humanosphere

Chairperson: Naoto Kagotani (Institute for Research in Humanities, Kyoto University)

13 : 40~14 : 10 *Energy, Humanity's Greatest Addiction*

by Alfred Crosby (University of Texas at Austin)

14 : 10~14 : 40 *Towards a History of the Humanosphere*

by David Christian (San Diego University)

- 14 : 40~15 : 10 *Health Hazards in 19th Century India: Cholera and Malaria Epidemics in Semi-Arid Tropics*
by Kohei Wakimura (Osaka City University)
- 15 : 10~15 : 25 Coffee Break
- 15 : 25~16 : 45 Discussion including comments by:
Kozo Matsubayashi (CSEAS, Kyoto University)
David A. Sonnenfeld (State University of New York)
- 18 : 00~ Reception (*Shiran Kaikan*)

DAY 2 March 13th

Session 2: Forest Metabolism - Changing Nature of Biomass in Humanosphere

Chairperson: Takahisa Hayashi (RISH, Kyoto University)

- 9 : 00~ 9 : 30 *Contrasting Stories: Population and Forests, East Asia and Europe, Traditional and Modern*
by Osamu Saito (Hitotsubashi University)
- 9 : 30~ 10 : 00 *Biomass Society in the Tropics: Genesis and Metamorphoses*
by Noboru Ishikawa (CSEAS, Kyoto University)
- 10 : 00~ 10 : 30 *Biosphere Reserve - A Strategic Concept Toward Sustainable Development, Indonesian Case Study*
by Endang Sukara (Indonesian Institute of Sciences (LIPI))
- 10 : 30~ 11 : 00 *Sustainable Forest Management and Regional Environment in South-East Asia*
by Shuichi Kawai (RISH, Kyoto University)
- 11 : 00~ 11 : 15 Coffee Break
- 11 : 15~ 12 : 35 Discussion including comments by:
Andrew Walker (Australian National University)
Wil A. de Jong (CIAS, Kyoto University)
- 12 : 35~ 14 : 15 Lunch

Session 3: Environment-inspired Technologies and Institutions in the Tropics

Chairperson: Masayuki Yanagisawa (CIAS, Kyoto University)

- 14 : 15~ 14 : 45 *What Role for West Africa's Trees?*
by Sara Berry (Johns Hopkins University)
- 14 : 45~ 15 : 15 *Global Natural Resource Management and Local Socio-Economic
Conditions*
by Andrew Walker
- 15 : 15~ 15 : 45 *What are Nature-inspired Technologies and Institutions?*
by Yasuyuki Kono (CSEAS, Kyoto University)
- 15 : 45~ 16 : 00 Coffee Break
- 16 : 00~ 17 : 20 Discussion including comments by:
Takashi Watanabe (RISH, Kyoto University)
Koji Tanaka

DAY 3 March 14th

Session 4: Reassembling Knowledges - Asian and African Potentialities towards Sustainable Humanosphere

Chairperson: Yoko Hayami (CSEAS, Kyoto University)

- 9 : 00~ 9 : 30 *Cultural Politics of Life: Biomoral Humanosphere and Vernacular
Democracy in Rural Orissa, India*
by Akio Tanabe (Institute for Research in Humanities, Kyoto
University)
- 9 : 30~ 10 : 00 *Indigenous People's Knowledge in India: The Implications of Formal
Schooling*
by Nandini Sundar (University of Delhi)
- 10 : 00~ 10 : 30 *Local Knowledge for Positive Practice: How Ensete (Ensete ventricosum)
Farmer's Varieties are Conserved in Ethiopia?*
by Masayoshi Shigeta (Graduate School of Asian and African Area
Studies (ASAFAS), Kyoto University)

10 : 30~ 11 : 00 *Ecological Modernization and Sustainability in the Forestry Sector in Asia*
by David A. Sonnenfeld

11 : 00~ 11 : 15 Coffee Break

11 : 15~ 12 : 35 Discussion including comments by:
Akira Adachi (ASAFAS, Kyoto University)
Motoji Matsuda (Graduate School of Letters, Kyoto University)

12 : 35~ 14 : 15 Lunch

Session 5: Where Do We Go from Here?

Chairperson: Kaoru Sugihara

14 : 15~ 14 : 35 *Back to the Genuine Humanosphere – The Future Gate We Ought to Open*
by Yasushi Kosugi (ASAFAS, Kyoto University)

14 : 35~ 15 : 15 General discussion led by the chair, including short presentations by:
Water: Key Medium of Sustainable Humanosphere
by Takahiro Sato (GCOE Program, Kyoto University)
From Perspective of Urban Studies
by Tamaki Endo (GCOE Program, Kyoto University)
Virus, Democracy and Sustainable Humanosphere in Contemporary Africa
by Makoto Nishi (GCOE Program, Kyoto University)

15 : 15~ 15 : 30 Coffee Break

15 : 30~ 16 : 50 General discussion including comments by Pasuk Phongpaichit
(Chulalongkorn University)

16 : 50~ 17 : 00 **Closing Remarks**
by Noboru Ishikawa (Chairperson, Organizing Committee)

6.2 研究イニシアティブ1

研究イニシアティブ1「環境・技術・制度の長期ダイナミクス」の課題は、人類が技術と制度の発展をつうじてアジア・アフリカ地域の環境に与えてきた影響を歴史的にたどることによって、将来の技術・制度変化の方向を探ることである。初年度の主たる目的は、歴史学、政治学、経済学、人類学などを専攻するメンバーの専門的な報告を聞く全体研究会を組織し、本プログラムとの関連を探ること、および、より専門的な四つの班を組織し、生存基盤研究を開始するとともに、これまでの学問的「常識」を再検討すること、の二点である。なお、本年度の幹事は藤倉達郎氏にお願いした。

全体研究会

➤ 第1回研究会(2007/12/03)

石川登「バイオマス資源社会のマイクロ・ヒストリー：サラワク北部クムナ流域社会から(1841-2007)」
コメンテーター：河野泰之

藤田幸一「小作農の世界・農業労働者の世界—日本の自治村落とバングラデシュ—」
コメンテーター：友部謙一(大阪大学経済学研究科)

籠谷直人「アジアの帝国とネットワーク」
コメンテーター：杉原薫

➤ 第2回研究会(2008/01/07)

小杉泰「乾燥オアシス地帯と文明の「3項連環」論：中東の持続型生存基盤システムをめぐって」
コメンテーター：杉原薫

鬼丸武士「地下活動とネットワーク—戦間期アジアでの国際共産主義運動を事例に—」
コメンテーター：籠谷直人

西真如「『ポスト福祉国家』社会とラディカル・デモクラシー論」
コメンテーター：田辺明生

➤ 第3回研究会(2008/02/12)

小堀聡(名古屋大学経済学部)「日本における『エネルギー節約的發展経路』の形成—両大戦間期から高度成長期を中心に—」
コメンテーター：籠谷直人

遠藤環「アジアにおけるインフォーマル経済の動向」
コメンテーター：杉原薫

「古典のなかのアジア経済史」研究会(代表 籠谷直人)

現時点におけるアジア経済史研究でしばしば言及される文献を取り上げて、その研究史的意義を検討する。

➤ 第1回 研究会(2007/12/07)

籠谷直人「講座派のなかのアジア—山田盛太郎論をとおして—」

➤ 第2回 研究会(2008/01/25)

脇村孝平「アーサー・ルイス論」

➤ 第3回 研究会(2008/03/29)

木谷名都子「B.R. トムリンソンのインド経済史の誕生」

「中東・イスラーム地域における環境・技術・制度の長期ダイナミクス」研究会 (代表 小杉泰)

(1) 生存基盤持続型のイスラーム・システムの史的展開、(2) 湾岸地域と産油経済の長期戦略、(3) 資本主義のオルタナティブとしてのイスラーム経済を主たるテーマとして研究する。

本年度は、2008年2月1-2日に、「Islamic System, Modernity and Institutional Transformation」というテーマで、国際ワークショップを開催した(小杉と酒井啓子氏(東京外国語大学)が共同で組織)。Mohammed El-Sayed Selim氏(Cairo University)を招き、京都大学、東京外国語大学に所属する若手研究者による15本の報告を聞き、討論を行った。

「日本の自治村落とアジアの農村」研究会 (代表 藤田幸一)

わが国では近世以来の小農社会の成立に伴って、現存にいたる農村制度の骨格ができあがった。高度な自治機能を備える「自治村落」はその中核的存在の一つである。本研究では、近世に起源をもつ農村諸制度の発展の歴史的過程を念頭に置き、その研究を深化させるとともに、それとの対比でアジア農村の諸制度について分析・考察する。

本年度は、2008年2月29日に、「ラオスの農村信用組合-タイ・カンボジアおよび日本の経験との対比-」というテーマでワークショップを開催し、大野昭彦(青山学院大学)藤田、矢倉研二郎(阪南大学)が成果を報告した。

「東南アジアの工業化と資源」研究会 (代表 杉原薫)

戦後の東南アジアにおける急速な工業化の背景には、一方ではこの地域が西洋列強の植民地支配やアメリカ主導のグローバリゼーションの影響を受けると同時に、明治の日本に始まる東アジア型工業化の影響を受けたという歴史的事情がある。西洋の資本集約型・資源集約型工業化とは異なる労働集約型・資源節約型の工業化が東南アジアでどの程度実現したのかについての理解を深めたい。

本年度は、2008年3月1-2日に、拠点事業9「アジア国際経済秩序」との共催で、「東南アジアの労働集約型工業化」というテーマで国際ワークショップを開催した。拠点事業でのこれまでの研究成果の報告(杉原、Pasuk Phongpaichit、Thee Kian Wee、水野広祐、Porphant Ouyyanout)に加えて、日本、東南アジアの現状、インドの事例研究の報告(山形辰史、谷本雅之、脇村春夫、大石高志)や、東南アジアの政治、国際秩序をふまえたコメント(白石隆、Chris Baker)を得て、本テーマに関する比較史的、学際的な視野を共有することができた。

6.3 研究イニシアティブ2

研究イニシアティブ2では、人間の生存圏 (humanosphere) が sustainable であるためには、地球圏 (geosphere) や生命圏 (biosphere) に蓄積された資源を切り取って利用するのではなく、地球圏における水・熱・大気の循環する力と、生命圏における動植物の再生する力を利用した新しい人と自然の関係について考えることを1年目の課題とした。そのためには、既存の社会・経済・政治システムを相対化し、地域社会における自然環境の構造や機能から発想した技術・制度のあり方を議論する必要がある。とくに、アジアやアフリカの熱帯は、水・エネルギー・多様な生物などの潜在的な資源に恵まれている。そのため、持続型生存基盤を構築するためには、熱帯における自然環境の短期的な変動と中長期的な回復力とを十分考慮に入れながら、これらの資源の循環と再生のプロセスを生存基盤に組み込むことが有効である。そのための未来型の技術を開発し制度を構築する枠組み (frame work) 作りとその具体的なアイデアについて2007年度は議論してきた。具体的には、国内研究会、海外連携フィールドワーク、国際シンポジウムの3つの活動を通じて上の課題を考えてきた。以下では、それぞれの活動について述べる。

国内研究会

国内研究会では、イニシアティブ2班参加者の専門分野に応じて、暫定的に「森林」、「水」、「技術」をテーマとした研究会を開催した。

「森林」研究会では、熱帯林における水や炭素などの物質の長期循環メカニズムに関する世界の最新の研究成果を踏まえつつ、熱帯 (東南アジア) の森林における資源利用の生態学的な特徴を、温帯 (日本) との比較の中で明らかにし、熱帯林における自然資源利用のあり方を議論した。

「水」研究会では、水資源を有効に利用するための、オーストラリアにおける技術・制度両面からの歴史的アプローチについて議論した。また、南インドでのタンク灌漑の事例を検討した。

「技術」研究会では、科学技術が生まれるプロセス、確立された技術が社会の変化と共に変わっていくプロセス、中長期の未来を構想した技術開発のプロセスを取り上げ、制度と技術が不可分に結びついていることについて議論した。

研究会の詳細は以下の通りである。

- 第1回研究会「技術」(2007年11月21日(水) 10:00~12:00)
角田 邦夫 (生存圏研究所)「船食い虫はトンネル掘り名人」
畑 俊充 (生存圏研究所) 「人と自然が共生するための環境浄化技術-防腐処理木材の廃棄を例にとって-」
橋本弘蔵 (生存圏研究所)「宇宙太陽発電所とは」
- 第2回研究会「森林」(2007年12月4日(火) 13:00~15:00)
「東南アジアと日本の森林をどう捉えるか?—生態学的な機能と人間による資源利用における地域間比較—」

小杉 緑子 (農学研究科) 「東南アジア熱帯雨林におけるガス交換の諸特徴および温帯林との比較」

谷 誠 (農学研究科) 「長期の森林利用が水土流出に及ぼしてきた影響について」

神崎 護 (農学研究科) 「森林資源の現状とその利用：日本のスギ林はほんとうに劣化しているのか？東南アジアの森林の資源にどこまで頼れるのか？」

➤ 第3回研究会「水」(2008年1月18日(金)15:00~16:30)

近藤学 (滋賀大学経済学部) 「オーストラリアの統合的流域管理と水利権市場の創設」

➤ 第4回研究会「水」(2008年2月25日(月)13:00-16:00)

“Seminar on Tank Irrigation in South India”

Presenters:

Prof. K. Palanisami (Tamil Nadu Agricultural University)

Dr. J. Muniandi (CSEAS, Post-Doctorial Fellow)

Dr. T. Sato (CSEAS, G-COE Research Fellow)

海外連携フィールドワーク

国内研究会での議論を踏まえて、マレーシア・サラワク州の大規模造林地帯と、オーストラリア南東部の半乾燥農業地帯を対象とした海外連携フィールドワークを行った(2008年1月27日~2月9日)。それらの地域を対象とする地域研究者や現地の研究者と共に、現場で、地域における生存基盤持続型の社会について議論し、その成果が、2008年3月の国際シンポジウムや、2008年度の研究会に生かされている。海外連携フィールドワークで協力いただいた研究者・研究機関は以下の通りである(敬称略)。

➤ マレーシア

祖田亮治(北海道大学大学院文学研究科・准教授)

加藤裕美(京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科・院生)

Logie Seman(元サラワク州森林官)

➤ オーストラリア

Mohammed Mainuddin (Black Mountain Laboratories, CSIRO Land and Water)

Daniel Connell (Water Initiative, The Australia National University)

Treven Jacoba (Murray-Darling Basin Commission, Canberra)

Megan Douglas (Murray-Darling Basin Commission, Canberra)

Evan Christen (Griffith Laboratory, CSIRO Land and Water)

Emmanuel Xevi (Griffith Laboratory, CSIRO Land and Water)

Tariq Rana (Griffith Laboratory, CSIRO Land and Water)

Ben Gawne (The Murray-Darling Freshwater Research Center, Wodonga)

国際シンポジウム

2008年3月12日~14日、G-COE国際シンポジウムを開催し、イニシアティブ2班のセッションでは、アジア・アフリカの地域研究で得られた知見の上に生存基盤持続型の未来像を構想するには、資源利用における地域の多様性と中長期の変化を組み込んだ制度・技術の開発が必要であることを議論した。

6.4 研究イニシアティブ3

本研究イニシアティブは、生存圏研究所と東南アジア研究所のこれまでの研究の蓄積を踏まえ、同じフィールドで共同研究を進めて実践的な文理融合を行うものである。近年、森林破壊の著しいインドネシアにおいて、産業植林（HTI）は、持続的森林圏の構築のため重要な役割をもつ。パームオイルプランテーションやアカシア林などはその例であるが、後者は度々近隣住民と紛争を起こすだけでなく、逆に森林破壊を助長することもあり、持続的森林圏の構築が望まれてきた。本研究イニシアティブは、森林資源再生と地域住民の生存基盤の仕組みに関する「再生・適用・自立」の方法論にガバナンスの視点を導入することにより、地域社会に支えられた「持続的森林圏」の創生を研究課題とした。

研究サイトの模索

本研究グループは、スマトラのパレンバンにおけるアカシアマングウムの大規模植林地を種とした研究対象地にすべく、この植林を行っている M 社との間で交渉をおこなった。これまで生存圏研究所は、アカシア材の高度利用、廃棄物の利用、樹木の育種改良、といったアカシア林の持続的経営に向けての研究や、植林地の大気・気象観測や炭素の循環計測といった生存圏科学におけるグローバルな意義を位置付ける研究を行ってきた。

M 社は、1996 年に約 30 万ヘクタールの産業人工林（HTI）造営の権利を得、この土地の中で 19 万ヘクタール余にアカシアマングウムを植林し、また、小規模な保護林、多目的有用林、および地域樹種の森林をもっている。アカシアマングウムはチップにされ、T 社の経営するパルプ工場に送られるのであった。この会社でも、特に 1998 年の政権交代以降は、地域社会と紛争が多発した。すなわち、土地権をめぐる紛争を中心に、森林の不法伐採、さらに森林火災と深刻な問題となっていた。そこで会社は、特に 2000 年以降、地域社会との融和をはかるため、それまで伐採などの森林内の作業を少数の地域外の業者に任せていたのを改めて、地域社会内の小規模業者を多数雇用する、さらに MHBM（地域共同森林経営プログラム、Mengelola Hutan Bersama Masyarakat）および PMDH（森林村コミュニティ育成プログラム Pembinaan Masyarakat Desa Hutan）により地域との共存をはかってきた。

これらに対し、地域社会との共生の実現により、持続的なアカシア林経営を可能にするための諸方策を検討する。M社による社会林業、里山振興支援などに関し、住民組織による持続的協働システムの構築の方策を検討する。就業構造、所得分配、社会組織、土地利用、経営調査および意志決定メカニズムの検討などの地域経済社会調査研究により、地域社会における循環システムや地域経済社会システムを明らかにする。またアカシア林の貢献を明らかにし、より持続的資源管理システムを検討する。さらに、小規模経営や複合化のメリットをどう生かすのかを検討する。そして、地域における資源管理の歴史や文化・社会・政治的側面を検討する。さらに合議の伝統をどう生かすのかを検討することを提案した。

また、調査の方法として、フィールドステーションを持つことにより、周辺社会の調査をインドネシア科学院や地方政府からからの調査許可を得、会社や地域社会の理解を得て、地域社会における住み込み調査を実施する、ボゴール農大（IPB）とガジャマダ大学、さ

らにシュリビジャヤ大学との協働による研究の推進することを提案した。

数回にわたって M 社と交渉したが、M 社は、本研究プロジェクトが住み込み調査を行おうとしている点について、紛争を継続している地域社会との関係で安全を保証できないという理由で、本研究イニシアティブの社会経済関連プロジェクトの研究推進に同意しなかった。ただし、これまで実施してきた、自然科学的研究は継続・発展可能である。

このような中、本研究プロジェクトは、他の研究地を模索した。その結果、S 社が候補に上がり、会社の責任者との交渉を行った。

S 社は、南スマトラ州の広大に泥炭地にアカシアクラシカルパを栽培している。このアカシアはやはり、S 社傘下のパルプ工場に送られてチップとなりそしてパルプとなる。

泥炭地におけるアカシアの栽培は、泥炭土壌からの炭素の放出、さらに泥炭地の崩壊をもたらしかねない。本研究プロジェクトは、この研究について慎重な検討を行った。この結果、泥炭地とは地球物理圏の問題として独自の領域であること、さらにその上の生物の多様性など問題は、生命圏の問題であること、そして、その上で、人間社会の諸活動は狭い意味での生存圏の問題であることが認識された。この三者の関係は、まさに本 G-COE 研究の中心テーマであり、またこれは多様な分野の研究者の参加による学際研究によって初めて解明可能となる。

現在、複数の会社との間で、泥炭地をめぐる研究について検討している。本研究イニシアティブは、今後、地域研究からは、「複合化」をキーワードに持続的森林圏を構想する。すなわち、森林の樹木から見た多層性、経営主体から見た多様性、同一経営主体における複合性・多就業を生かし、また、小規模経営のメリットを生かすことにより、産業植林周辺部におけるローカルノレッジにもとづく里山を発展させる。産業植林の内部においても、社会林業などの方策と制度の「複合化」を図る。これらのため、地域住民が森林圏形成による経済的生存基盤を認識し、積極的にガバナンスの主体になってゆく必要がある。

今後、グローバルな地球温暖化問題に対する森林圏・大気圏の変動モデル構築や、熱帯林の炭素・水循環の研究による「モニタリング・診断」、環境調和型の技術開発や森林持続の技術開発を中心とする「開発・治療」の研究を進め、熱帯地域の生存基盤持続のパラダイムを構築するためのフィールドとして泥炭地を積極的に選択し、スマトラやカリマンタンにおける研究を推進してゆく方針である。

国内研究会

- イニシアティブ 3 研究会（2007 年 8 月 2 日：於生存圏研究所）
 - 川井秀一（生存研）「グローバル COE 生存圏グループプロジェクト」
 - 水野広祐（東南研）「アカシア林 経営の地域社会科学」
 - 谷誠（農学研究科）「熱帯地域の水・炭素循環における森林の役割評価」
- 在日インドネシア留学生協会第 16 回研究発表大会（2007 年 8 月 25 日：於生存圏研究所）
 - 川井秀一（生存研）・水野広祐（東南研）がキーノート・スピーチを行う。

- イニシアティブ3研究会（2007年9月3日：於東南アジア研究所）
議題：9月10日（月）のG-COEパラダイム研究会における第3イニシアティブによる発表内容について
- イニシアティブ3 アジア講座（2007年9月25日）
「インドネシアにおける新たな発展の方向を求めて—民主化・地方分権化のインドネシアにおける生存基盤確保型発展の可能性—」
- イニシアティブ2・3合同会議（2007年10月5日：於東南アジア研究所）
 - 1) 生存研アカシアプロジェクトについて（矢野）
 - 2) G-COEのプロジェクトについて（河野）
 - 3) イニシアティブ2プロジェクトについて（柳澤）
 - 4) イニシアティブ3プロジェクトについて（水野）
 - 5) 様々な問題点と外部資金獲得のための戦略（林）
 生存研とユニットの研究者と地域研究の研究者との研究交流会
- イニシアティブ3研究会（2007年10月26日：於東南アジア研究所）
議題：
 - 1) イニシアティブ3の研究遂行上の問題点の確認
 - 2) 1を踏まえ、M社本社、現地法人などへの折衝の計画・内容
 - 3) 今年度中に行うワークショップ等の計画、招待者の人選
 - 4) 上記に関連する予算調達と配分
- イニシアティブ3研究会（2007年11月19日：於生存圏研究所）
議題：
 - 1) 11月8—11日のMHPへの出張報告と今後の対策（水野、川井、生方）
 - 2) 会計報告
 - 3) 研究紹介：泥炭湿地（阿部）、ホームガーデン（Retno）
- イニシアティブ3研究会（2008年1月7日：於東南アジア研究所）
 - 1) 研究紹介（30分）：
川井秀一（京大生存研）、Ragil Widyorini（京大生存研）、Bambang Subiyanto（LIPD）、Eko Bhakti Hardiyanto（Gadjah Mada University）、Anita Firmanti（RIHS）、Rosyid Gunawan（MHP）、Tri Suryanti（MHP）、Agus Wicaksono（MHP）：タイトル：「熱帯早生樹造林地における樹木生長量評価（その1）」
 - 2) パレンバンおよびMHP出張の報告と今後の対策（約60-70分）
 - 3) 会計報告（10分）
- イニシアティブ3研究会（2008年2月18日：於生存圏研究所）
 - 1) MHPおよびSinar Masとの交渉および研究に関する今後の方向性（60分）
 - 2) 会計報告（10分）
 - 3) 研究紹介（40～50分）：
山下尚之（京都大学大学院農学研究科）
「土壌養分から見たアカシアマンギウム植林地の持続性」

- イニシアティブ 3 研究会 (2008 年 3 月 13 日 : 於東南アジア研究所)
 - 1) 研究発表 : 嶋村鉄也氏 (京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科) 「熱帯泥炭地の生態系機能」
 - 2) 南スマトラにおける調査地の選定 S 社との協力について
 - 3) 会計報告

海外研究会・シンポジウム等

- KAGI 主催第 10 回京大国際シンポジウム (2007 年 7 月 26-28 日 : 於インドネシア・バンドゥン工業大学)

川井秀一 (生存研) ・水野広祐 (東南研) が発表者として参加。
- “East Asian Perspectives on Southeast Asia” (2007 年 9 月 19-20 日 : 於台湾)
- LIPI Southeast Asian Forum (2007 年 11 月 26-27 日 : 於インドネシア ジャカルタ)
- イニシアティブ 3 プレゼンテーション (2007 年 11 月 29 日 : 於インドネシア南スマトラ州、ムシフタンプルサダ社)

発表者・タイトル :

 1. Kawai Shuichi

"Collaborative research project among Kyoto Univ. LIPI and MHP Sustainable Forest Management, Forest Products and Regional Environment"
 2. Mizuno Kosuke

"In Search of Sustainable Humansphere in Indonesia- Forestry Model of Sustainable humansphere in Sumatra, Indonesia"
- イニシアティブ 3 研究協力の協議 (2007 年 11 月 30 日 於インドネシア南スマトラ州)

南スマトラ州 パレンバン市にあるスリビジャヤ大学における研究協力の協議

発表者・タイトル :

 1. Mizuno Kosuke

"Forestry Model of Sustainable Humansphere: the Case of a Sumatran Community"
 2. Fachrurrozie Sjakowi

" Welcome to the 'HTI Province of South Sumatra"

フィールドステーションの開設を含む、様々な研究協力の可能性が検討された。
- イニシアティブ 3 意見交換 (2007 年 11 月 30 日 : 於インドネシア南スマトラ州)

G-COE の活動に関連して南スマトラにおいて活動する様々な NGO との間で意見交換が行われた。

そこには、WALHI,インドネシア農民組合南スマトラ支部、南スマトラ農民組合、K SKP (農民福祉連帯統一グループ) などが参加し、活発な意見交換が行われた。
- Private Faces of Power and Institutions in Southeast Asia (2007 年 12 月 6-7 日 : タイ バンコク)

6.5 研究イニシアティブ4

本研究イニシアティブは、生存基盤持続型発展のための、地域の知的潜在力を発見し理解することを目的としている。初年度においては、本イニシアティブの目的を達成するためにいかなる問いを立て、それにどのようなアプローチをすればよいのかをオープンな形で議論した。初年度は、3回の全体研究会、1回のワークショップ、1回の国際ワークショップを開催した。

研究会・ワークショップ

➤ 第1回研究会（2007年10月29日）

グローバル COE イニシアティブ4の始動にあたり、今後の方向性を考えるために、参加するメンバーそれぞれが本研究プログラムにおける研究計画や抱負について報告した。発表者は、松林公蔵、東長靖、重田眞義、西真如、亀井敬史、生方史数、山越言、速水洋子、足立明である。各人の報告からは今後の展開につながる論点が示された。キーワードのみを羅列すると、たとえば「文化の再生産」「人とモノの関係性」「高齢者の意味と生きがい」「スーフイズムと環境思想」「在来知」「相互扶助の住民組織」「持続可能な都市エネルギー」である。

➤ 第2回研究会（2007年11月13日）

重田眞義（ASAFAS）「アフリカ在来知の生成と実践—研究の構想と展望」

松林公蔵（東南研）「アジア高齢者の主観的 QOL の普遍性と多様性」

- ・ 重田報告は、エチオピアの民族集団「アリ」の重要な食用植物である「エンセーテ（Ensete）」の栽培実践において、品種の多様性が保持されているメカニズムについて論じた。そこには無意識的なレベルで種の多様性や自然保護を可能とするような在来の知が存在するのである。「在来知（Local knowledge）」は、人びとが自然・社会環境と日々関わるなかで形成される実践的、経験的な知であり、本プロジェクトである持続的生存基盤を考えるにあたって重要なキーワードとなる。
- ・ 松林報告は、21世紀の高齢者がいかなる生きがいをみいだすことが可能なのかについて、Quality of Life の視点から論じた。＜サクセスフル・エイジング＞においては、これまで理解されていたようなフィジカルな健康、メンタルな健康とともに、いわゆるスピリチュアルな視点を取り入れることがきわめて重要になっている。現在の医療では、純粋科学的な“Evidence Based Medicine”とともに、個々人の訴えに依拠した医療“Narrative Based Medicine”が注目されている。これらに加えて、生命や疾病そして死の意味を問いなおす“Value Based Medicine”としての医療のありかたが重要になることが指摘された。

➤ 第1回ワークショップ（2007年12月14日）

「技術と社会のネットワーク—研究課題と展望」

田辺明生 趣旨説明

福島真人（東京大学）「科学・技術と社会？—STS 研究の展望と課題」

篠原真毅（生存研）「宇宙太陽発電所の是非・宇宙技術と地域社会との連携」

生方史数（東南研）「ユーカリ論議からみえてくるもの」

足立明 (ASAFAS) 「人とモノのネットワーク」

コメンテーター：山越言 (ASAFAS) ・中岡哲郎 (大阪経済大)

- ・ 本グローバル COE がめざす持続型生存基盤パラダイムの創生のためには、世界のさまざまな地域における知的潜在力と、先端的な科学知識を架橋して、人間が生きる環境についての新たな存在論・認識論を打ち立てる必要がある。そのために有効なアプローチのひとつとして、現代世界における科学技術と社会の関係に注目し、そのネットワークが生成する社会・生態的な動態に注目しようとした。本ワークショップでは、人類学、地域研究、サイエンス・スタディーズ、生存圏科学などの諸領域の最前線において活躍する研究者が、技術と社会のネットワークについて、その研究課題と展望を論じ、活発な議論が行われた。

➤ 第3回研究会 (2008年1月28日)

藤倉達郎 (ASAFAS) 「ネパール貧困層と生存のための政治」

中山節子 (ASAFAS) 「マラウイ湖上空間への都市イメージの投影」

- ・ 藤倉報告は、西ネパール平野部債務農業労働者「カマイヤ」による解放運動について論じた。これは、ネパールにおいて1990年代以降に活発化した、社会開発や人権問題に関わる住民組織の一つである。この運動は、2000年には政府による「カマイヤ解放宣言」という画期的な成果をもたらした。現代の政治や社会運動を理解するにあたっては、持続的に存在する集団ではなく、イシューに応じてプラクティカルに形成される政治的な組織やネットワークに注目する必要があることが指摘された。
- ・ 中山報告は、南部アフリカ・マラウイ湖漁撈者による湖沼資源認識の変遷について論じた。マラウイ湖西岸における漁撈に関わる在来宗教実践は、ミッシヨナリーとの接触を契機に秘匿されるようになった。本来は関連性のある全体として存在していた「在来知」は、信仰、自然科学、生産などの領域に分割され、それぞれ秘匿や公開や改良などの処置が付されていった。現在見られる地域の在来知は、こうした歴史的変遷を経たものであることが指摘された。

➤ 国際ワークショップ (2008年2月14-15日)

- ・ 「在来知とそのポジティブな実践」(Local Knowledge and Its Positive Practice) についての国際ワークショップがエチオピア・アジスアベバで開催された。このワークショップに研究イニシアティブ4は共催のかたちで加わった。ワークショップは2日間にわたり、6つのセッションで計15本の報告がエチオピアと日本の研究者によって行われた。各セッションで質疑や討論が活発におこなわれた。

初年度は、半年間の活動であったが、「知的潜在力」の概念をめぐって活発な議論が繰り広げられた。結論はまだ先であるが、関連するさまざまな問題意識をメンバーと共有するに至った。

7. 広報成果発信部会

広報成果発信部会の活動は、大きく三つに分かれる。1) 本プログラムの研究成果発信の場を設け、あるいは、既存の研究成果発信の場を本プログラムの研究成果発信のために補助促進する。2) ニュースレターの発行（年二回予定）。3) ウェブページ作成、である。この他、本プログラムを推進していく上での、対外的なPRに関わる業務も、事務局と共同で進めている。例えば、発足当初のロゴの作成なども本部会が担当した。これらの業務を、四つの基幹部局の教員・若手スタッフと、事務局メンバーとで担っている。以下、追って平成19年度の活動を紹介する。

7.1 研究成果発信

- ① 既存の Kyoto Working Paper Series on Area Studies に、G-COE Series を設け、年度内に2号出版した。
 - ・ No. 1: "Studies on Hanoi Urban Transition in 20th Century Based on GIC/RS" March 2008. by Ho Dinh Duan and Mamoru Shibayama
 - ・ No. 2: "Beyond the Sunni-Shiite Dichotomy: Rethinking al-Afghani and His Pan-Islamism" March 2008, by Junichi Hirano
- ② African Monograph Series
 - ・ African Study Monograph No.28(3)
 - ・ African Study Monograph No.28(4)
 - ・ African Study Monograph No.29(1)
 - ・ African Study Monograph Suppl. No.37
"Bridewealth Negotiations among the Turkana in Northwestern Kenya" by Itaru OHTA
 - ・ African Study Monograph Suppl. No.38
"Aux Sources du Lingála: Cas du Mbenga de Mankaza — Nouvel Anvers" by André MOTINGEA Mangulu and BONZOI Mwamakasa
- ③ Kyoto Review of Southeast Asia (ネットジャーナル)
 - ・ 2007年3~10月号 (G-COE 成果発信部会により編集補助)
- ④ 京都大学東南アジア研究所叢書出版
 - ・ SHIRAISHI Takashi; and Pasuk PHONGPAICHIT, eds. 2008. The Rise of Middle Classes in Southeast Asia.
 - ・ ABE Shigeyuki; and Bhanupong NIDHIPRABA, eds. 2008. East Asian Economies and New Regionalism.
 - ・ TAMADA Yoshifumi. 2008. Myths and Realities: The Democratization of Thai Politics.

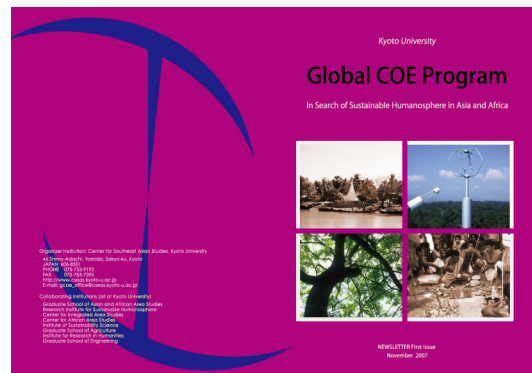
- NOBUTA Toshihiro. 2008. Living on the Periphery: Development and Islamization among the Orang Asli.

7.2 ニュースレター

本年度は秋に和文・英文それぞれの初刊号を発刊し、2号以降は、年二回のペースで発刊する方針とした。11月9日に和文を発刊、同月11日に仙台、東北大学片平さくらホールで開催された地域研究コンソーシアム「動き出したグローバル COE プログラム：地域研究の展開と研究教育体制の課題」にて配布し、その後3115冊を配送した。英文は、11月22日に発刊、インドネシアのジャカルタで同月26日、27日に開催された国際シンポジウム“The 1st Kyoto University・LIPI Southeast Asian Forum : In Search of New Paradigm on Sustainable Humanosphere”にて配布し、その後685冊を配送した。

初刊号の内容は、プログラム開始直後の発刊でもあり、プログラムの趣旨、概要、パラダイム研究と各研究イニシアティブ、そして新任の若手研究者の紹介が中心となった。どちらかといえば、見た目も内容もパンフレットの的な性格のもので、二号以降が発刊されても、パンフレットとして使用可能なものとなった。

ニュースレターは、ウェブページにも掲載している。



7.3 ウェブページ

① HP の目的

HP の目的は、本プログラムの活動内容や成果報告を随時公開することである。

HP コンテンツを円滑に運営するために、システム管理面や、HP 機能が充実した汎用 CMS(Content Management System)、Geeklog の導入をすすめた。

※Geeklog について

汎用 CMS。多言語対応 (UTF-8) 、デザインのテンプレート化、データベースを使用したシステムの一元管理が可能。また、プラグイン機能を使用することで、WEB サイト内にブログ機能、掲示板、ファイル管理など、通常 WEB サイト管理者でないと行うのが難しかった作業が、ユーザーレベルで追加修正が可能。さらに、本体そのものの拡張も容易に可能な仕組みを採用しているため、ユーザーレベルでの細かなプログラム修正を行うことも可能。

② HP の公開と変化について

公開の流れ

- 6月 Provisional Website (日・英)公開
- 8月 CMS 導入のため仮サーバにて、試験運用開始、コンテンツ作成
- 9月 本サーバ設置、CMS 導入・運用試験、HP コンテンツ作成
- 11月 日本語ページ公開
- 1月 英語ページ公開



図 1 : Provisional Website (日本語)



図 2 : Provisional Website (英語)



図 3：日本語ページトップ

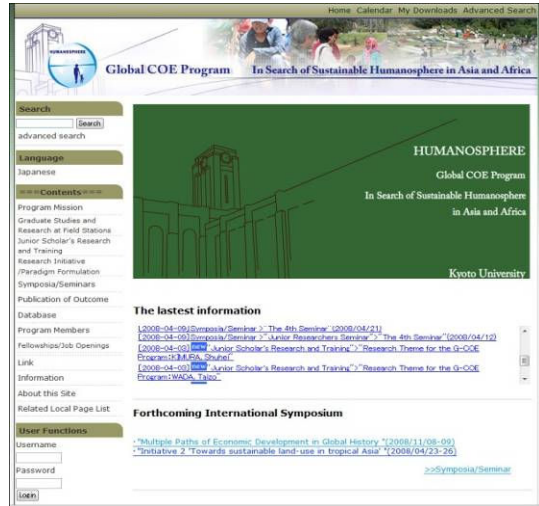


図 4：英語ページトップ

③ 主な HP 機能とその活用

- ・ カレンダー、メディアギャラリー、掲示板、ファイル管理(ダウンロード)、フォーラム(フォームによる登録)など

➤ 図 5：カレンダー

カレンダー機能は、研究会情報を中心にこまめに掲載をすすめており、毎月の情報が充実。各研究活動が一目でわかるようにすすめている。

➤ 図 6：メディアギャラリー

メディアギャラリーでは、画像掲載のみでなく、デジタルコンテンツ情報を整理・アーカイブする機能がある。タイトルをはじめ、キーワードや詳細説明が入力できる。

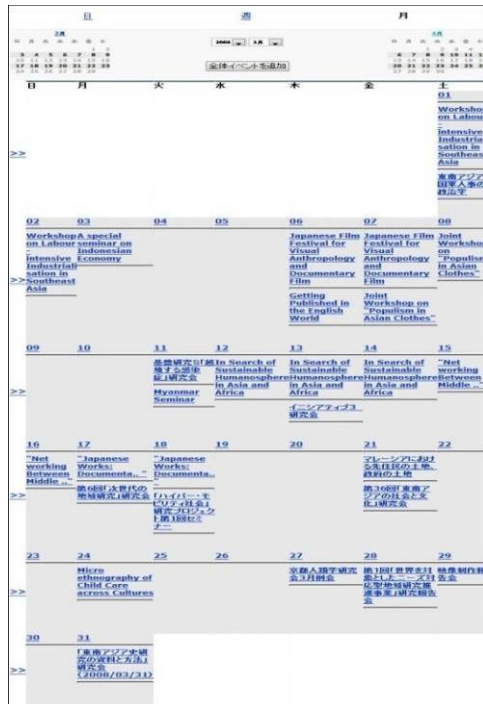


図 5：カレンダー



図 6：メディアギャラリー

➤ 図 7：掲示板

急な、研究会の変更情報や Web に関する情報を掲載。

➤ 図 8：ファイル管理

利用者がデータをダウンロードできる。ロゴ、レターヘッドなど。

➤ 図 9：フォーラム(フォーム)

国際シンポジウムの出欠状況を登録するためのフォーム。

登録状況は、一覧表としてブラウザで確認ができる。

掲示板	件名	最新投稿
G-COE図書部会掲示板	図書部会掲示板	2008年4月24日 11:53 JST
研究会内容変更のお知らせ	研究会次世代イニシアティブ研究助成報告会のご案内【会場変更】(2008/2/1...	2008年4月 7日 22:19 JST
研究会内容変更のお知らせ	イニシアティブ3 第3回研究会...	2008年2月14日 13:50 JST
サイト機能お知らせ	メディアギャラリー機能のお知らせ...	2008年2月 9日 17:20 JST
研究会内容変更のお知らせ	The Third AFC International Symposium: R...	2008年2月 6日 12:22 JST

図 7：掲示板

ファイルリスト: 10 件あります。

[レターヘッド 9](#)

[ロゴ 1](#)

最新リスト:

カテゴリ:レターヘッド ファイル提供: [webmaster](#)

[生存圏研究所](#)

このワードファイルを印刷する時、以下のエラーメッセージが表示されますが、デザイン上の問題で入力された本文には影響がありません。そのまま印刷を継続して下さい。
When you print a file, please ignore the following error message.
This problem is relevant to the design of a print format, so please keep to print

バージョン: 日付: 2008-02-04 評価: 0.00 16 1.51 MB

[コメント作成](#) | [ダウンロード](#) | [全文表示](#) | [このファイルの評価](#) | [破損ファイル](#)

カテゴリ:レターヘッド ファイル提供: [webmaster](#)

[生存基盤科学研究ユニット](#)

このワードファイルを印刷する時、以下のエラーメッセージが表示されますが、デザイン上の問題で入力された本文には影響がありません。そのまま印刷を継続して下さい。
When you print a file, please ignore the following error message.
This problem is relevant to the design of a print format, so please keep to print

バージョン: 日付: 2008-02-04 評価: 0.00 16 1.51 MB

[コメント作成](#) | [ダウンロード](#) | [全文表示](#) | [このファイルの評価](#) | [破損ファイル](#)

カテゴリ:レターヘッド ファイル提供: [webmaster](#)

[地域研究統合情報センター](#)

このワードファイルを印刷する時、以下のエラーメッセージが表示されますが、デザイン上の問題で入力された本文には影響がありません。そのまま印刷を継続して下さい。
When you print a file, please ignore the following error message.
This problem is relevant to the design of a print format, so please keep to print

バージョン: 日付: 2008-02-04 評価: 0.00 12 1.51 MB

[コメント作成](#) | [ダウンロード](#) | [全文表示](#) | [このファイルの評価](#) | [破損ファイル](#)

図 8：ファイル管理

Registration2008

Registration form
Items *** are necessary

Given name *

Middle name

Family name *

Title

Affiliation *

Contact address *

Telephone *

Fax

Email *

Email Confirmation *

Participation *
2008/03/12 Yes No
2008/03/13 Yes No
2008/03/14 Yes No

Reception * 2008/03/12 Yes No

Note

図 9：フォーラム

④ ページ総数と更新頻度

ほぼ毎日の更新活動をおこなっている。

主な HP の内容：プログラム概要、研究会情報、プログラムメンバー紹介など

日本語：ページ総数：500 ページ / 英語：ページ総数：280 ページ

合計：780 ページ

⑤ アクセス数(日本語・英語ページ)について

アクセス解析は、

Google Analytics(<http://www.google.com/analytics/ja-JP/index.html>)を活用した。

解析期間

- ・日本語ページ： 2007年11月30日～2008年4月30日
- ・英語ページ： 2008年1月28日～2008年4月30日

	訪問者数合計	ページ閲覧数合計
日本語	18570	113340
英語	7169	15855

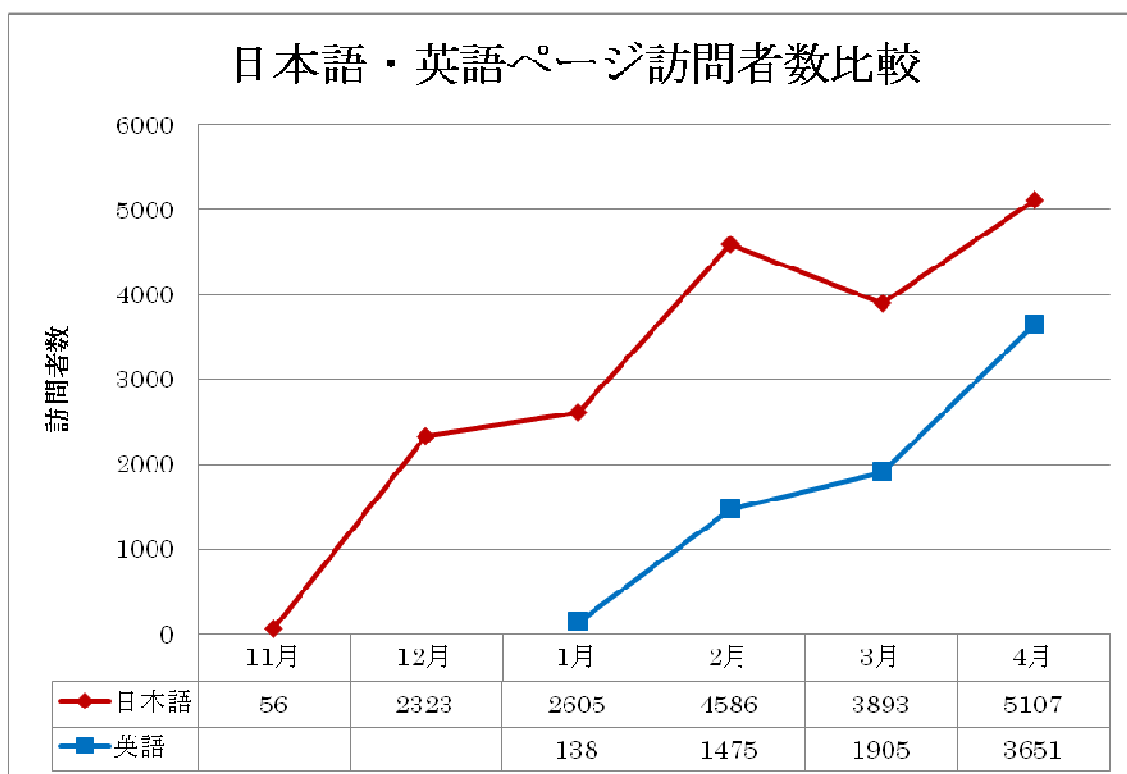


図 10：日本語・英語ページ訪問者数の推移（月別）

図 10 からは、訪問者数が日本語・英語ページともに伸びており、HP 利用者が
 増えていることが示される。3 月には国際シンポジウムが開催され、大幅に訪問
 者数が伸びた。

一日の平均訪問者数は 日本語は、121 英語は 76 セッション数である。

⑥ 国・地域のアクセスについて

国・地域の訪問者が図 11・図 12 で示される。図 11 では、日本国内の各地域から

の訪問者が度の割合で訪れたかがわかる。図 12 では、海外からの訪問者の割合がわかる。

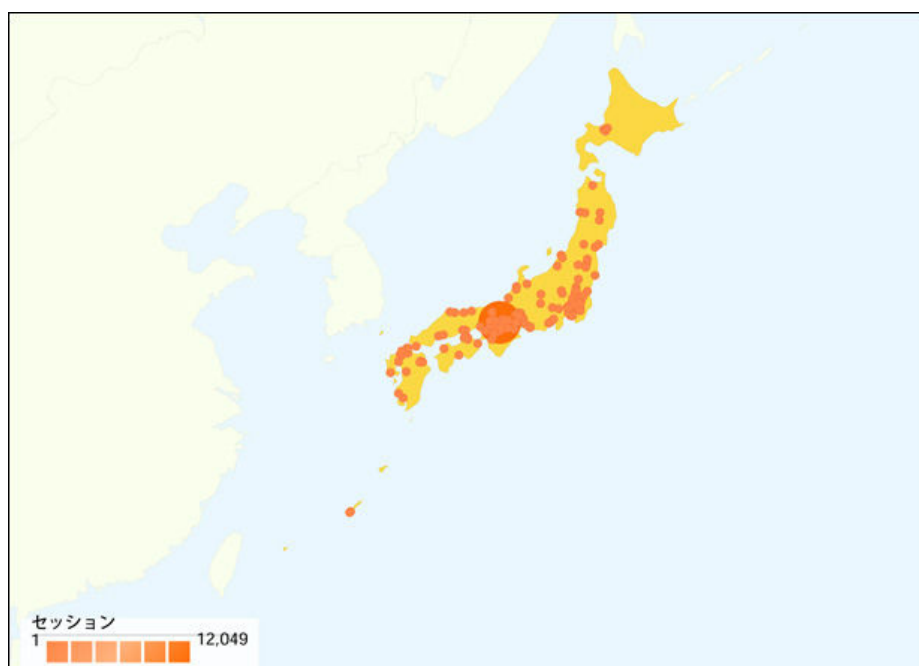


図 11：日本国内 263 種類の都市の訪問者（日本語ページ解析）

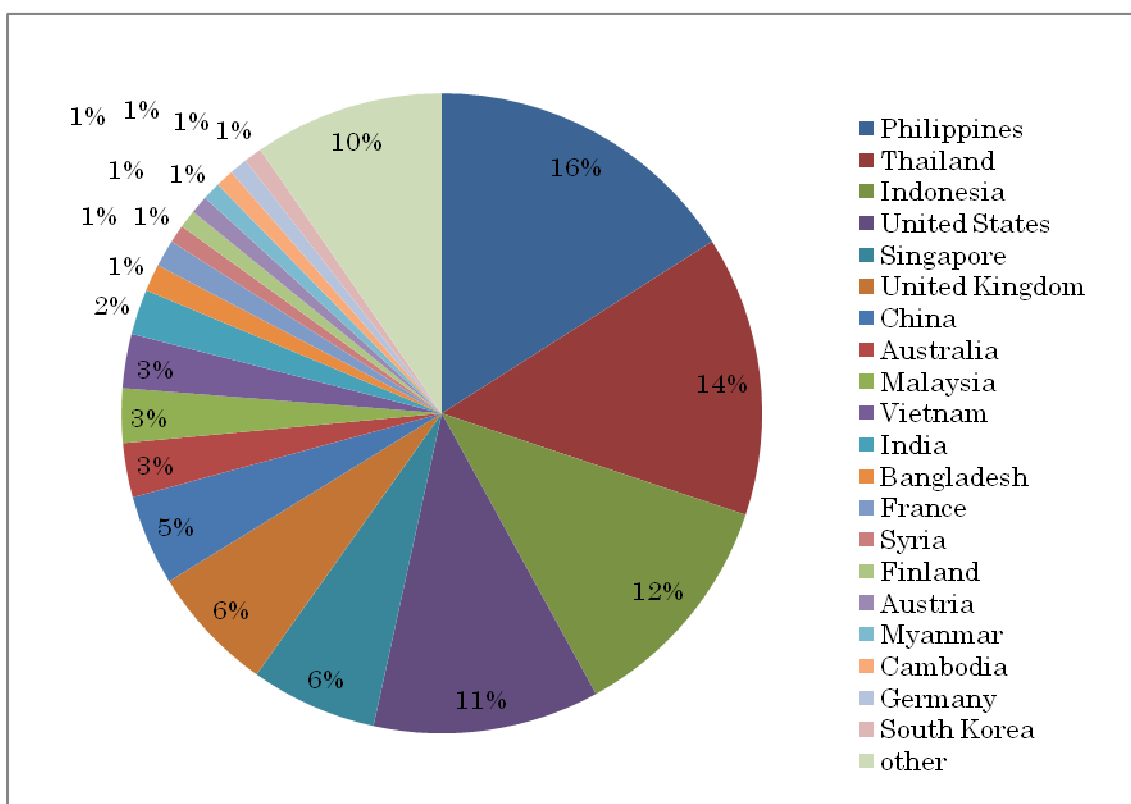


図 12：海外からの訪問数：42 カ国（英語ページ解析）

⑦ システム開発について

ホームページ立ち上げ当初から、その基幹システムに多言語への対応、システム開発の手軽さ、SEO 対策などに対して先駆的な試みを行っている新興オープンソース CMS を取り入れたことで、システム開発が従来と較べて迅速かつ安価に仕上げられるようになったことは特記すべきである。また公開を前提としたシステム開発方針を取り入れたことは、システムの社会還元をおこなうだけでなく、持続的な運用・発展において、コミュニティとの互助体制を築くことが出来たことも今までになかった試みである。それらの主な成果については下記に掲載する。

なおシステム開発は、開発そのものの容易さもあり、業者委託したものと自らが開発したものに分類される。いずれも公開あるいは CMS システムそのものに組み込まれる成果を挙げている。

1. オンラインブログ CNET Japan「大学がオープンソースに貢献する」, 2008/3/30, http://japan.cnet.com/blog/geeklog/2008/03/30/entry_27000098/
2. Geeklog Japan サイト「記事管理画面のコピー機能追加ハック」, 2008/3/6 公開, <http://www.geeklog.jp/filemgmt/index.php?id=310>
外部委託したシステムを公開。本機能は、翻訳などの作業を行うことを中心に、以前からコミュニティ内での要望が高かったこともあり、その反響は大きい。
3. 木谷公哉, Geeklog Japan サイト「多言語表示・管理のためのハック集」, 2008/02/07 公開, <http://www.geeklog.jp/filemgmt/index.php?id=298>
多言語の管理利便性を高めるために拡張したシステムおよびその説明。サイドメニューの多段階層化など、きめ細かいカテゴリーが必要なサイトなどに活用されるきっかけとなった。
4. 木谷 公哉, Geeklog Japan サイト「ブロックを多言語対応で表示する」, 2007/12/22 公開, <http://wiki.geeklog.jp/index.php/%E3%83%96%E3%83%AD%E3%83%83%E3%82%AF%E3%82%92%E5%A4%9A%E8%A8%80%E8%AA%9E%E5%AF%BE%E5%BF%9C%E3%81%A7%E8%A1%A8%E7%A4%BA%E3%81%99%E3%82%8B>
多言語表示の利便性を大幅に向上するための仕組みにするための支援を行い、そのシステムが評価され Wiki に掲載された。

8. 拠点基盤整備部会

拠点基盤整備部会は、1) G-COE 活動全体に関わる、情報その他の基盤を整備・サポートすることによって活動のレベルをあげ、成果公開を促進する、2) 生存基盤に関するデータベースの構築、3) 生存基盤基本図書、地域研究関連図書、現地語資料等の収集、の3つの役割を担ってスタートし、それぞれ、情報基盤、データベース、図書の小部会にわかれて活動を開始した。以下にこれまでに得られた活動の成果と今後の展望について記す。

8.1 情報基盤

- ① 遠隔会議システムの運用開始。 モバイル遠隔会議機材 (Polycom VSX7000s) を主とするシステム 3 式を、東南アジア研究所ジャカルタ事務所、宇治生存圏研究所、旧工学部 4 号館に配備し、既設の東南アジア研究所との通信によって、遠隔会議、研究会が可能となる礎を築いた。特に、2007 年 11 月 26 日には、インドネシア科学院と東南アジア研究所を繋いで、G-COE 共催の「第 1 回京都大学東南アジアフォーラム」が開催され、海外も含めた拠点整備を始めている。特に海外において遠隔会議を行うためには時差およびネットワーク上の様々な問題があるので、今後はケースバイケースであるそれらについて調査を行うと共に、定常的な運用体制についても検討している。



遠隔会議の様子（基盤整備部会）

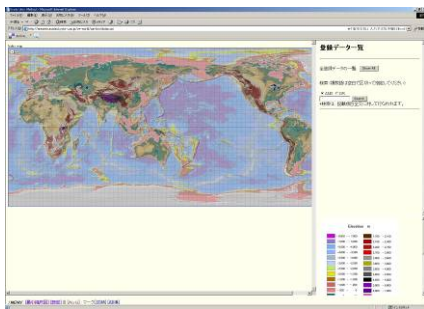


第 1 回東南アジアフォーラム

- ② HP サポート。 京都大学学術情報メディアセンターのレンタルサーバを運用して、G-COE ホームページの公開およびバックアップシステムの構築などのメンテナンスを開始した。
- ③ G-COE で利用しているデータベースサーバ、メール、メーリングリスト、事務処理、研究促進環境を安全・安定に提供するため、東南アジア研究所内ファイアウォール、統合管理型端末セキュリティシステムの強化・整備を行なった。また、今後集積される生存基盤データベース用のサーバを購入し、現在整備中である。これらの設備は、本年秋に予定されている稲盛財団新棟に移設が予定されている。これによって、ネットワーク利用帯域は現行の 100Mbps から 1Gbps へ拡張される予定である。

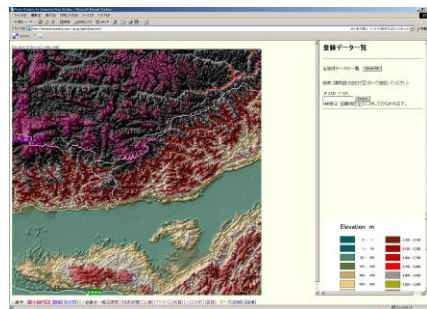
8.2 データベース

- ① 地点情報閲覧ツールの開発と運用。 G-COE の研究成果は、逐次 HP 等で公開されるが、これらを汎用データベースとして集積することによって、その全貌を見通すことが可能になるばかりでなく、具体的な地点情報として明示することによって、様々な用途に使用することができる。これまで 21 世紀 COE プログラムで開発された、「地域研究画像データベース」の枠組みを全世界に拡大し、地点情報と写真、記載情報を表示すると同時に、リンクボタンを設けることによって文献、HP の URL などの情報源の参照が可能となった。



G-COE 地点情報データベース
との参照

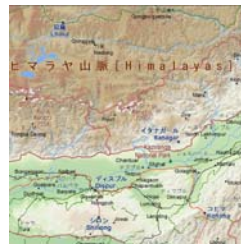
→
拡大



デジタルアトラス



リンクを張った
地点情報の提示



基本図は、NASA(米国航空宇宙局)提供のデジタル標高モデル(SRTM30 を加工したものを用い、参照図として、米国ランドマクナリ社の世界デジタルマップ (WDDb) を、ジオカタログ社が日本語化したものを用いた。今後は、G-COE プログラム参加者が HP 情報を提出する際に地点情報の提供を求め、情報の集積を図る。この雛形は京大式地点情報入力/閲覧ツールとして、21 世紀 COE サーバに仮設収納中

(<http://areainfo.asafas.kyoto-u.ac.jp/ve/>) で、データサーバの運用開始をまっ

て移設される予定である。

- ② 生存基盤データベースの開発、整備。 本プロジェクトの目指す「持続型生存基盤パラダイム」の創生に不可欠な文理融合を、地理情報をベースとして推進すべく、「生存基盤データベース」の開発に着手した。2007 年度は、イニシアティブ 2「人と自然の共生研究」に属し、「水」という共通した研究テーマを持つ若手研究者 5 人で、数回のミーティングを行い、本データベースの持つべき特徴などについて議論を行った。また、ネット上に散在する各種地理情報を収集し、ブログサービスにより情報を共有しながら意見交換を進

めた。2008年度は、イニシアティブ1「環境・技術・制度の長期ダイナミクス」を中心として、生存基盤科学研究ユニット「生存圏シミュレーションのためのデータベース構築」プロジェクトとも協同しながら、各イニシアティブの若手研究者の意見を集約し、データベースの構築を具体的に開始する。また、集められた情報を統合し、テナティブな「地域サステナビリティ指数」を作成し、イニシアティブ1研究会での議論を通じて、データベースおよび指数の充実を図っていく。

8.3 図書

① 生存基盤関連図書の整備

各イニシアティブで研究上必要な資料や GCOE 関連の講義に必要な資料を生存基盤関連図書として1箇所配架し、研究を促進するため、平成19年度には116冊の書籍が購入された。これらの書籍は、東南アジア研究所図書室が購入・整理を代行し、アジア・アフリカ地域研究研究科アジア専攻図書室が貸出し業務を行なっている。

② 地域研究関連図書の整備

現地語諸資料を中心とする図書の整備拡充を図るため、平成19年度には、東南アジア関係図書870冊、マイクロフィルム22リール、南アジア関係図書766冊、西アジア図書924冊、雑誌16タイトル、アフリカ関係図書196冊が購入された。これらは各部局の図書室に配架されるが、現在圧倒的に収納スペースが不足しており、本年度秋に予定されている稲盛財団新棟新営後にスペースの配分を再検討せねばならない状況に陥っている。

③ 書籍登録、分類等

図書予算の約2割を非常勤雇用にあて、書誌情報の入力、図書整理をおこなっている。

④ HP公開

図書小部会では、G-COEのHPに、新着情報、図書リスト、推薦図書などのコンテンツからなる購入図書情報を掲載し、常時アップデートしていく体制を整えた。

8.4 観測機器・関連設備の整備

① 赤外線CO₂濃度計

熱帯雨林での炭素固定に関する役割を評価するために、拠点試験地において、本機器を含む測定システムを整備して、炭素収支を構成する複雑多様な二酸化炭素の輸送量の測定を実施した。



土壌呼吸速度測定の様子

② 赤道大気レーダー・観測データ保管装置

インドネシア・スマトラ島の赤道直下には生存圏研究所の赤道大気レーダー (Equatorial Atmosphere Radar; EAR)が設置されており、インドネシア航空宇宙庁(LAPAN)との共同で現在まで赤道大気の観測を続けている。観測機器整備では、まず EAR から得られる膨大な観測データの保管庫として、RAID ディスク装置を購入した。

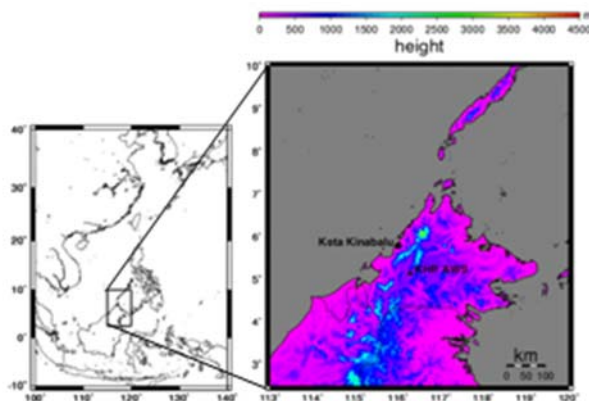
③ 植生・水門研究のための地上気象観測装置

G-COE のイニシアティブ 3 では、衛星データを用いた植生や水文の研究を重要視しているが、正しい測定の基礎となる地上気象観測装置を整備した。

④ KHP アカシア林地 自動気象観測装置設置

アカシア林における自動気象観測装置を下記に設置した。

- ・ 設置日:2008年3月22日
- ・ 設置場所:マレーシア サバ(Sabah)州 Keningau Sook 事業植林地内
- ・ 設置場所の地理情報: 5°09'04.4"N, 116°17'54.3"E
- ・ 海拔高度:376m
- ・ 観測要素:気温、露点温度、気圧、降水、風速、風向
- ・ 観測の時間分解能:1分間隔



(左図)マレーシアを含む東南アジア広域図 (右図)左図の四角領域の標高図。
KHP AWS は今回測器を設置した地点



気象測器(屋根の側面に取り付け)

⑤ 木材標本の保管庫の整備:

生存圏データベースの主要な部分でもあり、研究上必要な材鑑や講義やワークショップに必要な資料を配架して研究を促進するため、平成 19 年度には、既存の材鑑調査室東部屋43平方メートルの部分の改修と、資料棚の整備を行った。

保管庫では、古建築材標本や大型木材標本を機能的に保管するため、スチール棚二架と特注の大型木製棚を購入し、標本の整理を行った。(写真1)さらに、標本の災害等による被害を防ぐため、安全衛生上必要な転倒防止措置を講じた。また実習用書籍の書棚を生存圏バーチャルフィールドに設置した。(写真2)



写真1



写真2

8.5 展望

採択決定後年度の途中で開始された本 G-COE プログラムでは、まず既存の設備や図書との無駄のない接合を図る必要があったが、拠点基盤整備部会の平成 19 年度の活動を通じて、その活動の大綱が定まり、順調に実行されている状況といえる。しかし、当初の目的を達成するためには、以下の諸点が今後の解決すべき問題点として挙げられる。

1. データベース小部会では、パラダイム研究会、各イニシアティブ、次世代研究イニシアティブにおける諸成果をくみ上げることによって、文理融合型の生存基盤データベースを構築することを計画しているが、現在までのところ各研究者におけるそのようなモチベーションはあまり高くないと思われる。プロジェクトが進展する過程で、個々の研究テーマを超えた問題意識が共有されるようになれば、これまで述べてきた活動に加えて、新たな課題設定をおこなう予定である。
2. 参加部局内で現在進行中の地域情報学の成果（地域研究データベースシステム HUMAP、T2MAP）とどのような整合性、データの互換性を持たせていくかが今後の課題として残されている。
3. 各部局で異なる図書の分類法の統一化についての議論が進められている。特に現地語資料にどのような分類を用いるかについての基準がないため、十分な討議が必要である。

9. 国際アドバイザーボード

アドバイザーボードによる本グローバル COE プログラムへの評価や助言は、各イニシアティブやパラダイム研究会のもとでの調査ならびに研究活動を国際的な学的環境に位置づけ、これをより良きものとするために必須である。初年度は、本プログラムのもとで推進されている諸活動を真に利するアドバイザーボード決定のための重要な準備期間として位置づけ、プログラム・リーダーと各イニシアティブの代表がそれぞれの活動に深く関わる海外の一線級の研究者との交信を開始した。このうちの若干名は平成20年度3月12日~14日に行われた第一回国際会議に招聘し意見交換を行った。本国際会議では、最終日に「プレ・アドバイザーボード・ミーティング」を開催し、海外よりの参加者を特に招集し、アドバイザーボード構成員候補の推薦ならびに本プログラムの運営や海外研究拠点とのネットワーク化についての具体的提言を受けた。その場で表明された期待として多かったものとしては、「本プログラムのもつ文理融合的性格はきわめて世界的にも希有なものであり、これを成功させることが持つ学的意味の大きさ」であり、提言としては、「これまではパラダイム形成に向かって共同作業をするところまでは成功しているが、今後、個別研究とどのような接点をつけていくか、とくにイニシアティブのレベルでのパラダイム形成が重要である」といったものがあった。

「プレ・アドバイザーボード・ミーティング」の参加者、ならびにプログラム・リーダーと各イニシアティブ代表がアドバイスを受けた研究者は以下の通りである。

アンガス・マディソン（グローニンゲン大学・教授）経済史学
ケネス・ポメランツ（カリフォルニア大学アーバイン校・教授）歴史学
パトリック・オブライエン（ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス・教授）歴史学
ルドルフ・デコンニク（モントリオール大学・教授）地理学
ジェームス・スコット（エール大学・教授）政治学
アンドリュー・ウォーカー（オーストラリア国立大学・太平洋・アジア研究所・教授）文化人類学
アルフレッド・クロスビー（テキサス大学オースチン校・教授）歴史学
デヴィッド・クリスチャン（カリフォルニア大学サンディエゴ校・教授）歴史学
デヴィッド・ソネンフェルド（ニューヨーク州立大学アルバニー校・教授）社会学
エンデン・スカラ（インドネシア科学院・研究部長）生態学
サラ・ベリー（ジョンズホプキンス大学・教授）文化人類学
ナンディニ・スンダー（デリ大学人類学部・教授）文化人類学
クリス・ベーカー（インデペンデント・スカラー）社会学
パスック・ポーンパイチット（チュラロンコン大学経済研究所・教授）経済学
アナ・ツィン（カリフォルニア大学サンタクルーズ校・教授）文化人類学

平成20年度には、国際アドバイザーボード・メンバーを決定し、ボードミーティングのため若干名を京都に招聘する予定である。

10. 自己点検評価委員会

自己点検評価委員会は、第8回運営委員会（2008年2月）において、委員会委員の構成を以下のように承認し、本格的に活動を開始した。

- ・川井委員を委員長とし、各部会・各研究イニシアティブの代表で構成する。
- ・今年度の成果について、4月の早い時期に報告書を作成し、運営委員会で承認する。

第10回運営委員会（2008年4月）において自己点検評価報告書の原案を提示し、承認された。その後、報告書案の目次と分担にしたがって執筆を依頼し、部会および委員会からの原稿を取りまとめた。原稿取りまとめと編集にあたっては、本委員会委員のほか、事務局ならびにG-COE助教（木村、生方、甲山）の協力を得た。

報告書の目次案を示した運営委員会資料を参考に記載する。

(参考資料)

グローバルCOEプログラム「生存基盤持続型の発展を目指す地域研究拠点」

平成19年度自己点検報告書（案）

書式：A4、上下左右マージン 30mm、

MS明朝 11ポイント、40字/行、40行/頁

原稿締め切り：4月末日（事務局宛提出、自己点検評価委員会が整理・チェック）

刷り上がり：70～80ページ（予定）

印刷部数：200部（配布先を確認のうえ、最終決定）

締め切り：4月末日

目次と分担、分担ページ

1. はじめに（杉原） 1p
 2. プログラムの目標（杉原） 2p
 3. 組織・運営体制の整備（河野） 4p
運営体制と教育研究プログラム図
委員会・部会組織と人員配置
平成19年度予算と配分状況
 4. 運営委員会の活動（事務局） 15p
概要
議事録
COE助教・PDの選考と採用
事務局体制の整備
 5. 人材育成センターの活動（小杉） 1p
大学院教育部会および若手養成・研究部会の組織運営
新専攻「グローバル地域研究」、持続型生存基盤コースの設置について
- 5-1 大学院教育部会（島田） 10p
TA・RAプログラム

- フィールドステーションの整備
- 臨地教育プログラム
- 5-2 若手養成・研究部会（清水） 5p
 - シンポジウム
 - 国際ワークショップ
- 6. 研究イニシャティブ 10p
 - パラダイム研究会（杉原）
 - 研究イニシャティブ1（杉原）
 - 研究イニシャティブ2（柳沢）
 - 研究イニシャティブ3（水野）
 - 研究イニシャティブ4（田辺）
- 7. 広報・成果出版部会（速見・林） 20p
 - ニューズレター
 - ホームページ
 - 研究成果
 - 研究発表
 - 講演
- 8. 拠点基盤整備部会（荒木） 5p
 - 史資料・図書
 - データベース
 - 情報基盤整備・施設整備：遠隔会議システム
- 9. 国際アドバイザリーボード部会（石川） 1p
- 10. 自己点検委員会（川井） 1p
- 11. おわりにー今後の展望ー（杉原／川井／河野） 1p

注)各項目の内容は提案で決まったものではありません。必要に応じて追加訂正ください。
また、ページは目安、参照程度に考えてください。

サンプル

1. はじめに（タイトル：ゴチック）

（1行空け）

今回は、農業発展径路に焦点をあてます。農耕の開始により人類は、人口支持力の増大、
さまざまな・・・

11. おわりに—今後の展望—

これまでの自己点検を総括し、評価と展望を加える。

アジア・アフリカの地域研究に携わる研究者と、先端技術の開発に関わる科学者との学問的対話を促進するために、「持続型生存基盤パラダイム」という新しい考え方を提案し、地球温暖化のアジア・アフリカの地域社会への影響といった緊急の課題に答える、ローカルな、あるいはリージョナルな持続的発展径路を追究することを目標として発足した本プログラムの初年度（実質的には9カ月間）の活動を点検し、若干の評価を加え、今後の課題について記す。

順調に進捗している点は、第一に、事業推進担当者のみならず、本プログラムに関わる学内9部局の多数のスタッフの協力により、研究分野横断型の人材育成・研究プログラムを順調に立ち上げることができたことである。地域研究を中核としながらも、最先端の科学技術研究から人文・社会科学までを包摂し統合していこうとする本プログラムにおいて、参加研究者の実効性のある協力体制を構築できるかどうか、最大のポイントであったが、それを杞憂とすることができた。東南アジアやアフリカで開催した4回を含む合計10回の国際シンポジウムや4つの研究イニシアティブによる多数の研究会や連携ワークショップを通じて、本事業に参加している教員、若手研究者、大学院生の間で、「持続型生存基盤パラダイム」形成という研究・人材育成の方向性が共有されつつあり、それが本事業の求心力となっている。この点に関しては、平成20年3月に開催した「プレ・アドバイザリーボード・ミーティング」において、「本プログラムのもつ文理融合的性格は世界的にもきわめて希有なものであり、これを成功させることが持つ学的意味は大きい」との評価をいただいた。

第二は、大学院アジア・アフリカ地域研究研究科（ASAFAS）における大学院教育において、持続型生存基盤研究講座を設置する方向での制度改革の努力が進められたことである。ASAFASと人材育成センターの緊密な連携のもとに、協力部局の全面的なサポートを得て、当初計画である「持続型生存基盤コース」の新設よりもさらに本格的な「持続型生存基盤研究講座」（仮称）設置に向けた制度改革が円滑に進行しつつある。

第三に、広報活動の充実を挙げることができる。とりわけ国内外に向けた成果発信の基礎をなすホームページは、本プログラムの開始直後である平成19年7月に仮ページを公開したのち、情報基盤などを整備し、平成19年11月には日本語ページ、平成20年1月には英語ページを本格的に公開した。その後も改良を重ねており、本プログラムのほぼすべての活動内容をリアルタイムで世界に向けて発信する体制を構築することができた。これに応じてアクセス回数が増加傾向にある。

第四に、本プログラムの根幹をなす人材養成の最大の前提作業として、二回の国際公募をかけ、延べ134名の応募者を中心メンバーが力をあわせて審査し、女性3名、外国人1名を含む、延べ10名の助教、研究員を雇用することができた。パラダイム形成にどう関わるかを応募者に書いてもらい、英語で面接し、文理融合についての意見を聞くなど、採用過程がわれわれ自身のコミュニケーションの場ともなって、その後

の協力体制の構築に役立った。

これらに対して、反省すべき点もある。当初予定していたリサーチ・アシスタント（RA）の選任ができなかった点である。初年度で、年度途中から事業を開始したため人選が困難であった。本事業の目標の一つが大学院生の教育研究環境の改善にあることを考えると、大学院生に対する経済的支援は必須であり、次年度以降は計画的に実施していかなければならない。

このように、共同研究によるパラダイム形成と人材育成のための制度改革を両輪とする本プログラムは順調なスタートを切った。次年度においては、個別研究をまとめたワーキングペーパーの刊行を本格化させるとともに、パラダイム形成においても最初の研究成果を出す予定である。予算に制約はあるものの、研究活動を具体的な成果の発信に結びつけていかなければならない。「プレ・アドバイザリーボード・ミーティング」においても、「パラダイム形成に向かって共同作業を開始するところまでは成功しているが、今後、個別研究とどのような接点をつけていくか、とくにイニシアティブのレベルでのパラダイム形成が重要である」とのアドバイスをいただいている。パラダイム形成研究のみならず、大学院教育や人材育成を含めて、文理融合型研究のさらなる実質化を図ることが平成 20 年度の課題である。

拠点リーダー	杉原 薫
自己点検評価委員会委員長	川井秀一
事務局長	河野泰之

1 著書	
荒木 茂	Araki, S., ed. 2007 <i>Indigenous Agriculture in Tanzania and Zambia in the Present Environmental and Socioeconomic Milieu, African Study Monographs, Supplementary Issue</i> , 34, 135pp.
籠谷直人	籠谷直人、脇村孝平（編）2008『アジアの帝国とネットワーク ―長期の19世紀の視点から』京都：世界思想社、350頁。
梶 茂樹	梶 茂樹 2007 <i>A Rutooro Vocabulary</i> 、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、579p.
片岡 樹	チャレ著・片岡樹編訳 2008 『ラフ族の昔話―ビルマ山地少数民族の神話・伝説―』、東京：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
片岡 樹	チャレ著・片岡樹編訳 2008 『ラフ族の昔話―ビルマ山地少数民族の神話・伝説―』、東京：雄山閣
河野泰之	Bouahom, B., Kono, Y. and Nonaka, K. eds. 2007. <i>Thammasat, Manut lae Saphapweadlon</i> (Nature, Humand and Environment), Vientiane: National Agriculture and Forestry Research Institute, 182 p.
河野泰之	秋道智彌（監修）、河野泰之（責任編集）2008『論集モンsoonアジアの生態史 第1巻 生業の生態史』、東京：弘文堂（印刷中）
小杉泰	小杉泰、川北稔、青野公彦、重松伸司、清水和裕、吉澤誠一郎、杉本淑彦、杉山清彦、桃木至朗（共著）2008年1月「新詳 世界史B」、東京：帝国書院、総294頁。
島田周平	島田周平 2007『現代アフリカ農村-変化を読む地域研究の試み-』古今書院 182頁。
玉田芳史	玉田芳史、船津鶴代（編）2008『タイ政治行政の変革1991-2006年』千葉：アジア経済研究所、368頁。
玉田芳史	Tamada Yoshifumi. 2008. <i>Myths and Realities: The Democratization of Thai Politics</i> . Kyoto: Kyoto University Press, 356p.

2 雑誌論文	
青山卓史	Kusano, H., Testerink, C., Vermeer, J.E.M., Tsuge, T., Shimada, H., Oka, A., Munnik, T., and Aoyama, T. 2008 The Arabidopsis phosphatidylinositol phosphatase 5-kinase PIP5K3 is a key regulator of root hair tip growth. <i>Plant Cell</i> 20: 367-380.
青山卓史	Li, L., Hou, X., Tsuge, T., Ding, M., Aoyama, T., Oka, A., Gu, H., Zhao, Y., and Qu, L.-J. 2008 The possible action mechanisms of indole-3-acetic acid methyl ester in Arabidopsis. <i>Plant Cell Rep.</i> 27: 575-584.
足立透	Frey, H. U., S. B. Mende, S. A. Cummer, J. Li, T. Adachi, H. Fukunishi, Y. Takahashi, A. B. Chen, R.-R. Hsu, H.-T. Su, and Y. S. Chang, Halos, generated by negative cloud-to-ground lightning, <i>Geophys. Res. Lett.</i> , 34, L18801, doi:10.1029/2007GL030908, 2007.
足立透	Enell, C.-F., E. Arnone, T. Adachi, O. Chanrion, P. T. Verronen, A. Seppala, T. Neubert, T. Ulich, E. Trunen, and R.-R. Hsu, Parameterisation of the chemical effect of sprites in the middle atmosphere, <i>Ann. Geophys.</i> , 26, 13-27, 2008.
荒木 茂	Araki, S. 2007 Ten Years of Population Change and the Chitemene Slash-and-Burn System around the Mpika Area, Northern Zambia, <i>African Study Monographs, Supplementary Issue</i> , 34: 75-89.
安藤和雄	Uchida, Haruo; and Ando, Kazuo. 2007. Reveiw Adaptive Agricultural System to Dynamic Water Condition in a Low-Lying Area of Bangladesh. <i>Japan Agricultural Research Quarterly</i> 41(1) : 25-30. Japan International Research Center for Agricultural Sciences
生方史数	生方史数 2007 「プランテーションと農家林業の狭間で：タイにおけるパルプ産業のジレンマ」 『アジア研究』 53 : 2 : 60-75
生方史数	生方史数 2007 「コモンスにおける集合行為の2つの解釈とその相互補完性」 『国際開発研究』 16:1:55-67.
生方史数	生方史数 2007 「共有林管理制度と保全活動：タイ・ヤソートン県K郡の事例」 『第18回国際開発学会全国大会報告論文集』 325-328.
梅澤俊明	Watanabe, T., Shitan, N., Umezawa, T., Yazaki, K., Shimada, M., Hattori, T. 2007 Involvement of FpTRP26, a thioredoxin-related protein, in oxalic acid-resistance of the brown-rot fungus <i>Fomitopsis palustris</i> , <i>FEBS Lett.</i> , 581: 1788-1792
梅澤俊明	Suzuki, S., Yamamura, M., Hattori, T., Nakatsubo, T., Umezawa, T. 2007 The subunit composition of hinokirsinol synthase controls geometrical selectivity in norlignan formation
梅澤俊明	Noguchi, A., Fukui, Y., Iuchi-Okada, A., Kakutani, S., Satake, H., Iwashita, T., Nakao, M., Umezawa, T., Ono, E. 2008 Sequential glucosylation of a furofuran lignan, (+)-sesaminol, by <i>Sesamum indicum</i> UGT71A9 and UGT94D1 glucosyltransferases, <i>Plant J.</i> , in press
梅澤俊明	Nakatsubo, T., Kitamura, Y., Sakakibara, N., Mizutani, M., Hattori, T., Sakurai, N., Shibata, D., Suzuki, S., Umezawa, T. 2008 At5g54160 gene encodes <i>Arabidopsis thaliana</i> 5-hydroxyconiferaldehyde O-methyltransferase, <i>J. Wood Sci.</i> , in press
梅澤俊明	Nakatsubo, T., Li, L., Hattori, T., Lu, S., Sakakibara, N., Chiang, V.L., Shimada, M., Suzuki, S., Umezawa, T. 2008 Roles of 5-Hydroxyconiferaldehyde and caffeoyl CoA O-methyl-transferases in monolignol biosynthesis in <i>Carthamus tinctorius</i> <i>Cellulose Chem. Technol.</i> , in press
梅澤俊明	Nakatsubo, T., Mizutani, M., Suzuki, S., Hattori, T., Umezawa, T. 2008 Characterization of <i>Arabidopsis thaliana</i> Pinoresinol Reductase, a new type of enzyme involved in lignan biosynthesis, <i>J. Biol. Chem.</i> , in press
太田 至	Ohta, I. 2007 "Marriage and bridewealth negotiations among the Turkana in northwestern Kenya." <i>African Study Monographs, Supplementary Issue</i> , No. 37: 3-26.
太田 至	Ohta, I. 2007 "English-Turkana texts of a case of bridewealth negotiations in northwestern Kenya." <i>African Study Monographs, Supplementary Issue</i> , No. 37: 29-152.
太田 至	Ohta, I. 2007 "Bridewealth negotiations among the Turkana in northwestern Kenya." (DVD documentary work) <i>African Study Monographs, Supplementary Issue</i> , No. 37: DVD Attachment.
大村善治	Tsubouch, K., Omura, Y., Long-term occurrence probabilities of intense geomagnetic storm events, <i>Space Weather</i> , 5, S12003, doi:10.1029/2007SW000329, 2007.
大村善治	Omura Y., Katoh, Y., Summers, D., Theory and simulation of the generation of whistler-mode chorus, <i>Journal of Geophysical Research</i> , in press.
大村善治	Furuya, N., Omura, Y., Summers, D., Relativistic turning acceleration of radiation belt electrons by whistler-mode chorus, <i>Journal of Geophysical Research</i> , in press.
岡本正明	岡本正明 2007 「自治体新設運動と青年のポリティクス-ゴロンタロ新州設立運動(1998年-2000年)に焦点を当てて」 『東南アジア研究』 45:4:140-164.
岡本正明	岡本正明 2008 「細分化する地域主義とその後のポリティクス-民主化・分権化後のインドネシアから」 『地域研究』第8巻第1号, 128-143
海田るみ	Hartati S., Sudarmonowati E., Park Y. W., Kaku T., Kaida R., Baba K., and Hayashi T. 2008 Overexpression of Poplar Cellulase Accelerates Growth and Disturbs the Closing Movements of Leaves in Sengon. <i>Plant Physiology</i> , DOI/10.1104/pp.108.116970
梶 茂樹	梶 茂樹 2007 「コンゴ・スワヒリについて、その1 : 英語からの借用とフランス語からの借用」 『スワヒリ&アフリカ研究』 18: 64-74.

加瀬澤雅人	加瀬澤雅人 2007 「グローバル状況下の民族医療における知識の新たな位置づけ—インド・ケーララ州の事例から」 『アジア・アフリカ地域研究』 7(1):65-9.
風戸真理	風戸真理 2008 「モンゴル国における土地私有化政策とローカルな実践—冬用キャンプ地の価値と権利をめぐる」 『エコソフィア』 20:81-96.
片岡 樹	片岡 樹 2007 「山地からみた中緬辺疆政治史—18-19世紀雲南西南部における山地民ラフの事例から—」 『アジア・アフリカ言語文化研究』 (東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所) 73号:73-99.
川井秀一	Walter T, Kartal S.N, Hang W.J, Umemura S, Kawai S: Strength, decay and termite resistance of oriented kenaf fiberboard, <i>J Wood Science</i> , 53(6), 481-486 (2007)
川井秀一	Munawar SS, Umemura K, Kawai S: Effects of alkali, mild steam, and chitosan treatments on the properties of pineapple, ramie, and sansevieria fiber bundles, <i>J Wood Science</i> , 54(1), 23-28 (2008)
神崎 護	Ayako Sasaki, Shinya Takeda, Mamoru Kanzaki, Seiichi Ohta, Pornchai Preechapanya 2007 Population dynamics and land-use changes in a Miang (Chewing Tea) village, Northern Thailand. <i>Tropics</i> 16(2):75-85.
神崎 護	Noguchi H, Itoh A, Mizuno T, Sri-ngernyuang K, Kanzaki M, Teejuntuk S, Sungpalee W, Hara M, Ohkubo T, Sahunalu P, Dhanmanonda P, Yamakura T. 2007. Habitat divergence in sympatric Fagaceae tree species of a tropical montane forest in northern Thailand. <i>Journal of Tropical Ecology</i> 23:549-55
神崎 護	Hla Maung Thein, M. Kanzaki, M. Fukushima, Yazar Minn 2007 Structure and composition of a teak-bearing forest under the Myanmar selection system: impacts of logging and bamboo flowering. <i>Southeast Asian Studies</i> 45(3):303-316.
神崎 護	Fukushima M., M. Kanzaki, Hla Maung Thein, Yazar Minn 2007 Recovery process of fallow vegetation in the traditional Karen swidden cultivation system in the Bago mountain range, Myanmar, <i>Southeast Asian Studies</i> 45(3):317-333.
小杉泰	小杉泰 2007年12月 「イスラーム世界における分離融合論：「宗教と科学」の関係をめぐる考察」、 『イスラーム世界研究』 第1巻2号、123項-147項.
小林祥子	Kobayashi S. and Sanga-Ngoie K. (2008a) “The integrated radiometric correction of optical remote sensing imageries”, <i>International Journal of Remote Sensing</i> (in Press).
小林祥子	Kobayashi S. and Sanga-Ngoie K. (2008b) “A Comparative study of radiometric correction methods for optical remote sensing imageries: the IRC vs other image-based C-correction methods”, <i>International Journal of Remote Sensing</i> (in Press)
小林祥子	Kobayashi S. and Sanga-Ngoie K. (2008c) “A new formulation of the integrated radiometric correction method for optical remote sensing imageries with consideration to the terrain irradiance”, <i>Applied Remote Sensing</i> (submitted).
篠原真毅	Matsumoto, H., H. Ishida, S. Nakamoto, H. Takeno, Y. Yasaka, S. Kawai, T. Mitani, N. Shinohara, and H. Namiki 2007 Fundamental Study on Localized Heating in Hyperthermia Ushing Phase Control of Long-wavelength Microwave”, <i>IEEE Trans. EIS.</i> , 127:11:1833-1838
篠原真毅	三谷友彦, 篠原真毅, 松本紘, 松嶋孝明 2007 パルス駆動型位相制御マグネトロンの開発”, 電子情報通信学会論文誌C、JJ90-C:12:873-881
篠原真毅	Shinohara, N., B. Shishkov, H. Matsumoto, K. Hashimoto, and A.K.M. Baki 2008 New Stochastic Algorithm for Optimization of Both Side Lobes and Grating Lobes in Large Antenna Arrays for MPT, <i>IEICE Trans. Communications</i> , E91-B:1:286-296
篠原真毅	Baki, A. K. M., K. Hashimoto, N. Shinohara, T. Mitani, and H. Matsumoto 2008 Isosceles-Trapezoidal-Distribution Edge Tapered Array Antenna with Unequal Element Spacing for Solar Power Satellite, <i>IEICE Trans. Communications</i> , E91-B:2:527-535
柴山 守	Go Yonezawa, Mamoru Shibayama, Daisuke Yoshida and Venkatesh Raghavan 2007: Spatiotemporal Mapping for Urban Transfiguration in Hanoi City, Vietnam, <i>International Journal of Geoinformatics, Special Issue, Vol.3, No.4, pp.27-34</i>
杉原 薫	Sugihara, K. 2007 The Second Noel Butlin Lecture: Labour-Intensive Industrialization in Global History. <i>Australian Economic History Review</i> , 47:2:121-54.
杉原 薫	杉原 薫 2007 「東アジアの経済発展と労働・生活の質—歴史的展望—」 社会政策学会編『経済発展と社会政策 東アジアにおける差異と共通性』 (社会政策学会誌18号)、法律文化社、3-18頁
鈴木玲治	鈴木玲治、竹田晋也、フラマウンティン2007 「焼畑土地利用の履歴と休閑地の植生回復状況の解析 —ミャンマー・バゴー山地におけるカレン焼畑の事例—」 『東南アジア研究』 45:3: 343-358.
鈴木玲治	竹田晋也、鈴木玲治、フラマウンティン2007 「ミャンマー・バゴー山地におけるカレン焼畑土地利用の地図化」 『東南アジア研究』 45:3: 334-342.
鈴木玲治	Suzuki, R., Takeda, S. and Hla Maung Thein 2007 Chronosequence changes in soil properties of teak (<i>Tectona grandis</i>) plantations in the Bago Mountains, Myanmar. <i>Journal of Tropical Forest Science</i> 19:4: 207-217.
鈴木玲治	Funakawa, S., Suzuki, R., Kanaya, S., Karbozoba-Salnikov, E., and Kosaki, T. 2007 Distribution patterns of soluble salts and gypsum in soils under large-scale irrigation agriculture in Central Asia. <i>Soil Science and Plant Nutrition</i> 53:2: 150-161.
竹田晋也	竹田晋也、鈴木玲治、フラマウンティン2007 「ミャンマー・バゴー山地におけるカレン焼畑土地利用の地図化」 『東南アジア研究』 45(3):334-342.
竹田晋也	鈴木玲治、竹田晋也、フラマウンティン2007 「焼畑土地利用の履歴と休閑地の植生回復状況の解析 —ミャンマー・バゴー山地におけるカレン焼畑の事例—」 『東南アジア研究』 45(3):343-358.

竹田晋也	松林公蔵、赤松功博、和田泰三、石根昌幸、坂上悌二、奥宮清人、竹田晋也、安藤和雄、U Soe Mynt, Saw Khin Gyi, Daw Ni Ni Khin, Sr. Mary Andrew 2007 「福祉ホーム入居高齢者の日常生活機能、うつとQOL -ミャンマーの宗教系ホームと日本の養護老人ホームにおける比較検討-」 『東南アジア研究』 45(3):480-494.
竹田晋也	竹田晋也 2008 「バーム油が塗り替える熱帯雨林の景観」 『遺伝』 62(2):68-71. Suphawat Laohachaiboon and Shinya Takeda. 2007 Teak logging in a trans-boundary watershed: A historical case study of the Ing River basin in Northern Thailand. <i>The Journal of The Siam Society</i> 95, 123-141.
竹田晋也	R. Suzuki, S.Takeda & Hla Maung Thein. 2007 Chronosequence Changes in Soil Properties of Teak (<i>Tecton grandis</i>) Plantations in the Bago Mountains, Myanmar. <i>Journal of Tropical Forest Science</i> 19(4):207-217.
田辺明生	加瀬澤雅人、田辺明生 2008 「民族医療の知的潜在力——持続型生存基盤パラダイムのための一考察」 『イスラーム世界研究』 1(2):300-313
田辺明生	Tanabe, Akio 2007 "Toward Vernacular Democracy: Moral Society and Post-postcolonial Transformation in Rural Orissa, India" <i>American Ethnologist</i> 34(3): 558-574.
角田邦夫	Kubota, S., Shono, Y., Matsunaga, T., and Tsunoda, K. 2007 Response of the Subterranean termite <i>Coptotermes formosanus</i> (Isoptera: Rhinotermitidae) to Soil Treated with Microencapsulated Fenobucarb. <i>Pest Management Science</i> , 63: 1224-1229.
東長靖	東長靖 2007 「イブン・ムバーラク『禁欲の書』解題・翻訳ならびに訳注」 (スーフイズム・アンソロジー・シリーズ 1) 『イスラーム世界研究』 1:2367-371.
馬場哲一	Hartati, S., Sudarmonowati, E., Park, Y. W., Kaku, T., Kaida, R., Baba, K., Hayashi, T. 2008 Overexpression of poplar cellulase accelerates growth and disturbs the closing movements of leaves in sengon. <i>Plant Physiol.</i> Online preview: http://www.plantphysiol.org/cgi/rapidpdf/pp.108.116970v1
林 泰一	Prasad, V.S. and T. Hayashi 2007 <i>Large-scale summer monsoon rainfall over India and its relation to 850 hPa wind shear</i> . <i>Hydrological Processes</i> , 21, 1992-1996, 2007.
林 泰一	Murata, F., Hayashi, T., Matsumoto, J. and Asada, H. 2007 <i>Rainfall on the Meghalaya plateau in northeastern India - one of the rainiest places in the world</i> . <i>Nat. Hazards</i> , 42:391-399, 2007.
林 泰一	Terao, T., M. N. Islam, F. Murata and T. Hayashi 2008 High temporal and spatial resolution observations of meso-scale features of pre- and mature summer monsoon cloud systems over Bangladesh. <i>Natural Hazards</i> , 44, doi:10.1007/s11069-007-9128-z.
林 泰一	Murata, F., T. Terao, T. Hayashi, H. Asada and J. Matsumoto 2008 <i>Relationship between atmospheric conditions at Dhaka, Bangladesh and rainfall at Cherrapunjee, India</i> . <i>Natural Hazards</i> , 44, doi:10.1007/s11069-007-9125-2.
林 泰一	林 泰一、村田文絵、橋爪真弘、Islam, Md. N. 2008 2007年11月にバングラデシュを襲ったサイクロン「Sidr」の被害調査報告(速報)、自然災害科学、26-4、391-396
林 隆久	A Alonso-Simon, P Garcia-Angulo, AE Encina, JM Alvarez, JL Acebes and T Hayashi 2007 Increase in XET activity in bean (<i>Phaseolus vulgaris</i> L.) cells habituated to dichlobenil, <i>Planta</i> , 226: 765-771.
林 隆久	N Nishikubo, T Awano, A Banasiak, V Bourquin, F Ibatullin, R Funada, H Brumer, TT Teeri, T Hayashi, B Sundberg and EJ Mellerowicz 2007 Xyloglucan Endo-transglycosylase (XET) Functions in Gelatinous Layers of Tension Wood Fibers in Poplar—A Glimpse into the Mechanism of the Balancing Act of Trees, <i>Plant Cell Physiol</i> , 48: 843-855.
林 隆久	BR Urbanowicz, AB Bennett, E del Campillo, C Catalá, T Hayashi, B Henrissat, H Höfte, SJ McQueen-Mason, SE Patterson, O Shoseyov, TT Teeri, and JKC Rose 2007 Structural organization and a standardized nomenclature for plant endo-1,4-β-D-glucanases (cellulases) of glycosyl hydrolase family 9. <i>Plant Physiology</i> , 144: 1693-1696.
林 隆久	T Hayashi, YW Park, A Isogai and T Nomura 2008 Cross-linking of plant cell walls with dehydrated fructose by smoke-heat treatment. <i>Journal of Wood Science</i> , 54: 90-93.
速水洋子	速水洋子 2008 「家と家をつなぐ—バゴ—山地カレン焼畑村から」 『東南アジア研究』 46:3:359-381.
速水洋子	竹田晋也、速水洋子 2008 「〈特集〉ミャンマー少数民族地域における生態資源利用と社会変容 序文」 『東南アジア研究』 46:3:297-302.
藤田幸一	藤田幸一、岡通太郎、アショククンドゥ、 2008 「インド・シッキム州一農村における農村経済」 『アジア経済』 49:3:30-54.
藤田素子	Fujita, M., Koike, F. 2007 Birds transport nutrients to fragmented forests in an urban landscape. <i>Ecological Applications</i> , 17: 648-654.
松林公蔵	Ishine, M., Okumiya K, Matsubayashi K, 2007: A close association between hearing impairment and activities of daily living, depression, and quality of life in community-dwelling older people in Japan. <i>J Am Geriatr Soc</i> 55:316-317.
松林公蔵	Roriz-Cruz M, Rosset I, Wada T, Sakagami T, Ishine M, Roriz-Filho JS, Cruz TR, Rodrigues RP, Resmini I, Sudoh S, Wakatsuki Y, Nakagawa M, Souza AC, Kita T, Matsubayashi K, 2007: Stroke-independent association between metabolic syndrome and functional dependence, depression, and low quality of life in elderly community-dwelling Brazilian people. <i>J Am Geriatr Soc</i> 55:374-382.
松林公蔵	Fujisawa M, Ishine M, Okumiya K, Otsuka K, Matsubayashi K, 2007: Trends in diabetes. <i>Lancet</i> 369:1257-1257.

松林公蔵	Okumiya K, Ishine M, Wada T, Pongvongsa T, Boupaha B, Matsubayashi K, 2007: The close association between low economic status and glucose intolerance in elderly subjects in a rural area in Laos. <i>J Am Geriatr Soc</i> 55:2101-2102.
松林公蔵	Fujisawa M, Ishine M, Okumiya K, Nishinaga M, Doi Y, Ozawa T, Matsubayashi K, 2007: Effects of long-term exercise class on prevention of falls in community-dwelling elderly: Kahoku longitudinal aging study. <i>Gerontol Geriatr Intern</i> 7:357-362.
松林公蔵	Okumiya K, Fujisawa M, Ishine M, Wada T, Sakamoto R, Hirata Y, Del Saz EG, Griapon Y, Togodly A, Sanggenafa N, Rantetampang AL, Kokubo Y, Kuzuhara S, Matsubayashi K, 2007: Fieldwork survey of neurodegenerative diseases in West New-Guinea in 2001-02 and 2006-07. <i>Rinsho Shinkeigaku</i>
松林公蔵	Ishine M, Okumiya K, Hirosaki M, Sakamoto R, Fujisawa M, Hotta N, Otsuka K, Nishinaga M, Doi Y, Matsubayashi K. 2008: Prevalence of hypertension and its awareness, treatment, and satisfactory control through treatment in elderly Japanese. <i>J Am Geriatr Soc.</i> 56(2):374-5.
松林公蔵	Okumiya K, Ishine M, Wada T, Fujisawa M, Otsuka K, Matsubayashi K, 2008: Lifestyle changes after oral glucose tolerance test improve glucose intolerance in community-dwelling elderly people after 1 year. <i>J Am Geriatr Soc.</i> 56(4):767-769.
松林公蔵	松林公蔵、赤松功博、和田泰三、石根晶幸、坂上悌二、奥宮清人、竹田晋也、安藤和雄、U Soe Mynt, Saw Khin Gyi, Daw Ni Ni Khin, Sr Mary Andrew, 2008 : 福祉老人ホーム入居高齢者の日常生活機能、うつとQOL-ミャンマーの宗教系ホームと日本の養護老人ホームにおける比較検討-、東南アジア研究 45 (3)、480-494,
松林公蔵	松林公蔵 2008: 高知県香北町研究-老年医学的総合機能評価、日老医誌 45 :166-168、2008.
水野一晴	水野一晴 2008 「伝統的取引・イスラーム都市ザンジバルと植民地体制下に建設された都市ナイロビ」 『都市地理学』3: 33-40.
柳澤雅之	柳澤雅之 2007 「(生態関連特集1) まえがき」 『ベトナムの社会と文化』7 :161-163.
山本 衛	Patra, A. K., T. Yokoyama, M. Yamamoto, T. Nakamura, T. Tsuda, and S. Fukao, Lower E region field-aligned irregularities studied using the Equatorial Atmosphere Radar and meteor radar in Indonesia, <i>J. Geophys. Res.</i> , 112 (A1), Art. No. A01301, 2007.
山本 衛	Liu, J. Y., C. C. Hsiao, C. H. Liu, M. Yamamoto, S. Fukao S, H. Y. Lue, F. S. Kuo, Vertical group and phase velocities of ionospheric waves derived from the MU radar, <i>Radio Sci.</i> , 42 (4), Art. No. RS4014, 2007.
山本 衛	Otsuka, Y., F. Onoma, K. Shiokawa, T. Ogawa, M. Yamamoto, and S. Fukao, Simultaneous observations of nighttime medium-scale traveling ionospheric disturbances and E region field-aligned irregularities at midlatitude, <i>J. Geophys. Res.</i> , 112 (A6), Art. No. A06317, 2007.
山本 衛	Luce, H., G. Hassenpflug, M. Yamamoto, and S. Fukao, Comparisons of refractive index gradient and stability profiles measured by balloons and the MU radar at a high vertical resolution in the lower stratosphere, <i>Ann. Gephys.</i> 25 (1), 47-57, 2007.
山本 衛	Luce, H., G. Hassenpflug, M. Yamamoto, M. Crochet, and S. Fukao, Range-imaging observations of cumulus convection and Kelvin-Helmholtz instabilities with the MU radar, <i>Radio Sci.</i> , 42 (1), Art. No. RS1005, 2007.
山本 衛	Shiokawa, K., G. Lu, Y. Otsuka, T. Ogawa, M. Yamamoto, N. Nishitani, and N. Sato, Ground observation and AMIE-TIEGCM modeling of a storm-time traveling ionospheric disturbance, <i>J. Geophys. Res.</i> , 112 (A5), Art. No. A05308, 2007.
山本 衛	Saito, S., M. Yamamoto, H. Hashiguchi, A. Maegawa, and A. Saito, Observational evidence of coupling between quasi-periodic echoes and medium scale traveling ionospheric disturbances, <i>Ann. Geophys.</i> , 25, 2185-2194, 2007
山本 衛	Yokoyama, T., Y. Otsuka, T. Ogawa, M. Yamamoto, and D. L. Hysell, First three-dimensional simulation of the Perkins instability in the nighttime midlatitude ionosphere, <i>Geophys. Res. Lett.</i> , 35, Art No. L03101, doi:10.1029/2007GL032496, 2008.
山本 衛	A. K. Patra, T. Yokoyama, Y. Otsuka, and M. Yamamoto, Daytime 150-km echoes observed with the Equatorial Atmosphere Radar in Indonesia: First results, <i>Gephys. Res. Lett.</i> , 35, Art No. L06101, doi:10.1029/2007GL033130, 2008.
山本 衛	Hassenpflug, G., M. Yamamoto, H. Luce, and S. Fukao, Description and demonstration of the new Middle and Upper atmosphere Radar imaging system: 1-D, 2-D, and 3-D imaging of troposphere and stratosphere, <i>Radio Sci.</i> , 43, RS2013, doi:10.1029/2006RS003603, 2008.
山本 衛	Saito, S., M. Yamamoto, and H. Hashiguchi, Imaging observations of nighttime mid-latitude F-region field-aligned irregularities by the MU radar ultra-multi channel system, <i>Ann. Geophys.</i> , in press, 2008.
米澤 剛	米澤 剛、柴山 守 2007 「GISを用いたベトナム・ハノイの都市形成」 『日本情報処理学会 人文科学とコンピュータシンポジウム論文集』 2007:15:139-146.
米澤 剛	Yonezawa, G., Shibayama, M., Yoshida, D., Raghavan, V. 2007 Spatiotemporal Mapping for Urban Transfiguration in Hanoi City, Vietnam. <i>International Journal of Geoinformatics</i> , 3:4:27-34.
和田泰三	Wada, T., Ishine, M., Ishimoto, Y., Hirosaki, M., Kimura, Y., Kasahara, Y., Okumiya, K., Nishinaga, M., Otsuka, K., Matsubayashi, K. 2008 Community-dwelling elderly fallers in Japan are older, more disabled, and more depressed than nonfallers. <i>Journal of the American Geriatrics</i>
和田泰三	Okumiya, K., Ishine, M., Wada, T., Fujisawa, M., Otsuka, K., Matsubayashi, K. 2008 Lifestyle changes after OGTT improve glucose intolerance in community dwelling elderly people after one year. <i>Journal of the American Geriatrics Society</i> , in press.
和田泰三	Okumiya, K., Ishine, M., Wada, T., Pongvongsa, T., Boupaha, B., Matsubayashi, K. 2007 The close association between low economic status and glucose intolerance in the elderly in a rural area in Laos. <i>Journal of the American Geriatrics Society</i> , 55:12: 2101-2102.

3 論文	
青山卓史	Aoyama, T. 2008 Phospholipid signaling in root hair development. In Emons, A.M.C. and Ketelaar, T. (eds.) <i>Root Hairs, Excellent Tools for the Study of Plant Molecular Cell Biology</i> . Tokyo: Springer-Verlag, in press.
岡本正明	岡本正明、「『インドネシア化された海』、そしてその脱構築の可能性について」、『東アジア『海』の信頼醸成』NIRA報告書、2007年、105-122頁
籠谷直人	籠谷直人 2007 「帝国経済の対立と宥和—日英印の三国関係」、石田憲編『膨張する帝国、拡張する帝国』東京：東京大学出版会、55-79頁。
籠谷直人	籠谷直人2008「帝国のガバナンスと華僑華人ネットワーク」、遠藤乾編『グローバル・ガバナンスの最前線—現在と過去のあいだ』（日本学術振興会・人文社会科学振興のための企画事業）東京：東信堂、120-148頁。
神崎 護	神崎 護 2007 森林の多様性と動態を読み解く、太田誠一編 森林の再発見、京都：京都大学出版会、259-284頁。
河野泰之	河野泰之、落合雪野、横山智 2008 「ラオスをとらえる視点」、横山智・落合雪野編 『ラオス農山村地域研究』、東京：めこん、13-44頁。
河野泰之	河野泰之、藤田幸一 2008 「商品作物の導入と農山村の変容」、横山智・落合雪野編 『ラオス農山村地域研究』、東京：めこん、395-429頁。
河野泰之	河野泰之 2008 「動かない森、変転する森—ラオスの森林の100年誌—」、秋道智彌・市川昌広編『東南アジアの森で何が起きているか』、京都：人文書院（印刷中）
河野泰之	広田勲、中西麻美、縄田栄治、河野泰之 2008 「東南アジア大陸部における焼畑と村落の変容」、秋道智彌（監修）；C. ダニエルス（責任編集）『論集モンスーンアジアの生態史 第2巻 地域の生態史』、東京：弘文堂（印刷中）
河野泰之	富田晋介、河野泰之、小手川隆志、ベムリ・ムタヤ・チョーダリー 2008 「東南アジア大陸部の民族移住と土地開拓」、秋道智彌（監修）；C. ダニエルス（責任編集）『論集モンスーンアジアの生態史 第2巻 地域の生態史』、東京：弘文堂（印刷中）
柴山 守	柴山 守 2007「持続可能な発展とGIS」、佐和隆光編著『入門サステナビリティ学—循環経済と調和社会に向けて—』ダイヤモンド社、pp. 119-136
島上宗子	島上宗子 「『いりあい交流』がつなぐ日本とインドネシア——山村の知恵と経験に学ぶ」加藤剛編『国境を越えた村おこし——日本と東南アジアをつなぐ』NTT出版、2007年9月、31-61頁
島田周平	島田周平 2007 「脆弱性の視点からアフリカ援助を考える」『学会会報』 2007-V(866号)、21-26頁。
島田周平	島田周平 2008 「生態システムと社会システムの非対称的関係性とレジリエンス研究」（梅津千恵子編 『社会・生態システムの脆弱性とレジリエンス』 総合地球環境学研究所 平成19年度PR研究プロジェクト報告 205-211頁。
島田周平	島田周平 2008 「ナイジェリアの政治を地域問題からみる—新しい地域紛争の理解のために—」（池谷和信、武内進一、佐藤廉也共編 『朝倉世界地理講座12：アフリカII』 朝倉書店 885頁）761-769頁。
島田周平	島田周平 2007 「中・南アフリカ」（河上税、田村俊和編著 『日本から見た世界の諸地域—新版世界地誌概説—』 原書房 204頁。） 76-96頁。
島田周平	島田周平 2007 「アフリカですすむ市場の自由化と民主化の影響」 漆原和子他篇『図説世界の地域問題』 ナカニシヤ出版 36-37頁。
島田周平	島田周平 2007 「アフリカにおけるHIV/エイズ拡大の社会的影響」 漆原和子他篇『図説世界の地域問題』 ナカニシヤ出版 38-39頁。
清水 展	清水展 2007 「辺境から中心を撃つ礫：アフガニスタン難民の生存を支援する中村医師とペシャワール会の実践、松本常彦・大島明秀編『<九州>という思想—九州スタディーの試み—』、福岡：花書院、111-166頁。
清水 展	清水展 2007 「グローバル化時代に田舎が進める地域おこし—北部ルソン山村と丹波山南町をつなぐ草の根交流、植林、開発の取り組み—」加藤剛編『国境を越えた村おこし：日本と東南アジアをつなぐ』、東京：NTT出版、165-198頁。
清水 展	清水展 2007 「文化を資源化する意味付与の実践：フィリピン先住民イフガオの村における植林運動と自己表象」、山下晋司編『資源化する文化』、東京：弘文堂、123-150頁。
杉原 薫	杉原 薫 2007 「J. S. ミル 『自由論』」、日本経済新聞社編『経済学 名著と現代』、日本経済新聞出版社、139-153頁。
高田 明	高田 明 2007 「言葉の向こう側：セントラル・カラハリ・サンにおけるナビゲーション実践」、河合香史（編）『生きる場の人類学：土地と自然の認識・実践・表象過程』、京都：京都大学学術出版会、141-183頁。
竹田晋也	竹田晋也 2008 「メコン跨境流域の森林産物—ラーオの森のラックとチーク—」秋道智彌・市川昌広編『東南アジアの森に何が起きているか—熱帯雨林とモンスーン林からの報告』、京都：人文書院、67-89頁。
竹田晋也	竹田晋也 2008 「非木材林産物と焼畑—「安定化」をめざして」横山智・落合雪野編『ラオス農山村地域研究』、東京：めこん、267-299頁。

田中耕司	田中耕司 2007 「作物で緑化－森林地帯に侵入する農民の土地利用戦略」田中耕司（編）『インドネシア地方分権下の自然資源管理と社会経済変容：スラウェシ地域研究に向けて』（H16～18年度科学研究費補助金（基盤研究(A)）研究成果報告書）、51-68頁.
田中耕司	Sharma, G.; L. Liang; and Tanaka, Koji, 2007 On-farm agrobiodiversity management in Sikkim Himalaya, India. In Saxena, K.G.; L. Liang; and Kanok Rerkasem (eds.) <i>Shifting Agriculture in Asia: Implications for Environmental Conservation and Sustainable Livelihood</i> . Dehra Dun: Bishen Singh Mahendra Pal Singh, pp. 321-334.
田中耕司	Tanaka, Koji; S. Yokoyama; and K. Phalakhone, Land allocation programme and stabilization of swidden agriculture in the northern mountain region of Laos. In K.G.; L. Liang; and Kanok Rerkasem (eds.) <i>Shifting Agriculture in Asia: Implications for Environmental Conservation and Sustainable Livelihood</i> . Dehra Dun: Bishen Singh Mahendra Pal Singh, pp. 407-420.
田中耕司	田中耕司 2008 「タマサートな実践、タマサートな開発」横山智・落合雪野編『ラオス農山村地域研究』東京：めこん、191-199頁.
田辺明生	Tanabe, Akio 2007 “Understanding Ethical Basis of Local Democracy: Towards Post-Postcolonial Transformation in Rural Orissa, India” In <i>Northern South Asia: Political and Social Transformations</i> (eds) H. Ishii, D. Gellner & K. Nawa. New Delhi: Manohar, pp.131-165.
東長 靖	東長靖 2008 「イスラームの聖者論と聖者信仰－イスラーム学の伝統のなかで」、赤堀雅幸編『民衆のイスラーム－スーフィー・聖者・精霊の世界』、東京：山川出版社、13-39頁.
西 真如	西真如 2008 「病と共存する社会をのぞむ：エチオピアのHIV/AIDS予防運動」武田 丈、亀井伸孝編 『アクション別フィールドワーク入門』世界思想社、204-217頁.
蓮田隆志	桃木至朗、山内晋次、藤田加代子、蓮田隆志 2008 「総説：海域アジア史のポテンシャル」、桃木至朗編『海域アジア史研究入門』、東京：岩波書店、1-12頁.
蓮田隆志	蓮田隆志、2008 「東南アジアの「プロト国民国家」形成」桃木至朗編『海域アジア史研究入門』、東京：岩波書店、141-148頁.
藤倉達郎	Sharma, Sudhindra, Annette Skovsted Hansen, Tatsuro Fujikura and Juhani Koponen. Nepal and Its Donors - Partners in Learning To Cope. In Alf Morten Jerve, Yasutami Shimomura and Annette Skovsted Hansen (eds.), <i>Aid Relationship in Asia: Exploring Ownership in Japanese and Nordic Aid</i> . New York: Palgrave. 2008, pp133-150.
藤田幸一	藤田幸一 2008 「ミャンマーの「貧困」問題－食料政策との関連を中心に－」、工藤年博編『ミャンマー経済の実像－なぜ軍政は生き残れたのか』、千葉：アジア経済研究所、117-145頁.
藤田幸一	河野泰之、藤田幸一 2008 「商品作物の導入と農山村の変容」、横山智・落合雪野編『ラオス農山村地域研究』、東京：めこん、395-429頁.
藤田幸一	Fujita, Koichi 2008. Rural Economy in Myanmar at the Crossroads:With Special Reference to Rice Policies, In Abe S. and Bhanupong N. (eds.), <i>East Asian Economies and New Regionalism</i> . Kyoto: KyotoUniversity Press, pp.160-192.
増原善之	増原善之 2008 「人魚伝説とゴールド・ラッシュ」、横山智・落合雪野編 『ラオス農山村地域研究』、東京：めこん、121-130頁.
水野一晴	水野一晴 2008 「中南部アフリカの自然特性」、池谷和信、武内進一、佐藤廉也編『朝倉世界地理講座－大地と人間の物語－12. アフリカII』、東京：朝倉書店、1-12頁. (印刷中).
水野一晴	水野一晴 2008 「伝統的交易・イスラーム都市ザンジバルと植民地体制下に建設された都市ナイロビ」、阿部和俊編『都市の景観地理』、東京：古今書院. (印刷中)
水野一晴	水野一晴 2007 「氷河と共に山を登るケニアの植物」、日本自然保護協会編『自然の見方が変わる本』、東京：山と溪谷社、64-66頁.
水野一晴	水野一晴 2007 「アフリカの高山における氷河の後退と植生の遷移」、漆原和子、藤塚吉浩、大西宏治、松山 洋編『図説 世界の地域問題』、京都：ナカニシヤ出版、46-47頁.
水野一晴	水野一晴 2007 「アフリカの自然と水」、『白川義員作品集 世界百名瀑』、東京：小学館、156-159頁.
水野一晴	水野一晴 2007 「サハラ以南のアフリカ－多様な自然・社会とその歴史的変遷に着目した地誌－」、矢ヶ崎典隆、加賀美雅弘、古田悦造編『地誌学概論』、東京：朝倉書店、143-152頁.
水野一晴	水野一晴 2007 「自然特性と大地域区分」、池谷和信、佐藤廉也、武内進一編『朝倉世界地理講座－大地と人間の物語－ 11. アフリカI』、東京：朝倉書店、3-15頁.
水野一晴	水野一晴 2007 「氷河とお花畑の動態」、池谷和信、佐藤廉也、武内進一編：『朝倉世界地理講座－大地と人間の物語－ 11. アフリカI』、東京：朝倉書店、14頁.
山越 言	Yamamoto, S, G. Yamakoshi, T. Humle & T. Matsuzawa. in press. Invention and modification of a new tool use behavior: Ant-fishing in trees by a wild chimpanzee (<i>Pan troglodytes verus</i>) at Bossou, Guinea. <i>American Journal of Primatology</i> .
山本博之	山本博之 2008 「橋としてのジャウィ、壁としてのジャウィ：東南アジア・ムスリムの社会と言語」佐藤次高・岡田恵美子編著『イスラーム世界のことばと文化』、東京：成文堂、201-220頁.
山本博之	山本博之 2008 「プラナカン性とリージョナリズム：マレーシア・サバ州の事例から」『地域研究』、第8巻第1号、49-66頁.

4 その他査読なし論文	
足立透	足立透、大矢浩代、土屋史紀、高橋幸弘、VLF帯電波観測網による東南アジア域の雷・電離圏活動モニタリング、第21回大気圏シンポジウム原稿集、宇宙科学研究所、2007.
生方史数	Ubukata, Fumikazu 2007 Let's Get Villagers Involved in: The Strategic Shift of Raw Material Procurement and Its Consequences in the Thai Pulp Industry. In <i>Proceedings for the Core University Program Seminar, Private Faces of Power and Institutions in Southeast Asia</i> , Vol.1, pp.159-174.
梅澤俊明	Suzuki, S., Umezawa, T. 2007 Recent advances of tree biotechnology in <i>Acacia mangium</i> (Fabaceae) (in Japanese), <i>Seizonken Kenkyu</i> , 3: 41-42
梅澤俊明	Umezawa, T., Suzuki, S. 2007 Chemical components of <i>Acacia mangium</i> and <i>Acacia auriculiformis</i> (in Japanese), <i>Seizonken Kenkyu</i> , 3: 43-47
梅澤俊明	Umezawa, T., Wada, S., Yamamura, M., Sakakibara, N., Nakatubo, T., Suzuki, S., Hattori, T., Koda, M. 2007 Protocols for lignin analysis for Forest Biomass Analytical System of RISH, Kyoto University (in Japanese), <i>Seizonken Kenkyu</i> , 3: 73-75 (2007)
岡本正明	岡本正明、「東南アジアにおけるイスラーム主義、その多様性：テロ、紛争、そして選挙政治」、『さまざまなイスラームーアジア・アフリカ研究の現場から』、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所主催・国立大学附置研究所・センター長会議・第3部会(人文・社会科学) 第4回シンポジウム、21-30頁
帯谷知可	帯谷知可 2008 科研報告書 『地域研究資料としての「トルキスタン集成」の総合的書誌研究』(研究代表者 帯谷知可 基盤研究 (C) 課題番号17510215)、194頁.
加瀬澤雅人	加瀬澤雅人、田辺明生 2008 「民族医療の知的潜在力ー持続型生存基盤パラダイムのための一考察」 『イスラーム世界研究』1(2).
風戸真理	風戸真理 2008 「モンゴル牧畜社会における銀製品」 『生態人類学会ニューズレター』13: 5-9 (http://www.soc.nii.ac.jp/ecoanth/index.html)
風戸真理	風戸真理 2008 「ポスト社会主義国で撮る」 『地域研究統合情報センター・ニューズレター』2: 14.
風戸真理	風戸真理 2008 「ウランバートルの金銀鍛冶師」 『北方ユーラシア人類学研究会報』1(1): 3 (http://1st.geocities.yahoo.co.jp/gl/neurasianthropos)
片岡 樹	片岡樹 2007 「ラフの移住ー暮らしのなかの近現代政治史ー」 『自然と文化そしてことば』、(葫蘆舎) 3号: 85-95.
片岡 樹	片岡樹 2007 「アジア周縁社会における移住と国家権力ー華南・東南アジアにおけるラフの事例からー」 『ユーラシアと日本ー境界の形成と認識ー』シンポジウム「ユーラシアと日本: 境界の形成と認識ー移動という視点ー」報告書、41-50頁.
川井秀一	Sasa S Munawar, Umemura K, Tanaka F, Kawai S: The properties of alkali and mild steam treated ramie and sansevieria fiber bundles, 第58回日本木材学会大会要旨集、I10-0945, p.47, 2007年8月9日(広島)
川井秀一	R Widyorini, S Kawai, B Subiyanto, EB Hardiyanto, A Firmanti (PT MHP, Indonesia) R Gunawan, T Suryanti, A Wicaksono: Evaluation of the Tree Growth and Biomass Production of Plantation Forest in Tropical Area~A Case Study of Acacia Plantation Forest in South Sumatra, Indonesia~, 第59回日本木材学会大会要旨集、Q18-1030, p.86, 2008年3月18日(筑波)
川井秀一	Sasa Sofyan M, Kenji Umemura, Shuichi Kawai: Properties of oriented board using mild steam-treated plant fiber bundles, 第59回日本木材学会大会要旨集、I18-1145, p.46, 2008年3月18日(筑波)
川井秀一	Widyorini R. Evaluation of biomass production of plantation forest in tropical area. A case study of Acacia plantation forest, PT Musi Hutan Persada, Indonesia. Proceedings of the 94th RISH symposium, Kyoto University, Kyoto, Japan, pp. 99-107, March 10, 2008.
川井秀一	Widyorini, R., Kawai, S., Subiyanto, B., Hardiyanto, E.B., Firmanti, A., Gunawan, R., Suryanti, T., Wicaksono, A. Evaluation of tree growth and biomass production of Acacia plantation forest in tropical area. Proceedings of the 92th RISH Symposium: Towards Establishment of Sustainable Humansphere, Cibinong, Indonesia, pp. 37-38, February 23, 2008.
川井秀一	Widyorini, R., Kawai, S., Subiyanto, B., Firmanti, A., Hardiyanto, E.B. Evaluation of biomass production of plantation forest in tropical area. A case study of Acacia plantation forest, PT Musi Hutan Persada, Indonesia. Proceedings of the 82th RISH Symposium, Kyoto University, Kyoto, Japan, pp. 57-58, December 6-7, 2007.
川井秀一	Widyorini, R., Kawai, S., Subiyanto, B., Hardiyanto, E.B., Firmanti, A., Gunawan, R., Suryanti, T., Wicaksono, A. Evaluation of tree growth and biomass production of Acacia plantation forest in tropical area. Proceedings of the 92th RISH Symposium: Towards Establishment of Sustainable Humansphere, Cibinong, Indonesia, pp. 37-38, February 23, 2008.
川井秀一	Widyorini, R., Kawai, S., Subiyanto, B., Firmanti, A., Hardiyanto, E.B. Evaluation of biomass production of plantation forest in tropical area. A case study of Acacia plantation forest, PT Musi Hutan Persada, Indonesia. Proceedings of the 82th RISH Symposium, Kyoto University, Kyoto, Japan, pp. 57-58, December 6-7, 2007.

神崎 護	神崎 護 2007 「チーク択伐林の持続性の生態的な評価」 科研報告書 『ミャンマー少数民族地域における生態利用と 世帯戦略：広域比較に向けて』（研究代表者 速水洋子 課題番号16402003）、5-24頁.
北村由美	Kitamura, Yumi 2007 Museum as Representation of Ethnicity: The Construction of Chinese Indonesian Ethnic Identity in post-Suharto Indonesia. <i>Kyoto Review of Southeast Asia Issue</i> 8/9. http://kyotoreviewsea.org/Issue_8-9/Welcome.html
小林 知	Kobayashi, Satoru 2008 Reconfiguration of Ethnic Representation in Post-War Society: Who are the Chen in Post-Socialist Rural Cambodia? <i>In Proceedings for the International Conference “Mainland Southeast Asia at Its Margins: Minority Groups and Borders”</i> Center for Khmer Studies: Siem reap, Cambodia.
小林祥子	Sanga-Ngoie K. and Kobayashi S. (2007a) “The image-based correction method of atmospheric and topographic effects in optical remote sensing imageries”, <i>Proceedings of the 43th Fall Conference of the Remote Sensing Society of Japan</i> , 44-45.
小林祥子	Sanga-Ngoie K. and Kobayashi S. (2007b) “Human ecology, land use and biomass burning in DRC, Central Africa, using GIS and remote sensing”, <i>Poster Presentation</i> , 2007 American Geographic Union Annual Conference, Acapulco, Mexico.
小林祥子	Sanga-Ngoie K. and Kobayashi S. (2008) “Assessment of the Integrated Radiometric Correction (IRC) method by comparison with prior image-based methods for optical remote sensing data”, <i>Proceedings of the 44th Spring Conference of the Remote Sensing Society of Japan</i> , (accepted).
佐藤孝宏	佐藤孝宏、ムニアンディ・ジェガデーサン、河野泰之2008 「インド・グンダール川上流域における農業水利と作付変容」 熱帯農業研究 Vol.1, Extra issue1. 83-84頁.
佐藤靖明	Sato, Yasuaki 2007 Livelihood and Creativity: A Cultural Implication of Indigenous Banana Cultivation in Buganda, In <i>the Proceedings of International Joint Symposium “Re-Contextualizing Self/Other Issues: Toward a HUMANICS in Africa”</i> , JSPS, Makerere University and Center for African Area Studies, Kyoto
篠原真毅	Shinohara, N., K. Nagano, T. Ishii, S. Kawasaki, T. Fujiwara, S. Nakayama, Y. Takahashi, S. Sasaki, K. Tanaka, Y. Hisada, Y. Fujino, S. Mihara, T. Anzai, and Y. Kobayashi, “Experiment of Microwave Power Transmission to the Moving Rover”, <i>International Symposium on Antennas and Propagation (ISAP2007)</i> , Niigata, 2007.8.21-24, Proceedings CD-ROM 3B1-1.pdf
篠原真毅	Mitani, T., N. Shinohara, K. Hashimoto, and H. Matsumoto, “Research and Development of Low-Noise Magnetrons for Microwave Power Transmission and Solar Power Station/Satellite”, <i>International Symposium on Radio System and Space Plasma, Blugaria</i> , 2007.9-2-4, Proceedings CD-ROM
篠原真毅	杉浦弘幸, 植松弘行, 佐藤裕之, 苗村康次, 三原荘一郎, 小林裕太郎, 斉藤孝, 篠原真毅, “大規模レクテナアレイからの電磁再放射特性”, 電子情報通信学会第18回宇宙太陽発電研究会, 2007.7.4, 信学技報SPS2007-04 (2007-07) pp.1-6
篠原真毅	川崎繁男, 清田春信, 川井重明, 篠原真毅, 橋本弘蔵, 三原荘一郎, 森雅裕, “無線送電・情報通信用高出力アクティブ集積アレーアンテナの薄型・軽量化の検討”, 電子情報通信学会第18回宇宙太陽発電研究会, 2007.7.4, 信学技報SPS2007-07 (2007-07) pp.23-30
篠原真毅	藤原暉雄, 高橋吉郎, 長野賢司, 古川 実, 石井忠司, 川崎繁男, 篠原真毅, 佐々木進, 田中孝治, 久田安正, 藤野義之, 三原荘一郎, 安西徳夫, 小林裕太郎, “作業ロボット用マイクロ波受電システムの試作”, 2007.8.2-3, 第10回宇宙太陽発電システム(SPS)シンポジウム, 講演集in print
篠原真毅	川崎繁男, 清田春信, 川井重明, 山本剛司, 中島勝利, 篠原真毅, 橋本弘蔵, 三原荘一郎, 小林裕太郎, 藤田辰人, 森雅裕, “宇宙エネルギー送電・情報通信同時伝送システムのマイクロ波工学的検討”, 2007.8.2-3, 第10回宇宙太陽発電システム(SPS)シンポジウム, 講演集in print
篠原真毅	山川宏, 橋本弘蔵, 川崎繁男, 篠原真毅, 三谷友彦, 平野敬寛, 米倉秀明, 藤原暉雄, 長野賢司, “マイクロ波無線伝送技術の飛行実証実験の試み”, 第10回宇宙太陽発電システム(SPS)シンポジウム, 2007.8.2-3, 講演集in print
篠原真毅	橋本弘蔵, 篠原真毅, “宇宙太陽発電に関する研究活動について”, 電子情報通信学会EMCJ研究会, 2007.9.21, 信学技報vol. 107, no. 226, EMCJ2007-51, pp. 49-52
篠原真毅	山本剛司, 清田春信, 川崎繁男, 山下清隆, 石崎俊雄, 田村昌也, 年吉洋, 篠原真毅, 三谷友彦, “LTCC基板を用いたアクティブ集積フェーズドアレイアンテナ用移相器の試作”, 電子情報通信学会マイクロ波研究会, 2007.12.18, 信学技報vol. 107, no. 394, MW2007-129, pp.13-18
篠原真毅	川井重明, 川崎繁男, 清田春信, 篠原真毅, 三谷友彦, “アクティブフェーズドアレイアンテナ用小型高出力増幅器の試作”, 電子情報通信学会マイクロ波研究会, 2008.1.12 信学技報vol. 107, no. 421, MW2007-153, pp.87-92
篠原真毅	篠原 真毅, 三谷友彦, 兒島淳一郎, 橋谷真紀, “大電力マイクロ波無線電力伝送用レクテナの開発”, 第27回宇宙エネルギーシンポジウム, 2008.3.7, プロシーディング集in print
篠原真毅	兒島淳一郎, 篠原真毅, 三谷友彦, 橋本隆志, 岸則政, 外村博史, 岡崎昭仁, “マイクロ波を用いた電気自動車無線充電システムの高効率化”, 電子情報通信学会第20回宇宙太陽発電研究会, 第7回宇宙太陽発電と無線電力伝送に関する研究会, 2008.3.11, 信学技報SPS2007-16 (2008-03) pp.1-4
篠原真毅	竹野裕正, 松本博, 中本聡, 八坂保能, 川井重明, 三谷友彦, 篠原真毅, 並木宏徳, “長波長マイクロ波を用いた低侵襲ハイパーサーミアの基礎研究II”, 電子情報通信学会第20回宇宙太陽発電研究会, 第7回宇宙太陽発電と無線電力伝送に関する研究会, 2008.3.11, 信学技報SPS2007-20 (2008-03) pp.21-26
篠原真毅	米倉秀明, 藤原暉雄, 長野賢司, 三谷友彦, 平野敬寛, 篠原真毅, 橋本弘蔵, 山川宏, 上田英樹, 安藤真, “飛行船実験用ラジアルラインスロットアンテナに関する無線LANとの干渉実験・高出力性能確認実験”, 電子情報通信学会第20回宇宙太陽発電研究会, 第7回宇宙太陽発電と無線電力伝送に関する研究会, 2008.3.17, 信学技報SPS2007-23
篠原真毅	鈴木宏明, 三谷友彦, 篠原真毅, 親泊政二三, 渡辺隆司, 都宮孝彦, “木質バイオマス前処理用マイクロ波照射容器の開発研究”, 電子情報通信学会第20回宇宙太陽発電研究会, 第7回宇宙太陽発電と無線電力伝送に関する研究会, 2008.3.17, 信学技報SPS2007-24 (2008-03) pp.7-10
篠原真毅	辻正哲, 篠原真毅, 三谷友彦, 並木宏徳, 竹野裕正, 小泉裕樹, 椎橋頭一, 宮田浩充, “マイクロ波を利用したフレッシュコンクリートの単位水量および硬化コンクリート中の鉄筋位置推定方法”, 電子情報通信学会第20回宇宙太陽発電研究会, 第7回宇宙太陽発電と無線電力伝送に関する研究会, 2008.3.17, 信学技報SPS2007-25 (2008-03)

柴山 守	Ho Dinh Duan, Mamoru Shibayama 2008: Studies on Hanoi Urban Transition in 20th Century Based on GIS/RS, Kyoto Working Papers on Area Studies, No.3, 20 pages
柴山 守	原正一郎、柴山 守 2007: 地域情報学の構築と時空間情報解析ツール、情報処学会人文科学とコンピュータシンポジウム論文集Vol.2007, NO.15, pp.71-78
柴山 守	石川正敏、原正一郎、柴山 守 2007: 人文科学のための現地調査支援システムの試作、情報処学会人文科学とコンピュータシンポジウム論文集Vol.2007, NO.15, pp.87-94
柴山 守	米澤 剛、柴山 守 2007: GISを用いたベトナム・ハノイの都市形成、情報処学会人文科学とコンピュータシンポジウム論文集Vol.2007, NO.15, pp.139-146
島上宗子	Kokki, Goto (Edited, Annotated, and with an Introduction by Motoko Shimagami), “ ‘Iriai Forests Have Sustained the Livelihood and Autonomy of Villagers’ : Experience of Commons in Ishimushiro Hamlet in Northeastern Japan” , <i>Working Paper Series</i> No.30, Afrasin Centre for Peace and Development Studies, Ryukoku
清水展	清水展 2007 「被災のなかの苦難と希望: 1991年ピナトゥボ山代噴火と先住民アエタ・コミュニティの新生」、浦野正樹・大矢根淳・吉川忠寛編『復興コミュニティ論入門・シリーズ災害と社会②』、東京: 弘文堂179-184頁.
清水展	清水展 2008 「火山灰に消された歴史」、東京大学東洋文化研究所編『アジア学の明日にむけて』、東京: 東京大学東洋文化研究所188-193頁.
鈴木玲治	鈴木玲治、竹田晋也、フラマウンテイン2007 「休閒地の植生回復に与える焼畑土地利用履歴の影響 -ミャンマー・バゴ山におけるカレン焼畑の事例-」 『熱帯農業』51:別2: 31-32.
鈴木玲治	竹田晋也、鈴木玲治、フラマウンテイン2007 「ミャンマー・バゴ山におけるカレン焼畑土地利用の5年間の動態」 『熱帯農業』51:別2: 29-30.
鈴木玲治	Rosy Ne Win, Reiji Suzuki and Shinya Takeda 2007 ” Logging impacts on land cover changes in the Kabaung reserved forest, the Bago Mountains, Myanmar.” <i>Japanese Journal of Tropical Agriculture</i> 51:Ex.2:33-34.
高田 明	Takada, Akira 2007 Changing locality and ethnic cohesion among the San in Ohangwena, Namibia. In Y. Fujioka, & M. Iida (Eds.), <i>ASAFAS Special Paper, No.9, Globalisation and locality in Southern Africa: Views from local communities</i> . Kyoto: Graduate School of Asian and African Area Studies, Kyoto University,
竹田晋也	竹田晋也 2007 「雨緑林の焼畑」 『自然と文化そしてことば』3:33-40
竹田晋也	竹田晋也、鈴木玲治、フラマウンテイン2007 「ミャンマー・バゴ山におけるカレン焼畑土地利用の5年間の動態」 『熱帯農業』51 (別号2) : 29-30
竹田晋也	鈴木玲治、竹田晋也、フラマウンテイン2007 「焼畑土地履歴と休閒期の植生回復状況の解析 -ミャンマー・バゴ山におけるカレン焼畑の事例-」 『熱帯農業』51 (別号2) : 31-32
竹田晋也	Rosy Ne Win, R.Suzuki and S. Takeda 2007 Logging impacts on Land Cover Changes in the Kabaung Reserved Forest, The Bago Mountains, Myanmar. <i>Japanese Journal of Tropical Agriculture</i> 51(Extra issue 2):33-34
田中耕司	田中耕司 2007 「タイ文化圏山地民の農耕-焼畑景観史を軸に」 『自然と文化そしてことば』No.3: 29-32頁.
田中耕司	田中耕司 2007 「アジアの稲作の起源と伝播」 『ビオストーリー』Vol.8: 42-47頁.
田中耕司	田中耕司 2007 「熱帯林と人そして社会-地域研究の立場から」 (独) 森林総合研究所国際連携推進拠点 (編) 『知の共有を目指して: 森の恵みと人とのかかわりを探る』8-10頁.
角田邦夫	Tsunoda, K., and Yoshimura, T. 2008 History of Termite Management by Soil Treatment with Chemicals - Why Were Uses of Chlordane Banned? <i>Proc. of the 5th Conf. of the Pacific Rim Termite Research Group</i> , 1-5.
東 長靖	Tonaga, Yasushi 2007, Preface to Special Issue: Birth and Succession of Holiness among Sufis and Saints, <i>Orient: Reports of the Society for Near Eastern Studies in Japan</i> , vol. 42, pp. 1-3.
東 長靖	Tonaga, Yasushi 2007 Preface to Special Issue: The Tariqa’ s Cohesional Power and the Shaykhhood Succession Question, <i>Asian and African Area Studies</i> , vol. 7-1, pp. 1-3.
林 隆久	林 隆久 産業利用をめざした遺伝子組換えポプラの野外試験がはじまる、科学技術動向月報(2007).
林 隆久	林 隆久 民族の問題、サステナ、2、46-47 (2007).
林 隆久	林 隆久 遺伝子組換えポプラ、サステナ、3、42-43 (2007).

林 隆久	林 隆久 セルラーゼ、サステナ、4、36-37 (2007).
林 隆久	林 隆久 自由研究、サステナ、5、34-35 (2007).
林 隆久	林 隆久 知の融合のかたち、サステナ、6、40-41 (2007).
速水洋子	Hayami, Yoko 2008 Changing “Families” in Southeast Asia: Loose Framework, Questions and Topics. In <i>Proceedings for the Core University Program Seminar Private Faces of Power and Institutions in Southeast Asia</i> , Vol.2, pp.1-13.
速水洋子	Hayami, Yoko 2008 “Family” and Cultural Reproduction in Mobility and Transience: Three Cases of Karen across the Border. In <i>Proceedings for the Core University Program Seminar Private Faces of Power and Institutions in Southeast Asia</i> , Vol.2, pp.22-29
畑 俊充	畑 俊充、Joko Sulistyو 2007 熱帯バイオマスの炭素材料としての利用、生存圏研究、京都大学生存圏研究所紀要 No.3 59-63頁.
藤田幸一	Fujita, Koichi 2008. Worlds Apart: Peasants in Japan and Agricultural Laborers in Bangladesh. In <i>Proceedings for the Core University program Seminar on Private Faces of Power and Institutions in Southeast Asia</i> , Vol.2, pp.351-365. (no referee)
細田尚美	Hosoda, Naomi 2007 The Social Process of Internal Migration in the Philippines: A Case of Visayan Migrants in Manila. <i>Working Paper for the Afrasian Centre for Peace and Development Studies</i> , No.26, Ryukoku University, 35p.
細田尚美	Hosoda, Naomi 2008 Towards a Cultural Interpretation of Migration in the Philippines: Focusing on Value-Rationality and Capitalism. Working Paper for the Afrasian Centre for Peace and Development Studies, No.35, Ryukoku University, 23p.
水野一晴	水野一晴 2007 「地球温暖化の高山生態系への影響」 『自然保護』、499: 40-42.
水野一晴	水野一晴 2007 「ひとつの国に多様な自然・民族・言語・文化が共存しているアフリカ」、『月刊地理』、52-10: 58-65.
山本博之	Yamamoto Hiroyuki, 2007 Restructuring the Federalism of Bangsas: Development of National/Ethnic Concepts in Sabah, Malaysia, <i>Proceedings of the Symposium on Bangsa and Umma</i> , Institute of Asian Cultures, Sophia University, 167-177p.
山本博之	山本博之 2007 「津波後のアチェに見る外部社会と被災社会の交わりの形」 林勲男編 『2004年インド洋地震津波災害被災地の現状と復興への課題』、(国立民族学博物館調査報告73号) 国立民族学博物館、71-82頁.
山本博之	Kawashima Midori, Arai Kazuhiro & Yamamoto Hiroyuki. 2007. <i>Proceedings of the Symposium on Bangsa and Umma</i> . Institute of Asian Cultures, Sophia University.
山本博之	Omar Farouk & Yamamoto Hiroyuki. 2008.3. <i>Islam at the Margins: Muslims in Indochina</i> . Center for Integrated Area Studies, Kyoto University.
吉村 剛	吉村 剛、服部武文、竹松葉子 2007 「熱帯大規模一斉植林における生物多様性の確保」、生存圏研究、No.3、35-38頁.

5 学位論文	
川井秀一	Sasa Sofyan Munawar ; PROPERTIES OF NON-WOOD PLANT FIBER BUNDLES AND THE DEVELOPMENT OF THEIR COMPOSITES, 京都大学農学研究科提出、課程博士学位論文、2008年3月
佐々木綾子	Sasaki, Ayako 2008 Socio-economic Studies on Transformation of Traditional Tea Cultivation in Northern Thailand. Dr. Agr. Thesis, Kyoto University
中村香子	中村香子 2008 「ケニア・サンプル社会における年齢体系の変容動態に関する研究—青年期にみられる集団性とその個人化に注目して—」京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科提出。博士学位論文。
藤田素子	藤田素子 2007 「都市から山地に至るランドスケープにおける鳥類排泄物による栄養塩の運搬」横浜国立大学環境情報学府提出。博士学位論文。
和田泰三	Wada, Taizo 2007 Orthostatic hypotension in older people and its association with mortality. MSc.Thesis, University of London.

6 総説 書評	
荒木 茂	荒木 茂 (新刊紹介)「久馬一剛著『土とは何だろうか?』」、『アフリカ研究』71、179-180. 2007.
安藤和雄	安藤和雄 2007 「インドネシアとカンボジアの古代遺跡の犁の浮彫に関する調査ノート」『熱帯農業』51 (Extra issue1):93-94.
安藤和雄	安藤和雄 「ネパール・カトマンズ盆地周辺における作付体系と農具調査ノート」『第17回日本熱帯生態学会年次大会講演要旨集』、2007年6月:104.
安藤和雄	安藤和雄 2007 「生業の近代化 I T革命と農村」『季刊民族学』120:16-17.
安藤和雄	安藤和雄 2007 「写真でみる社会科—アパタニ族の水田耕作—」『中学社会科のしおり』、(2007年9月号) 帝国書院:0ページ.
生方史数	生方史数 (書評)「井上真編『躍動するフィールドワーク:研究と実践をつなぐ』」、『林業経済』2007年60:4:28-31.
梅澤俊明	Umezawa, T., Suzuki, S., Shibata, D. 2008 Tree biotechnology of tropical <i>Acacia</i> , Plant Biotechnology, in press
梅澤俊明	Umezawa, T., Suzuki, S. 2008 Metabolic engineering of lignin biosynthesis (in Japanese), Bioindustry, in press
川井秀一	川井秀一 バイオマス資源を活用した環境適合型材料の創成, WEB Journal, No89, 34-36 (2007)
杉原 薫	杉原 薫 (書評)「鳩澤歩『ドイツ工業化における鉄道業』」、『日本経済新聞』2007年11月3日。(『日本経済研究センター会報』962号、2007年12月1日、68-69頁に再録)。
田辺明生	Tanabe, Akio (book review) 2007 Uwe Skoda, <i>The Aghria: A Peasant Caste on a Tribal Frontier. Manohar, 2005. and Yaaminey Mubayi, Altar of Power: The Temple and the State in the Land of Jagannatha. Manohar, 2005. Indian Economic and Social Historical Review 44(4): 517-521.</i>
谷 誠	Tani, M., Yamamoto, S., Leclerc, M., and Leuning R.2008 Foreword for AsiaFlux special issue of <i>Agricultural and Forest Meteorology</i> , doi: 10.1016/j.agrformet.2008.01.002.
藤倉達郎	Fujikura, Tatsuro (book review) Sadamatsu Eiichi, <i>Samajik abhiyan ya bikas sahayata: gaisasako bhumikamathi prasna</i> (Social Movement or Development Aid? Questioning the Role of NGOs). In <i>Studies in Nepali History and Society</i> 2007 12:1:193-203.
藤田幸一	藤田幸一 2007 「途上国の農村研究とフィールドワーク」『経済セミナー』629号、28-31.
松林公蔵	松林公蔵 2007: 後期高齢者の地域健康管理の課題、2 国際的観点から—特にアジアの点描—Gerontology New Horizon 19:31-35.
松林公蔵	松林公蔵 2007: 「フィールド医学」からみた「学誌」レビュー。ヒマラヤ学誌 8:3-20.
松林公蔵	松林公蔵 2007: アジア各地の高齢者たち—フィールド医学の可能性—。エコソフィア 19:52-60,
松林公蔵	松林公蔵 2007: 老化のない生き物、エコソフィア 19:59-60.
松林公蔵	松林公蔵 2007: アジアにおける高齢化と生活習慣病—フィールド医学的視点から。自律神経44:264-267.
松林公蔵	松林公蔵 2008: 老いの人類誌と生きがい—フィールド医学の現場から。生きがい研究、14:4-24.
山本博之	山本博之 2008 「「地域の文化」を求める人々」『地域研究』、第8巻第1号、40-48頁.

7 講演発表	
青山卓史	Aoyama, T. Phospholipid signaling in root hair morphogenesis, RIKEN Plant Science Center Seminars, Yokohama RIKEN 27th November 2007.
足立 透	足立透、雷・スプライトによる対流圏・電離圏間の結合、中間圏・熱圏・電離圏研究会、NICT、2007年11月13日
足立 透	足立透、大矢浩代、土屋史紀、高橋幸弘、VLF帯電波観測網による東南アジア域の雷・電離圏活動モニタリング、第21回大気圏シンポジウム、宇宙科学研究所、2007年2月27日
足立 透	足立透、研究紹介：スプライトと気象、全国SSH (Super Science High school) コンソーシアム高知第2回研究会、高知工科大学、2008年3月7日
荒木 茂	荒木 茂 「カメルーン東南部のサバンナー森林境界領域における耕地化の現状(予察)」、第43回日本アフリカ学会学術大会、大阪大学、2007年5月26日
梅澤俊明	梅澤俊明、鈴木史朗 木質バイオマス改良技術、日本農芸化学会2008年度大会シンポジウム 未来型バイオリファイナリーの新展開、名城大学、2008年3月29日。
梅澤俊明	中坪朋文、水谷正治、鈴木史朗、服部武文、梅澤俊明 <i>Arabidopsis thaliana</i> のリグナン生合成酵素遺伝子の機能解析、第58回日本木材学会大会、つくば国際会議場、2008年3月17~19日
梅澤俊明	梅澤俊明 イネリグニン生合成の代謝工学、バイオマス研究会 - 草本系バイオマスの収集・保管・前処理を中心にして -、日本自転車会館、平成20年3月12日。
梅澤俊明	Umezawa, Toshiaki Tropical tree biotechnology, The 92nd RISH Symposium, Cibinong, Indonesia, February 23, 2008.
梅澤俊明	鈴木史朗、梅澤俊明 熱帯アカシアのバイオテクノロジー、第90回生存圏シンポジウム 未来を拓く樹木バイオテクノロジー、理化学研究所横浜研究所、2008年2月18日。
梅澤俊明	梅澤俊明 熱帯アカシアのバイオテクノロジー、生存基盤科学研究ユニットシンポジウム「環境・植物 リフォレストーションの基盤科学」、京都大学生存基盤科学研究ユニット、2008年1月25日。
梅澤俊明	梅澤俊明、服部武文 森林バイオマス評価分析システム共同利用 第81回生存圏シンポジウム全国・国際共同利用合同シンポジウム、京都大学生存圏研究所、2007年12月6日。
梅澤俊明	Umezawa, Toshiaki Tree biotechnology of tropical Acacia, The first Kyoto University - LIPI Southeast Asian Forum: Sustainable Humanosphere in Indonesia, LIPI, Jakarta, November 26-27, 2007
梅澤俊明	Umezawa, Toshiaki; Suzuki, Shiro; Shibata, Daisuke Tree biotechnology of tropical Acacia, JSPS- Sweden (SU)/Japan (NAIST) Colloquium on Frontiers of Plant Biotechnology, Stockholm University, Stockholm, Sweden, October 4, 2007.
梅澤俊明	中坪朋文、鈴木史朗、服部武文、梅澤俊明 ベニバナ種子からクローニングした新規O-メチル基転移酵素の機能について、第25回日本植物細胞分子生物学会、千葉大学工学部、千葉、2007年8月7-9日。
梅澤俊明	Suzuki, Shiro; Yamamura, Masaomi; Hattori, Takefumi; Nakatsubo, Tomoyuki; Umezawa, Toshiaki Subunit composition of hinokiresinol synthase controls geometrical selectivity in hinokiresinol formation, Phytochemical Society of North America 2007 Annual Meeting, Donald Danforth Plant Science
梅澤俊明	梅澤俊明 エネルギー作物開発におけるリグニン代謝工学の方向性「地球温暖化軽減に貢献する組換え樹木の開発」勉強会、森林総合研究所、つくば、2007年7月17日。
岡本正明	岡本正明、「実業家による経営手法に基づく地方ガバナンスーインドネシア・ゴロンタロ州知事ファデル・ムハマドによるコーンのポリティクス」、比較政治学会全国大会分科会E「グローバル化とローカル・ガバナンス」、同志社大学、2007年6月24日
海田るみ	Kaida R., Satoh Y., Bulone V., Kaku T., Hayashi T., and Kaneko T. Enhancement of Cellulose Synthesis by Overexpression of Purple Acid Phosphatase in Tobacco Cells, 2nd International Cellulose Conference, Tower Hall Funabori, 22th October 2007.
海田るみ	海田るみ、加来友美、澤田真千子、親泊政二三、渡辺隆司、馬場啓一、林隆久、Sri Hartati, Enny Sudarmonowati 「熱帯樹木の糖化性」、第58回日本木材学会大会、つくば国際会議場、2008年3月18日
海田るみ	加来友美、海田るみ、澤田真千子、親泊政二三、渡辺隆司、馬場啓一、林隆久 「さまざまな糖鎖分解酵素を発現する組換えポプラの糖化性」、第58回日本木材学会大会、つくば国際会議場、2008年3月18日
籠谷直人	籠谷直人「華僑華人ネットワークの制度と機能」、公開シンポジウム「華僑・華人ネットワークの新世代」、日本学術振興会「人文社会科学の振興のためのプロジェクト」、委託研究「帝国とネットワーク」主催、神戸中華会館、2007年9月8日。

籠谷直人	籠谷直人「華僑ネットワークと神戸」 日本学術振興会「人文社会科学の振興のためのプロジェクト」、委託研究「帝国とネットワーク」、ひょうご国際プラザ交流ホール、(財)兵庫県国際交流協会との共催)、2007年11月17日.
籠谷直人	Kagotani, Naoto The penetration of Free Trade System in 19th century's East Asia, Workshop on Networks and Global Governance in the Past and at the Present Japanese Scholars' Perspectives, Chinese University of Hong Kong, 3rd March 2008.
梶 茂樹	梶 茂樹 2007 パネルディスカッション「こころとことば-地球時代の日本語のゆくえ-」、京都文化会議主催、京都大学百周年時計台記念館1F百周年記念ホール、2007年12月8日.
加瀬澤雅人	加瀬澤雅人 「グローバル状況下の民族医療における知識の新たな位置付け：インド・ケーララ州の事例から」、第20回南アジア学会、大阪市立大学、2007年10月7日.
風戸真理	風戸真理「ウランバートルの金銀鍛冶師」(民族誌映像、25分)(映像発表)「第1回北方ユーラシア研究会」、湯河原市、2008年2月3日
川井秀一	Kawai S: Sustainable Production and Utilization of Acacia, Science for Sustainable Humanosphere 2007 (Bandung, Indonesia) 2007.07.25
川井秀一	Kawai, S: Seeking Sustainable Society Through Science and Technology, Indonesia Grobal COE Program (Jakarta) 2007.11.26
川井秀一	Kawai, S: Humanosphere Science -An overview-, The Humanosphere Science School 2008 (Chibinong) 2008.02.24
川井秀一	Kawai, S., Widyorini, R. Sustainable forest management and regional environment in South-East Asia. The 1st International Workshop: In Search of Sustainable Humanosphere in Asia and Africa, Kyoto, Japan, March 12-14, 2008.
川井秀一	川井秀一：木を活かし、森林を育てる－未来を託す循環型社会の構築－、南丹森林資源利活用協議会(亀岡) 2008.02.01
川井秀一	川井秀一：国産材利用の現状と課題－持続的・循環的利用のための展望－、日本プロジェクト産業協議会(JAPIC)講演会2008.03.04
北村由美	Kitamura, Yumi Current Movement of Confucianism in Indonesia. International Convention on Asian Scholars, Kuala Lumpur, Malaysia, 24th July 2007.
北村由美	北村 由美 「インドネシアにおける孔子教(儒教)の動向」、日本華僑華人学会大会、慶応大学、2007年11月18日.
小杉泰	小杉泰 「現代イスラーム社会-暮らしと発想法-」、春秋講義(京都大学)、2007年10月31日
小杉泰	小杉泰 「激動するイスラーム世界と国際社会」、木曜講座(西宮東高校)、2007年11月1日
小杉泰	小杉泰 「イスラーム復興とグローバル化する国際社会」、グローバルイノベーション研究会(聖学院大学 総合研究所)、2007年12月3日
佐々木綾子	Sasaki, Ayako Changes in the 'Miang-Tea Agroforest System' following the Socio-economic Changes in Northern Thailand. Joint Reporting Seminar on "Ecology and Utilization of Forest Vegetation in Northern Thailand", International Education and Training Center, Maejo University, Thailand,
佐藤孝宏	佐藤孝宏、ムニアンディ・ジェガデーサン、河野泰之「インド・グンダール川上流域における農業水利と作付変容」 日本熱帯農業学会第103回講演会、2008年3月30日
佐藤孝宏	Sato, Yasuaki Livelihood and Creativity: A Cultural Implication of Indigenous Banana Cultivation in Buganda, International Joint Symposium "Re-Contextualizing Self/other Issues: Toward a HUMANICS in Africa", JSPS, Makerere University and Center for African Area Studies, Kyoto University, Kampala, Uganda. 2-3 October 2007.
佐藤孝宏	Sato, Yasuaki Anthropological Approach to in situ Conservation of Landrace Diversity of Bananas, The Banana Research Network for Eastern and Southern Africa (BARNESA) Steering Committee Meeting and Training, Dar es Salaam, Tanzania, 20-24 August. 2007.
佐藤孝宏	Sato, Yasuaki Anthropological Approach to Landrace Diversity of Bananas. Special Seminar "Interface of Anthropology and Biodiversity", Bioversity International, Kampala, Uganda, 2 August 2007.
篠原真毅	(Invited) Kimura, T., K. Anma, Y. Fuse, N. Shinohara, and K. Hashimoto, "Study on High Efficient Microwave Power Transmission Unit for Space Solar Power System", International Symposium on Radio System and Space Plasma, Blugaria, 2007.9-2-4, Proceedings CD-ROM

篠原真毅	(Invited) Mikami, I., T. Mizuno, A. Yamamoto, H. Ikematsu, H. Satoh, K. Namura, N. Shinohara, K. Hashimoto, and H. Matsumoto, "Study on SPS with Satellites in Formation Flight and High Sensitivity Rectenna", International Symposium on Radio System and Space Plasma, Blugaria, 2007.9-2-4, Proceedings CD-ROM
篠原真毅	(Invited) Shinohara, N., T. Mitani, and H. Matsumoto, "Development of High Power Rectenna for Ground Applications of Microwave Power Transmission", International Symposium on Radio System and Space Plasma, Blugaria, 2007.9-2-4, Proceedings CD-ROM
篠原真毅	(招待) 篠原真毅, "宇宙太陽光発電所SPSと無線電力送電技術の現状と将来展望", パワーエレクトロニクス学会, 2007.12.22
篠原真毅	(Invited) Shinohara, N., "Roadmap of Microwave Power Transmission from Ground to Space", The 4th International Symposium on Innovative Aerial/Space Flyer Systems, Tokyo, 2008.1.14-15, Proceedings pp.47-52
篠原真毅	(招待) 篠原真毅, "電磁波エネルギー利用の現状とロードマップ", 日本機械学会マイクロナノ工学専門会議マイクロエネルギー研究会第一回会合, 2008.3.6
篠原真毅	(招待) 篠原真毅, "ユビキタス電源の現状と期待", 第7回ケータイ国際フォーラム, 2008.3.12
篠原真毅	(依頼) 篠原真毅, "ユビキタス電源の将来展望", 電子情報通信学会総合大会, 2008.3.18-21, BS-12-5
篠原真毅	Sonobe, T., T. Mitani, N. Shinohara, K. Hachiya, and S. Yoshikawa, "Study on the microwave processing of oxide ceramics", 5th Eco-Energy and Materials Science and Engineering Symposium, Thailand, 2007.11-21-24
篠原真毅	Sonobe, T., H. Suzuki, T. Mitani, N. Shinohara, and K. Hashimoto, "Novel Thermal Conversion Process for Bio-energy by Microwave Heating at Research Institute for Sustainable Humanosphere (RISH), Kyoto University", 1st Kyoto University - LIPI Southeast Asian Forum in Indonesia, Indonesia, 2007.11.26-27
篠原真毅	Shinohara, N., "Roadmap of Microwave Power Transmission from Ground to Space", The 92nd RISH Symposium Towards Establishment of Sustainable Humanosphere, Indonesia, 2008.2.23, Proceedings pp.5-7
篠原真毅	宮川哲也, 篠原真毅, 三谷友彦, 松本紘, 丹羽直幹, 高木賢二, 浜本研一, "建物内無線配電システムのための小型大電力レクテナの開発研究", 2007.3.20-23, 電子情報通信学会総合大会, C-2-65
篠原真毅	丹羽直幹, 高木賢二, 浜本研一, 篠原真毅, 三谷友彦, 宮川哲也 "建築構造物を用いたマイクロ波無線ユビキタス電源の実現 (その3) 負荷調整可能なRF/DC変換器の開発", 日本建築学会大会, 2007.8.29-31, 予稿集D-2環境工学II pp.1255-1256
篠原真毅	丹羽直幹, 高木賢二, 浜本研一, 佐藤稔, 野木茂次, 篠原真毅, 三谷友彦, "建築構造物を用いたマイクロ波無線ユビキタス電源の実現 (その4) 高性能可変分岐アダプタの開発", 日本建築学会大会, 2007.8.29-31, 予稿集D-2環境工学II pp.1257-1258
篠原真毅	宮田侑是, 三谷友彦, 篠原真毅, 橋本弘藏, "位相制御マグネトロン位相変調特性に関する研究", 電子情報通信学会ソサイエティ大会, 2007.9.10-14, エレクトロニクス講演論文集1, p.114
篠原真毅	佐藤稔, 濱島浩志, 野木茂次, 浜本研一, 丹羽直幹, 高木賢二, 篠原真毅, 三谷友彦, "機械的に分配比を可変できる導波管型電力分配器の設計", 電子情報通信学会ソサイエティ大会, 2007.9.10-14, エレクトロニクス講演論文集1, p.79
篠原真毅	園部太郎, 三谷友彦, 篠原真毅, 蜂谷寛, 吉川暹, "酸化チタン(TiO2)に対するマイクロ波照射効果", 第1回日本電磁波エネルギー応用学会シンポジウム, 2007.9.25-27, 講演要旨集pp.118-119
篠原真毅	鈴木宏明, 三谷友彦, 篠原真毅, 親泊政二三, 渡辺隆司, 都宮孝彦, "木質バイオマスからのエタノール生産のためのマイクロ波前処理容器の開発", 第1回日本電磁波エネルギー応用学会シンポジウム, 2007.9.25-27, 講演要旨集pp.162-163
篠原真毅	山川宏, 橋本弘藏, 川崎繁男, 篠原真毅, 三谷友彦, 平野敬寛, 米倉秀明, 藤原暉雄, 長野賢司, "マイクロ波無線電力伝送技術の飛行実証とアプリケーションの開拓", 第51回宇宙科学技術連合講演会, 2007.10.29-31, 講演CD-ROM 1K12.pdf
篠原真毅	橋本弘藏, 篠原真毅, 川崎繁男, 三谷友彦, 山川宏, "京都大学における宇宙太陽発電研究", 第51回宇宙科学技術連合講演会, 2007.10.29-31, 講演CD-ROM 1K10.pdf
篠原真毅	篠原真毅, "宇宙太陽発電所SPSのためのマイクロ波送電システムロードマップ", 第51回宇宙科学技術連合講演会, 2007.10.29-31, 講演CD-ROM 1K07.pdf
篠原真毅	園部太郎, ジッタプティ・チャトロン, 三谷友彦, 篠原真毅, 蜂谷寛, 吉川暹, "可視光応答型炭素ドープ二酸化チタンの合成と光触媒作用", 2008年電気化学学会第75回大会, 2008.3, pp.
篠原真毅	根岸稔, 辻正哲, 篠原真毅, 三谷友彦, 小泉裕樹, 椎橋頭一, "マイクロ波を利用したコンクリート中の鉄筋位置及びかぶりの推定に関する研究", 第35回土木学会関東支部技術研究発表会, 2008.3.10, V-037

篠原真毅	濱島浩志, 佐藤稔, 野木茂次, 浜本研一, 丹羽直幹, 高木賢二, 篠原真毅, 三谷友彦, “建物内マイクロ波配電システムのための可変電力分配器の特性”, 電子情報通信学会総合大会, 2008.3.18-21, C-2-53
篠原真毅	川井重明, 清田春信, 川崎繁男, 篠原真毅, 三谷友彦, “5.8GHz帯送信用アクティブ集積フェーズドアレーアンテナに用いる小型増幅器の試作”, 電子情報通信学会総合大会, 2008.3.18-21, C-2-39
篠原真毅	山川 宏, 橋本弘藏, 川崎繁男, 篠原真毅, 三谷友彦, 平野敬寛, 米倉秀明, 藤原暉雄, 長野賢司, “マイクロ波無線電力伝送技術の飛行船による飛行実証構想”, 電子情報通信学会総合大会, 2008.3.18-21, C-2-126
篠原真毅	伊藤秀起, 高橋健介, 原内貴司, 岡田政也, 胡成余, 敷金平, 河合弘治, 篠原真毅, 丹羽直幹, 大野泰夫, 井川裕介, “マイクロ波整流用GaNショットキーダイオードの特性評価”, 電子情報通信学会総合大会, 2008.3.18-21, C-10-13
柴山 守	柴山 守 2008 「地域情報学の展開」、神奈川大学21世紀COEプログラム第3回国際シンポジウム「非文字資料研究の新地平」、神奈川大学、2008年2月23日。
柴山 守	柴山 守 2008 「時空間解析システム」、大学共同利用機関法人人間文化研究機構「人間文化研究資源共有化一般公開記念フォーラム」国際交流基金 国際会議場、2008年3月10日
柴山 守	柴山 守 2008 「タイ・ベトナム・カンボジア探訪-「情報」で地域をくみる>・<よむ>・<とく>-」、京都ノートルダム女子大学招待講演、2008年2月4日
柴山 守	柴山 守2008 「ハノイ・プロジェクト報告ー地域情報学の立場から」、文化遺産国際協力コンソーシアム第7回東南アジア分科会、東京文化財研究所、2007年12月20日
柴山 守	Mamoru Shibayama 2007 “Asian Maps in Area Informatics: Collection and Utilization”, PNC and ECAI 2007 Annual Conference and Joint Meetings, Main Theme: Area Studies, Then and Now, Date: 18-20, October. 2007
柴山 守	Mamoru Shibayama 2007 “Spatiotemporal Analysis of Hanoi City using Area Informatics Approach”, Special Lecture, Remote Sensing and GIS FoS, School of Engineering and Technology, Asian Institute of Technology, Thailand, 17th, September
柴山 守	Mamoru Shibayama 2007 “Introduction to Hanoi Project on Area Informatics”, International Workshop on Spatiotemporal Analysis of Hanoi using the Area Informatics Approach - Historical and Geological Viewpoint -, Vietnam National University Hanoi, Vietnam, Date: 13th, September, 2007
柴山 守	柴山 守 2007 「地域研究への情報学の応用」、第31回東南アジアセミナー『時空間で地域を観る・解く・語るー地域研究と空間情報科学ー』、京都大学東南アジア研究所、2007年9月3日
柴山 守	柴山 守 2007 「4次元GISで語る都市形成過程ーハノイの事例」、第31回東南アジアセミナー『時空間で地域を観る・解く・語るー地域研究と空間情報科学ー』、京都大学東南アジア研究所、2007年9月3日
柴山 守	Mamoru Shibayama 2007 “Survey on Theravada Buddhist Practice in Area Informatics - With Emphasis on the Temples in Northeast Thailand -”, International Symposium on Vietnam in the East Asian Buddhist Traditions and Electronic Cultural Atlas Initiative - “ECAI”, Vietnam Buddhist Research Institute, 21st August, 2007
柴山 守	Mamoru Shibayama 2007 : Introduction to Geo-temporal systems for Area Informatics, The International Conference on Technology and Culture, New Approach for Local Collaborations in GMS sub-region, Princess Maha Chakri Sirindhorn Anthrpolgy Centre, 20-21 August 2007, Bangkok, Thailand,
島上宗子	Laudjeng, Hedar, and Motoko Shimagami “Toward the Legal Recognition of Customary Forest”, the International Symposium on “Forest Stewardship and Community Empowerment: Local Commons in a Global Context”, organized by Center for Integrated Area Studies, Kyoto University, Biodiversity & Ecosystem Restoration Research Project, The 21st COE Program, The University of Tokyo, and Afrasian Center for Peace and Development Studies,
島上宗子	Petrus, Keron, A. and Motoko Shimagami “Empowering Local Institutions for Sustainable Forest Management: Lessons from “Facilitative Research” on Community Forestry in Sumber Agung Village, Lampung Province”, at the First Kyoto University and LIPI Southeast Asian Forum in Indonesia “In Search of New Paradigm on Sustainable Humanosphere”, held at LIPI (the Indonesian Institute of Sciences) on 25-26 November, 2007
島上宗子	島上宗子「住民主体を促す社会調査と外部者の関与」国際開発高等教育機構 (FASID) NGOディプロマコース『住民主体の開発とNGOー地域の現場から学ぶー』2008年2月10日
島上宗子	Shimagami, Motoko “Pengalaman Jepang dalam Pengelolaan Hutan Berbasis Masyarakat” (コミュニティを基盤とした森林管理と日本の経験) JICAグヌン・ハリムンサラク国立公園管理計画・本邦研修、2008年2月15日 [インドネシア語]
島上宗子	Shimagami, Motoko “Hutan Iriai: Pengalaman Jepang dalam Pengelolaan Hutan Berbasis Masyarakat” (入会林野をめぐる日本の経験)、Workshop “Hutan Adat dan Undang-Undang Kehutanan” (慣習林と森林法)、MUSWIL I AMAN SULSEL (ヌサンタラ慣習社会連合南スラウェシ地区第一回地区会議)、2008年3月15日
島田周平	S. Shimada 2007.11.2 “Back to the field study with fresh question in Geography” Seminar of the Graduate School of Geography, University of Ibadan, Ibadan, Nigeria
清水 展	Shimizu, Hiromu, “Paradise in Dream or for Real? Japanese Retirees Migrating to Southeast Asia,” Session on “East Asia in Motion: A Comparative

杉原 薫	杉原 薫 「時空間で読み解く歴史—英国議会資料—」、第31回東南アジアセミナー「時空間で地域を観る・解く・語る—地域研究と空間情報科学—」、京都大学東南アジア研究所、2007年9月3日。
杉原 薫	杉原 薫 「持続型生存基盤パラダイムの創出に向けて」、グローバルCOE第1回パラダイム研究会、京大会館、2007年9月10日。
杉原 薫	杉原 薫、河野泰之 「生存基盤の持続的発展を目指す地域研究拠点」、シンポジウム「動き出したグローバルCOEプログラム：地域研究の展開と研究教育体制の課題」（地域コンソーシウムなどの共催）、東北大学、2007年11月11日。
杉原 薫	杉原 薫 「資本主義の論理と環境の持続性—欧米、東アジア、熱帯の比較史から—」、グローバルCOE 第3回パラダイム研究会、京都大学生存圏研究所、2007年11月19日。
杉原 薫	杉原 薫 「南アジア史にとって『生存基盤の確保』とは何か」、日本南アジア学会20周年記念連続シンポジウム 第1回「南アジアという方法と視角—比較と連鎖」、京大会館、2007年11月24日。
杉原 薫	Sugihara, Kaoru The Humanosphere-sustainable Path of Economic Development: A Global Historical Perspective, The First Kyoto University Southeast Asian Forum in Indonesia: In Search of New Paradigm on Sustainable Humanosphere, LIPI, Jakarta, 26th November 2007.
杉原 薫	Sugihara, Kaoru Labour-intensive Industrialization in Global History: Some Thoughts on Southeast Asia, CORE University Program Workshop on 'Private Faces of Power and Institutions in Southeast Asia', Royal City Hotel, Bangkok, December 6th 2007.
杉原 薫	Sugihara, Kaoru Labour-intensive Industrialization in Global History: Its Impact on Global Income Distribution, 21C Workshop on 'Wealth and Poverty in Economic Development', Faculty of Economics, University of Tokyo, 9th December 2007.
杉原 薫	杉原 薫 「The Bumpy Road to Oxford University Press」グローバルCOE「英語出版に向けたワークショップ」第1回、東南アジア研究所、2007年12月13日
杉原 薫	Sugihara, Kaoru The West, East Asia and the Tropics in Global Economic Development, Global History Workshop on 'Cross-regional Chains in Global History', Nakanoshima Center, Osaka University, 16th December 2007.
杉原 薫	杉原 薫 「戦後世界システムと『東アジアの奇跡』—歴史的展望—」、財務省財務総合政策研究所「グローバル化とわが国経済の構造変化に関する研究会」第4回会合、2008年1月29日。
杉原 薫	Sugihara, Kaoru Kyoto University's Collaborative Research in Southeast Asia: Contributions of Area Studies, JSPS International Workshop on 'International Collaboration for Formation and Development of Science and Technology Community in Southeast Asia: Strategy for Internationalization', Pullman King Power Bangkok, Bangkok, 1st February 2008.
杉原 薫	Sugihara, Kaoru East Asia, Middle East and the World Economy: The Oil Triangle under Strain, Afrasia Centre for Peace and Development Studies Symposium 'Resources under Stress: Sustainability of the Local Community in Asia and Africa', Ryukoku University, 24th February 2008.
杉原 薫	Sugihara, Kaoru Labour-intensive Industrialization in Southeast Asia: A Preliminary Comparative Perspective, Workshop on Labour-intensive Industrialization in Southeast, CSEAS Kyoto University, 1st March 2008.
杉原 薫	Sugihara, Kaoru The Humanosphere-sustainable Path of Development: A Global Historical Perspective, The First International Conference for the Global COE. 'In Search of Sustainable Humanosphere in Asia and Africa', Kyodai Kaikan, 12th March 2008.
杉原 薫	Sugihara, Kaoru The West, East Asia and the Tropics in Global Economic Development, Santa Fe Institute Conference on 'History, Big History and Metahistory: An Approach Through the Sciences of Complexity', Moana Surfrider Hotel, Honolulu, 19th March 2008.
鈴木玲治	鈴木玲治、竹田晋也、フラマウンテイン「伝統的焼畑を営むカレン集落における土地被覆の長期的変化—ミャンマー・バゴ山地の事例—」、日本森林学会、東京農工大学、2008年3月27日。
鈴木玲治	Suzuki, R., Takeda, S., Saw Kelvin Keh and Hla Maung Thein Impact of forest fires on the long-term change in soil properties of teak plantations in the Bago Mountains, Myanmar, International workshop on Thinning as an essential management tool of sustainable teak plantation, Kasetsart
鈴木玲治	鈴木玲治、竹田晋也、フラマウンテイン「休閑地の植生回復に与える焼畑土地利用履歴の影響—ミャンマー・バゴ山地におけるカレン焼畑の事例—」、日本熱帯農業学会、宮崎大学、2007年10月13日。
高田 明	Takada, Akira Shared folk knowledge: Story-telling as a form of information flow, The Symposium on the Role of Information in Hunter-Gatherer Band Adaptations, 73rd Annual meeting of Society for American Archaeology, Vancouver, BC, Canada, 26th-30th March 2008.
高田 明	Takada, Akira Underlining pragmatic constraints: Sequential organization of "imitation" activity among the San of the Central Kalahari, The Symposium on Microethnography of Child Care across Cultures, Kyoto, Japan, 24th March 2008.
高田 明	高田 明 「文化学習再考」、シンポジウム「ヒューマンインタラクションの研究と教育：質的研究を中心に」、埼玉大学、2008年1月14日。
高田 明	Takada Akira A personal environment: Application of folk knowledge among the San of Central Kalahari The UNESCO International Experts Meeting:

高田 明	高田 明 「養育者－乳児間相互行為における注意の管理」、会員企画ラウンドテーブル「第三者の共有と共同注意との関連性およびその成立過程をめぐって」(日本発達心理学会第19回大会)、大阪国際会議場、2008年3月19-21日。
高田 明	Takada, Akira Dancing in a circle: Communicative competence in imitation activity among San children, The 106th Annual meeting of American Anthropological Association, Washington, DC, 28th November - 2nd December 2007.
高田 明	Takada, Akira Shaping trees: Shared understanding of landmarks in the Kalahari, The 10th International Pragmatics Conference, Goteborg, Sweden, 8th - 13th July 2007.
高田 明	高田 明 「G-COE企画ラウンドテーブルディスカッション:若きサイコロジストの悩み－若手から見た心理学後継者育成環境のいま、これから」、京都大学、2008年2月2日。
高田 明	高田 明 「変化する自然・社会環境における民俗知識の活用:セントラル・カラハリにおけるグイノガナの事例」、「沖縄県の環境保全と意思決定に関する学際的研究:第1回研究会」(サントリー文化財団研究助成)、沖縄大学、2007年12月23日。
竹田晋也	竹田晋也 「アンナン山脈の森林産物利用の履歴」、秋道プロ・市川プロ合同WS「熱帯・亜熱帯林の世界:東南アジアの森で何が起こったか」総合地球環境学研究所、2007年10月6日
竹田晋也	akeda, Shinya. Lac cultivation as a strategy for the 'stabilization' of shifting cultivation: A case study from a Khmu village in Luang Prabang Province, Lao PDR, International Workshop on Sustainable Natural Resources Management of Mountainous Regions in Laos, Louang Namtha Provincial
竹田晋也	竹田晋也、名村隆行、岩佐正行、ブーマヴォン プーシット、ボムチャン トゥイ「ラオス北部カム村落におけるラック栽培導入による焼畑土地利用「安定化」の試み」第119回日本森林学会大会、東京農工大学、2008年3月28日
竹田晋也	竹田晋也 「雲南とアンデスでのカイガラムシの生産と利用」、第8回雲南懇話会、JICA国際協力総合研修所、2008年3月29日
田中耕司	Tanaka, Koji. "Agro-biodiversity" in anthropogenic landscape: Customary practices re-created as countermeasures to cope with institutionalization. International Forum on Protection of Traditional Knowledge Intellectual Property Rights (TKIPR) and Sustainable Development, Kunming, China, 12th August 2007.
田中耕司	Tanaka, Koji. Origin of Rice Cultivation: A View from Crop-Raising Techniques in Asian Rice Culture, EuroSEAS 2007, University of Naples, Italy, 14th September 2007.
田中耕司	Tanaka, Koji. The Role of Oil-Producing Plants in the Border Region between Northeastern Myanmar and Southwestern China, Centennial Hall, Kyoto University, 6th December 2007.
田中耕司	Tanaka, Koji. Environmental and Energy Issues in Rural Asia: Introduction, 23rd International Symposium "Environmental and Energy Issues in Rural Asia," Regional Research Institute of Agriculture in the Pacific Basin, Nihon University, 22nd February 2008.
玉田芳史	玉田芳史 「2つの民主主義とポピュリズム」日本タイ学会第9回大会、2007年7月7日、北海道大学
玉田芳史	Tamada Yoshifumi, 'Prachathipatai kap prachaniyom song yang chon kan (in Thai)', Chiang Mai University, Seminar at the department of history, 17 July 2007
玉田芳史	玉田芳史 「タイの民主化とクーデタ」南山大学アジア太平洋研究センター、2007年10月11日
玉田芳史	玉田芳史 「タイのクーデタと民主化」アジア政経学会2007年度全国大会共通論題「東アジア民主政治の方向性」、2007年10月14日、東京女子大学
玉田芳史	玉田芳史「タイ政治の現状と展望」東京外国語大学日本タイ修好120周年特別講演会、2007年12月10日
角田邦夫	Tsunoda, K., and Yoshimura, T. 2008 History of Termite Management by Soil Treatment with Chemicals - Why Were Uses of Chlordane Banned? The 5th Conf. of the Pacific Rim Termite Research Group, Bali (Indonesia), 3-4 March 2008.
東長 靖	Tonaga, Yasushi, Fact or Fiction?: The Images of the Sufi Authors in 10th-12th Century, International Conference "The Place and Role of Dervish Orders in Bosnia-Herzegovina on the Occasion of the Year of Jalaluddin Rumi 800 Years Since His Birth", Fakultet islamskih nauka, Sarajevo, Bosnia-Herzegovina, 13th-15th December, 2007.
東長 靖	東長 靖 「イスラーム神秘主義再考」、京都宗教哲学学会第50回定例研究会(於京大会館)2007年12月8日
東長 靖	東長 靖 「現代社会におけるスーフイズム」、東洋大学研究所間プロジェクト・シンポジウム「イスラームにおける伝統的秩序規範の持続と変容」、東洋大学白山キャンパス、2008年1月26日

西 真如	Nishi, Makoto. Community-based Rural Development and the Politics of Redistribution: The Experience of the Gurage Road Construction Organization in Ethiopia, International Workshop on Local Knowledge and Its Positive Practice, Addis Abeba, 14-15 February 2008.
西 真如	西真如 「エチオピアの農村社会における住民主導のHIV/AIDS予防運動と感染者のエンパワーメント」国際開発学会第18回全国大会、沖縄大学、2007年11月24-25日
馬場啓一	T. Hayashi, M. Takeuchi, Y.W. Park, T. Kaku, M. Yoshida, T. Awano, R. Kaida, K. Baba: Xyloglucan creates tensile stress in the secondary wall. XI Cell Wall Meeting, Copenhagen, Denmark. 12-17th August 2007.
馬場啓一	T. Kaku, C. N. K. Suda, K. Baba, T. Hayashi: Xyloglucan endotransglucosylases in pea stems. XI Cell Wall Meeting, Copenhagen, Denmark. 12-17th August 2007.
馬場啓一	馬場啓一、間野絵梨子、阿部賢太郎、林 隆久「キシログルカナーゼ構成発現による木部細胞壁G層の微細構造変化」、第49日本植物生理学会年会、札幌コンベンションセンター、2008年3. 20-22日
馬場啓一	加来友美、世良田聡、馬場啓一、林 隆久「ポプラ引張あて材におけるG層局在タンパク質の解析」、第49日本植物生理学会年会、札幌コンベンションセンター、2008年3. 20-22日
馬場啓一	Sri Hartati, Enny Sudarmonowati, Yong Woo Park, Tomomi Kaku, Kei' ichi Baba, Takahisa Hayashi 「Transgenic sengons overexpressing poplar cellulase.」、第49日本植物生理学会年会、札幌コンベンションセンター、2008年3. 20-22日
馬場啓一	馬場啓一、加来友美、山西由季、海田るみ、林 隆久「ポリガラクチュロナーゼ過剰発現ポプラの性状」、第58回日本木材学会大会、筑波大学、2008年3月17-19日
馬場啓一	林 隆久、馬場啓一：さまざまな糖鎖分解酵素を発現する組換えポプラの作出」、第58回日本木材学会大会、筑波大学、2008年3月17-19日
馬場啓一	加来友美、海田るみ、澤田真千子、親泊政二三、渡辺隆司、馬場啓一、林 隆久「さまざまな糖鎖分解酵素を発現する組換えポプラの糖化性」、第58回日本木材学会大会、筑波大学、2008年3月17-19日
馬場啓一	海田るみ、加来友美、澤田真千子、親泊政二三、渡辺隆司、馬場啓一、林 隆久、Sri Hartati, Enny Sudarmonowati「熱帯樹木の糖化性. 第58回日本木材学会大会（筑波）. 2008. 3. 17-19.
馬場啓一	Sri Hartati, Enny Sudarmonowati, Yong Woo Park, Tomomi Kaku, Kei' ichi Baba, Takahisa Hayashi 「Transgenic sengon (Paraserianthes falcataria) overexpressing poplar cellulase」、第58回日本木材学会大会、筑波大学、2008年3月17-19日
馬場啓一	吉田正人、山本浩之、児嶋美穂、山下彩織、北野浩平、林 隆久、馬場啓一、谷口 亨、栗田 学、近藤禎二「組換えポプラの成長応力」、第58回日本木材学会大会、筑波大学、2008年3月17-19日
馬場啓一	馬場啓一、Park Yong Woo、林 隆久、吉田正人、今井貴規、古田裕三、神代圭輔「キシラナーゼ過剰発現ポプラの細胞壁成分分析」、第57回日本木材学会大会、安田女子大学、2007年8月8-10日
馬場啓一	間野絵梨子、馬場啓一、阿部賢太郎、林 隆久「キシログルカナーゼ過剰発現ポプラの引張あて材におけるG層の微細構造解析」、第57回日本木材学会大会、安田女子大学、2007年8月8-10日
馬場啓一	林 隆久、加来友美、馬場啓一、海田るみ、吉田正人、栗野達也「ポプラあて材G層の引張応力のしくみ」、第57回日本木材学会大会、安田女子大学、2007年8月8-10日
馬場啓一	加来友美、馬場啓一、世良田聡、林 隆久「ポプラ引張あて材におけるG層のプロテオミクス」、第57回日本木材学会大会、安田女子大学、2007年8月8-10日
馬場啓一	反町 始、馬場啓一、遠藤利恵、和田昌久、杉山淳司「日本古来の繊維植物に関するデータベース構築」、第57回日本木材学会大会、安田女子大学、2007年8月8-10日
馬場啓一	服部武文、大川久美子、藤村まどか、溝口 誠、渡邊知樹、時松敏明、乾 博、馬場啓一、梅澤俊明、島田幹夫「銅耐性褐色腐朽菌オオズラタケのシュウ酸生成酵素グリオキシル酸デヒドロゲナーゼの細胞内局在」、第57回日本木材学会大会、安田女子大学、2007年8月8-10日
馬場啓一	林 隆久、加来友美、馬場啓一、海田るみ、吉田正人、栗野達也「ポプラあて材G層の解析」セルロース学会第14回年次大会、静岡大学、2007年7月19-20日
馬場啓一	林 隆久、馬場啓一：糖化用植物および植物由来原料の調製方法、特願2008-077110（出願中）、2008.
林 隆久	T. Hayashi, M. Takeuchi, Y.W. Park, T. Kaku, M. Yoshida, T. Awano, R. Kaida, K. Baba: Xyloglucan creates tensile stress in the secondary wall. XI Cell Wall Meeting 15th August 2007.
林 隆久	林 隆久 Current situation of researches on genetically modified trees in Japan、フォーラム：少資源国日本のバイオマス研究、日本分子生物学会生化学会合同大会 パシフィコ横浜 2007年12月14日

林 隆久	林 隆久、馬場啓一 ささまざまな細胞壁分解酵素を発現する組換えポプラ、理研シンポジウム、理研横浜、2008年2月18日
林 隆久	T. Hayashi Tropical trees in Southeast Asia - A reformation scenario from deforestation, Plant Science and Genetics seminar, the Hebrew University of Jerusalem, 18th December 2007.
速水洋子	Hayami, Yoko (organized panel) Families in Flux: Southeast Asian Families Across Borders and Categories. At the 5th International Convention of Asian Scholars, Kuala Lumpur Convention Centre. August 2nd, 2007.
速水洋子	Hayami, Yoko More or Less Buddhist? Sectarian Religious Practices in Karen State, Burma. In the panel titled <i>Paths Taken and Not Taken in the Anthropology of Buddhism: Assessment of the Field and Current Directions of Research</i> . 106th Annual Meeting of the American Anthropological Association, 10 November 2007.
速水洋子	Hayami, Yoko Seeds and Taboos: Cultural Reproduction and Domestic Networks among Karen in Bago Mountains, Burma. In the <i>International Workshop on Local Knowledge and Its Positive Practice</i> . Addis Ababa, Ras Amba Hotel. February 14th, 2008.
藤田素子	Motoko Fujita, Dewi Prawiradilaga, Tsuyoshi Yoshimura. Evaluation of bird diversity in Acacia plantation forests. The Association of Tropical Biology and Conservation "Towards Sustainable land-use in tropical Asia". Kuching, Malaysia. 2008年4月
藤田素子	藤田素子、Dewi Prawiradilaga、吉村剛 鳥類の多様性を損なわない熱帯大規模植林は可能か？第55回日本生態学会。福岡 2008年3月
藤田素子	Motoko FUJITA, Fumito KOIKE. Birds transport nutrients to forests more actively in an urban landscape than a forest-dominated landscape. The Ecological Society of America 92nd Annual Meeting. San Jose, USA. 2007年8月
細田尚美	Hosoda, Naomi. The Sense of Pamilya from a Migrant-Source Village of the Philippines, International Convention of Asia Scholars 5 "Sharing a Future in Asia," Kuala Lumpur Convention Center, 2 August 2007.
細田尚美	Hosoda, Naomi. Exchange and Reciprocity among Homo Mobilitas: A View from a Samar Village, Toyo University International Workshop "A Preliminary Study on Transnational Communities in Asian Peripheries: Perspectives from Comparative Area Studies," Toyo University, 23rd November 2007.
松林公蔵	松林公蔵：人の老化とは何かーフィールド医学の現場からー。ジェーン・グドール名誉博士号受賞記念講演会、京大時計台記念館、2007年11月11日。
松林公蔵	Matsubayashi K: "The effects of Community-based Geriatric Intervention on Kahoku (KLAS)", Special Lecture in The 3rd International Symposium on Geriatrics and Gerontology "Epidemiological Studies on Aging, 2007年11月15日。
松林公蔵	Matsubayashi K: "The effects of community-based geriatric intervention in Japan as well as in Asian countries", Special Lecture in The 3rd International Symposium on Geriatrics and Gerontology "Epidemiological Studies on Aging, 2007年11月15日。
松林公蔵	松林公蔵：神経学・老年学からフィールド医学へ、第43回OSK 特別講演、京大会館、2007年12月15日
松林公蔵	松林公蔵：高齢者医療とフィールド医学へ、第15階広島老年医学研究会、ANAクラウンプラザホテル、2007年1月31日。
松林公蔵	Matsubayashi K: "Local Neurological Diseases in Tropical forest in New Guinea", LIPI, RISH, CSEAS合同シンポジウム。LIPI in Cibinon, Indonesia. 2008年2月23日。
水野一晴	Mizuno, Kazuharu 2007 Environmental Change in Relation to Tree Death along the Kuiseb River in the Namib Desert, Gobabeb (Namibia), Gobabeb Training and Research Center, 22nd August 2007.
水野一晴	水野一晴 2008 「アフリカの環境変動とその自然」、京大サロントーク、京都大学百周年時計台記念館、2008年2月12日。
水野一晴	水野一晴 2007 「アフリカの環境変動と植生の遷移」、環境問題研究会、京都、2007年11月13日。
水野一晴	水野一晴 2008 「インド、アルナチャル・プラデシュ州（アッサム・ヒマラヤ）の自然と人間活動」、日本地理学会春季学術大会、獨協大学、2008年3月29日。
柳澤雅之	柳澤雅之 「フィールドワークから紡ぎだすー地域研究を教育するー」、研究会「地域研究と教育」（京都大学地域研究統合情報センター個別共同研究ユニット「地域研究における記述」主催）、京都大学地域研究統合情報センター、2007年7月21日
柳澤雅之	柳澤雅之 「時空間で語る社会変容ー東南アジア大陸部山地ー」、第31回東南アジアセミナー「時空間で地域を観る・解く・語るー地域研究と空間情報科学ー」、京都大学東南アジア研究所、2007年9月5日
柳澤雅之	Yanagisawa, M. and Nghiem Phuong Tuyen, "A Border Town between Two Economic Tigers", Presentation at International symposium on Transborder environmental and natural resource management, December 5-6, 2007. Kyoto University, Kyoto, Japan.

山越 言	Gen Yamakoshi “Ecology and History of Peri-Village Forest in the Forested Guinea, West Africa.” International Symposium, Forest Stewardship and Community Empowerment: Local Commons in Global Context. Kyoto International Community House, Kyoto, 11-12 October, 2007.
山越 言	山越 言 「ギニア共和国森林地域における景観デザインの在来知」 「資源と地球環境学」プログラム第1回ワークショップ(秋道・門司・奥宮・山内プロジェクト合同ワークショップ) 『資源・食・健康からみた「人間の安全保障」』。総合地球環境学研究所、京都、2007年10月27-28日
山越 言	山越 言 「西アフリカのサバンナ・森林遷移帯の環境史ー原植生という幻想の行方ー」平成19年 国立民族学博物館共同研究会「地球環境史の構築に関する人類学的研究」国立民族学博物館、吹田市、2007年11月10日
山越 言	Yamamoto Hiroyuki, 2007 Restructuring the Federalism of Bangsas: Development of National/Ethnic Concepts in Sabah, Malaysia, International Symposium on Bangsa and Umma, 19th May 2007.
山本博之	山本博之 2007 「マレーシア建国過程におけるプラナカンの役割：サバのマレーシア参加の事例から」東南アジア学会第78回大会統一シンポジウム「東南アジア研究の最前線：ローカル・エリートと国民国家」、2007年12月9日。
山本衛	山本衛、中緯度電離圏イレギュラリティの構造と発生機構に関する研究、田中館賞受賞記念講演、地球電磁気・地球惑星圏学会第122回講演会、名古屋大学野依記念学術交流館カンファレンスホール、2007年9月28日～10月1日。
山本衛	山本衛、中緯度の電離・中性大気相互作用と電離圏結合、中間圏・熱圏・電離圏研究会基調講演、(独)情報通信研究機構、2007年11月13日～14日。
山本衛	Yamamoto, M., S. Watanabe, T. Ono, T. Abe, M.-Y. Yamamoto, T. Adachi, A. Saito, A. Chen, R.-R. Hsu, and P. Bernhardt, WIND, FERIX-2 and ISUAL F-region imaging: Ionospheric Observation Campaigns over Japan in 2007, 2007 AGU Fall Meeting, SA12A-01, San Francisco, December 10-14, 2007.
山本衛	Yamamoto, M., T. Adachi, Y. Aoki, A. Saito, Y. Otsuka, S. Saito, and T. Yokoyama, Multi-Instrument Observations of F- and E-Region Ionosphere Coupling over Japan, International CAWSES Symposium, SA31-3, Kyoto University, October 23-27, 2007.
山本衛	Yamamoto, M. K., T. Horinouchi, M. Niwano, N. Nishi, M. Yamamoto, H. Hashiguchi, and S. Fukao, Vertical Wind Observation in the Tropical Upper Troposphere by VHF Wind Profiler - A Case Study -, International CAWSES Symposium, P3-060, Kyoto University, October 23-27, 2007.
山本衛	山本衛 GNURadioを用いた衛星ビーコン観測用2周波デジタル受信機の開発、地球電磁気・地球惑星圏学会第122回講演会、B005-39、名古屋大学、2007年9月28日～10月1日。
山本衛	青木裕一、山本衛、斎藤享、齊藤昭則、大塚雄一、レーダーによる中緯度電離圏F-E領域相互作用の統合観測FERIX-2、地球電磁気・地球惑星圏学会第122回講演会、B005-29、名古屋大学、2007年9月28日～10月1日。
山本衛	斎藤享、小川忠彦、山本衛、橋口浩之、MUレーダー超多チャンネルイメージングによる中緯度電離圏Type-1エコーの空間構造の研究、地球電磁気・地球惑星圏学会第122回講演会、B005-26、名古屋大学、2007年9月28日～10月1日。
山本衛	山本衛 衛星ビーコン観測用2周波デジタル受信機 -システム開発とテスト観測状況-、電離圏の利用と影響に関するシンポジウム、(独)情報通信研究機構、2007年11月15日。
山本衛	田畑悦和、橋口浩之、山本真之、山本衛、柴垣佳明、下舞 豊志、山中大学、森修一、Fadli Syamsudin, Timbul Manik、ウィンドプロファイラー観測に基づくインドネシア海洋大陸における日変化特性、第22回大気圏シンポジウム、2008年2月27～28日、JAXA宇宙科学研究本部、相模原。
山本衛	斎藤享、深尾昌一郎、山本衛、大塚雄一、赤道大気レーダーにより観測されたプラズマバブルFAIの衰退過程、第22回大気圏シンポジウム、2008年2月27～28日、JAXA宇宙科学研究本部、相模原。
山本衛	大塚雄一、小川忠彦、横山竜宏、山本衛、Effendy, A., K. Patra、インドネシアにおける沿磁力線不規則構造のVHFレーダー観測、第22回大気圏シンポジウム、2008年2月27～28日、JAXA宇宙科学研究本部、相模原。
山本衛	深尾昌一郎、Hubert LUCE、山本衛、橋口浩之、MUレーダーによる対流圏界面のケルビンヘルムホルツ不安定の観測、第22回大気圏シンポジウム、2008年2月27～28日、JAXA宇宙科学研究本部、相模原。
山本衛	山本真行、横山雄生、渡部重十、阿部琢美、羽生宏人、大塚雄一、斎藤昭則、山本衛、小野高幸、S-520-23号ロケット放出リチウム共鳴散乱光による熱圏風測定、第22回大気圏シンポジウム、2008年2月27～28日、JAXA宇宙科学研究本部、相模原。
山本衛	青木裕一、斎藤享、足立透、山本衛、統合観測FERIX-2による中緯度電離圏E-F領域相互作用に関する研究、第22回大気圏シンポジウム、2008年2月27～28日、JAXA宇宙科学研究本部、相模原。
山本衛	山本真之、岸豊久、中村卓司、山本衛、橋口浩之、深尾昌一郎、西憲敬、MUレーダーとレイリレー/ラマンライダーによる中緯度域の巻雲観測、第22回大気圏シンポジウム、2008年2月27～28日、JAXA宇宙科学研究本部、相模原。
山本衛	山岡雅史、足立透、山本衛、Alfred Chen、Chun-Chieh Hsiao、Rue-Ron Hsum FORMOSAT-2衛星搭載光学観測器ISUALによる630nm大気光の鉛直構造解析、第22回大気圏シンポジウム、2008年2月27～28日、JAXA宇宙科学研究本部、相模原。
山本衛	奥村健太、山本衛、デジタル受信機を用いた衛星ビーコン観測からの電離圏全電子数推定法の開発、第22回大気圏シンポジウム、2008年2月27～28日、JAXA宇宙科学研究本部、相模原。

吉村 剛	吉村 剛 「シロアリ・環境・住宅」、フクビ化学工業（株）特別講演、ホテルグランヴィア大阪、2008年3月12日
米澤 剛	米澤 剛 「GISを用いたベトナム・ハノイの都市形成」、日本情報処理学会 人文科学とコンピュータシンポジウム、京大会館、2007年12月13日.
米澤 剛	Yonezawa, G. 3D Topographical Analysis in Hanoi, Workshop on Spatiotemporal Analysis of Hanoi using the Area Informatics Approach -Historical and Geological Viewpoint-, Hanoi National University, 13th September, 2007.

8 新聞記事	
荒木 茂	荒木 茂「グローバル化とアフリカの焼畑： 地域から読む現代、25」、『京都新聞』、1月28日
梅澤俊明	梅澤俊明 「樹木の抗菌成分のcis-trans異性を制御できる酵素」、『化学』 vol. 63, February 2008.
梅澤俊明	梅澤俊明 「ヒノキレジノール合成酵素について」、産経新聞（12月11日）、読売新聞（12月11日）、日刊工業新聞（12月12日）、日本経済新聞（12月17日）、京都新聞（12月11日）及び朝日新聞（12月12日）
岡本正明	岡本正明、「地域から読む現代 グローバル化の中で 3 「ヤクザ」と政治(バンテン州)」、京都新聞、2007年6月1日、11面
岡本正明	岡本正明、「地域から読む現代 グローバル化の中で 4 「企業家知事の誕生(ゴロンタロ州)」、京都新聞、2007年6月8日、15面
川井秀一	生存圏研究所「京大大学生存圏研究所とKM Hybrid Plantation SDN. BHDが人工林による持続的な森林経営を目指し、共同研究を開始」、NHK放送（2007年12月18, 19日）、日本経済新聞、毎日新聞、日刊工業新聞、京都新聞（2007年12月19日）
木谷公哉	「東南アジアフォーラム開催 持続的生存圏の構築目指し 京都大学と科学院が協力 テレビ会議で大いに討論」、『じゃかるた新聞』（インドネシア発行）、2007年11月30日。→第1回京都大学東南アジアフォーラム(2007年11月26日-27日インドネシア科学院で開催/G-COEが共催)における遠隔会議利用ということで、掲
小杉泰	小杉泰 「世界史の研究」ーイスラーム原理主義ー、山川出版社、No. 611 40～43項、2008年2月
小杉泰	小杉泰 「世界史のしおり」連載ーイスラームはどう変わってきたか？ムハンマドからホメイニまでー、第5回 "西洋"の衝撃とイスラーム改革、帝国書院、2007年10月
小杉泰	小杉泰 「世界史のしおり」連載ーイスラームはどう変わってきたか？ムハンマドからホメイニまでー、第6回 第3次中東戦争後のイスラーム復興、帝国書院、2008年1月
小林 知	小林 知 「過去と向き合う」『地域から読む現代 - グローバル化の中で-』第18回、2007年8月24日、京都新聞第18面
島上宗子	島上宗子「地域から読む現代——グローバル化の中で⑥：『森の守り人』（パル市）」京都新聞第11面、2007年6月22日
清水 展	清水 展 2008 「ハパオ村の植林運動」『月刊みんぱく』 2008年1月号
杉原 薫	杉原 薫 「(経済教室)原油高騰下の世界の貿易収支」、『日本経済新聞』、2008年2月25日.
高田 明	高田 明 2005 「ナミビアのフィンランド人」、『関西日本・フィンランド協会ニュース』、4-5頁.
田中耕司	田中耕司 2007 「『東アジア共同体』の『公共財』としての農業」『農業』1493: 4-5.
田中耕司	田中耕司 2007 「コメント：『地域』と『地域研究』」『学術の動向』135: 52-53.
田中耕司	田中耕司 2007 「地域から読む現代5：熱帯林保全と地域住民」『京都新聞』2007年6月15日:第14面.
田中耕司	田中耕司 2007 「一般教育としての『農学』」『農業』1499: 4-5
玉田芳史	Tamada Yoshifumi. Prachathai (Online journal, http://www.prachatai.com/) 21 July 2007, "Kanmuang thai ruamsamai, ratthaprahan ratthathamnanun, prachathipatai jak mummong sattarajan chao yipun" (2007年7月17日のチェンマイ大学での講演の要旨を紹介).
玉田芳史	玉田芳史 『東京新聞・中日新聞』2007年12月25日、「タイ総選挙」に関する談話を国際欄に掲載
谷 誠	谷 誠 「花粉症の警告：森林利用と環境の抜本的施策を」、『毎日新聞』 2008年4月20日.

林 隆久	林 隆久 「(サイエンス)最新技術を駆使した森林復元」、『日本経済新聞』 2008年3月30日.
林 隆久	林 隆久 「(インタビュー) 植物で未来をつくる」、松永和紀著、2008年3月30日、化学同人出版.
藤倉達郎	藤倉達郎 「『変革と平和』-制憲議会選挙をひかえたネパール」『日本ネパール協会会報』 207号9頁 (2008年3月号)
藤倉達郎	藤倉達郎 2007 「Researcher's Eye: ネパールのせまいベッド」『三田評論』1102号57頁
細田尚美	細田尚美 2007 「ガラス越しの接触」京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科地域進化論講座リレー・エッセイ第12回 http://www.asafas.kyoto-u.ac.jp/asia/chiiki/
水野一晴	水野一晴 2007 「アフリカ3山の高山植物-大地溝帯が生んだ奇観と熱帯植物-」『Newton』、2007年11月号46-59.
水野一晴	水野一晴 2008 「温暖化アフリカの現状」、NHK, 衛星第一放送 (BS1)、『きょうの世界』、2008年1月10日.
柳澤雅之	柳澤雅之 「(地域から読む現代-グローバル化の中で-) 第12回」 「日本人のふるさと？」(チエンコア村)」、『京都新聞』、2007年8月17日

9 特許	
篠原真毅	篠原真毅, 三谷友彦, 宮川哲也, 松本紘, 丹羽直幹, 高木賢二, 浜本研一, 無線電力受電アダプタ, 特願2007-202305号, 2007
篠原真毅	橋本隆志, 藤田晋, 篠原真毅, 三谷友彦, 松本紘, 車両用給電装置, 特願2007-237130号, 2007
篠原真毅	丹羽直幹, 浜本研一, 高木賢二, 佐藤稔, 野木茂次, 篠原真毅, 三谷友彦, 無線電力の可変分配方法及び装置, 特願2007-262793号, 2007
篠原真毅	園部太郎, 吉川暹, 篠原真毅, 三谷友彦, 蜂谷寛, マイクロ波を用いた不純物ドーブ金属酸化物の製造方法, 特願2008-42652号, 2008
林 隆久	林 隆久, 馬場啓一 糖化用植物および植物由来原料の調製方法, 特願2008-077110, 2007

	10 受賞	
柴山 守	柴山 守、第2回モノづくり連携大賞・特別賞、(受賞対象：『CD-ROM版くずし字解読用例辞典』著者：山田奨治・柴山守編) 日刊工業新聞社、2007年	
島田周平	島田周平 日本地理学会賞(優秀賞) 2008年3月	
角田邦夫	角田邦夫 国際木材保存学会 (The International Research Group on Wood Protection) 名誉終身会員(Honorary Life-Long Member)	

11 G-COE関連国際会議の成果としてのプロシーディングス等出版物			
会議開催日時	主催	プロシーディングス等	
2007/11/26-27	GCOE, HAKU and LIPI	Proceedings: LIPI SOUTHEAST ASIAN FORUM Sustainable Humansphere in Indonesia	
2007/12/5-7	CIAS and GCOE	CIAS Discussion Paper No.4: Transborder Environmental and Natural Resource Management. Wil de Jong (editor) 223pp.	
2007/12/6-7	JSPS, NRCT and GCOE	<p>Proceedings: Private Faces of Power and Institutions in Southeast Asia</p> <p>Proceedings Volume 1 "Entrepreneurship in East Asia: Establishing a New Model of East Asian Political Economy " Social Resistance and Good Governance"</p> <p>Proceedings Volume 2 "Changing "Families"; Comparative Asian Economic History: Institutions and Environment"; and "Political Networks in Asia"</p>	
2008/02/21-23	LIPI and GCOE	Proceedings: "Humansphere Science School Feb 21 to 22, 2008"	
2008/2/1-2	GCOE and JSPS	Islamic System, Modernity and Institutional Transformation	

発行日：平成 20 年 5 月 31 日

発行者：グローバル COE プログラム

「生存基盤持続型の発展を目指す地域研究拠点」事務局

住 所：〒606-8501 京都市左京区吉田下阿達町 46

U R L : <http://www.humanosphere.cseas.kyoto-u.ac.jp/>